

寒垢離の霜蹴て歸る洗足哉
 寒垢離のくるりと月に背きたる
 寒垢離や灯影にちらと玉の肌
 ふつゝかの大工の弟子や寒詣
 すね長き男走るや寒詣

士 櫻 村
 東 村
 秋 航
 竹 保
 藜 村

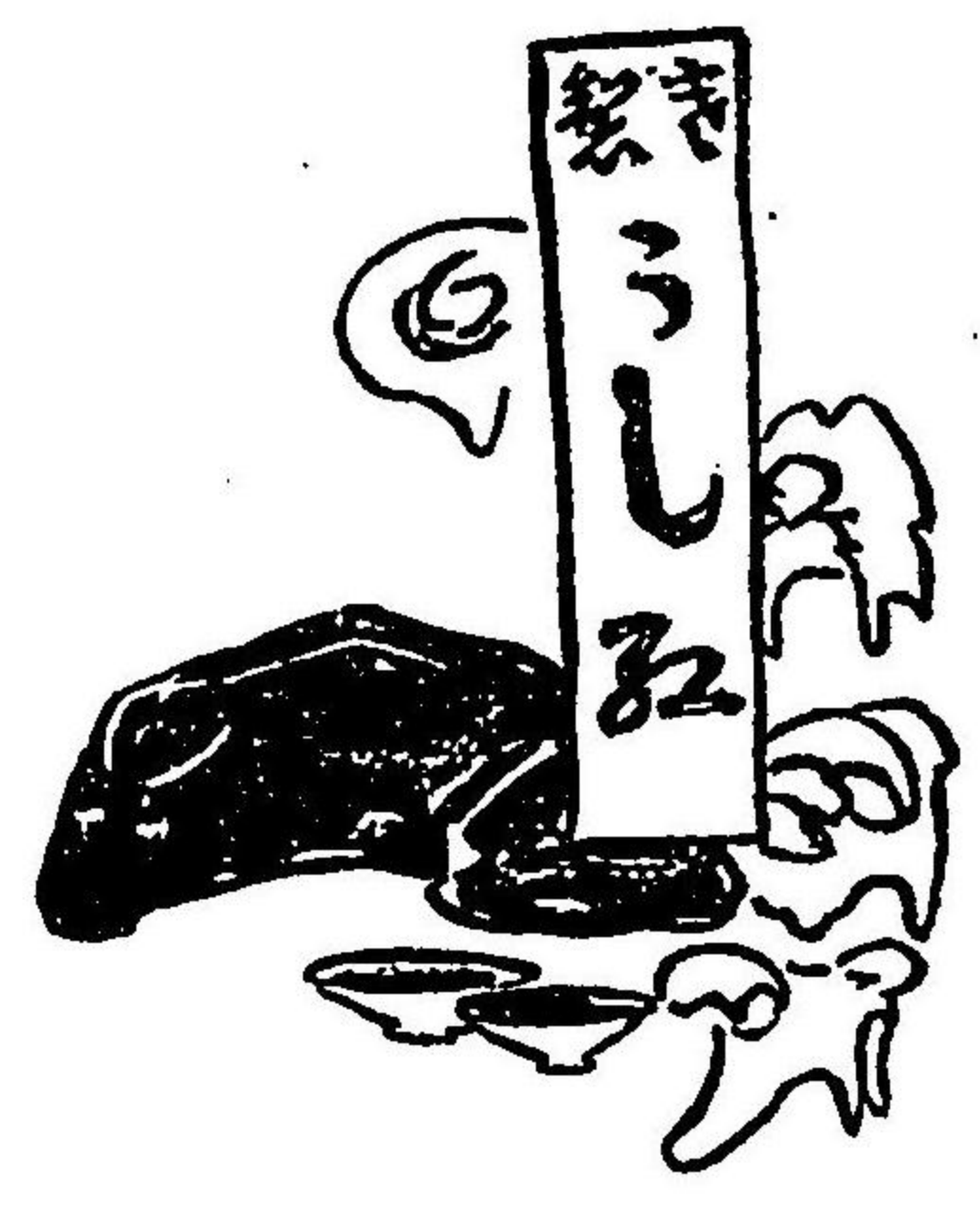
淺草神社の流鏑馬 (五日)

昔は午過ぎから社で祝詞や神樂のあつた後で、麻社袴を着た男が鬼と云ふ字を書いた竹の先へ附けて、鬼の假面をかぶり鬼の扮装をしたもの、前驅をして走り廻る。と狩衣姿の騎馬武者が鬼を逐ひ拂ふて本堂を一周し、其年の惠方から始めて天地四方へ假りに作つたこしらへもの、弓で六筋の矢を放つたもので有るが、今の流鏑馬は殆ど形式ばかり残つて居て、弓矢の役の神官が馬にも乗らず、竹づくりの形ばかりの弓で、社前に設けられた鬼の字を書いた的を射ると、鬼面を被つた老爺さんが社殿から飛出して逃げる。逃げるあとから、それと云つて小供等が老爺さんを逐驅けるまで有る。尙此矢を拾つて雷除のお守にする云ふことは古くからの信仰で有る。

丑 紅

年が明けて寒に入ると、丑の日には必ず化粧品店や小間物店に、『今日うし紅』と書いたピラ紙が下る。寒中に製へた紅は最も品が好いと云ふので、此日は殊の外にいろいろの店頭も女客で賑ふ。

| | |
|----------------|---|
| 賣人の唇寒し寒の紅 | 丹 |
| 寒紅や引船新造相似たり | 碧 |
| もの堅き身のたしなみや寒の紅 | 淡 |
| はのめくや寒紅賣の爪の先 | 可 |
| 燈影や寒紅光る化粧の間 | 孤 |
| 丑紅やうしと見し人美しき | 紫 |
| | 蘭 |
| | 芽 |
| | 重 |
| | 水 |
| | 成 |
| | 村 |



消防出初式 (六日)

午前七時の警鐘勇ましく全市に響き渡るや、満都の消防夫は皆それ／＼所屬の消防署に集まり、八時頃より列をなして日比谷の式場に押寄せる。やがて號砲を合圖に式が始まると、警視總監は馬上で

巡視検閲を始める。それがすむと八臺の蒸汽脚筒は、馬蹄の音振鈴の響勇ましげに、分列式を行ひ場内を一周する。

式が終ると直ちに面白い餘興が始まる。第一番はいつも江戸名物の一つに数へらる、梯子乗り離れ業。喇叭を合圖に木遣の咽を絞つて廣場の中央に押寄せ、全組二つに別れ、始は二十三本、次には十七本の三間梯子を并べて整列する。再び喇叭を合圖に手ん手に猿の如く梯子の頂上に馳け上ると見る間に、一本遠見、谷覗き、鯨鯨立ち、背龜と、様々の離れ業を演れば、梯子は寒い風に鳴つて弓の如くにしはる。刺叉乗、避難競争、障害物競争、放水競争等、本職だけにとり／＼に面白く、橋上火災と云ふのは殊の外、見物で有るが、風が強いと時々中止されることもある。毎年一、二の寒風を物ともせず、凍つた空に澄み渡る木遣の長き調の後に、此式を見物の物好の連中、日比谷に集ること宛がら雲霞のやう。式場のぐるりはいつも十重二十重に取捲かれ、殆んど身動きも出来ぬ。江戸の名物と歌はれた大火は漸く其跡を絶つて、任俠を以て生命とした江戸ッ子の次第に衰へ行くに方りて、消防出初式の年々盛に行はるゝはせめてもの思ひ遣り有る。尙田舎では出初式は大抵四日と決まつて居り、或は五日の處もあるが、東京のは明治四十年から六日に行ふことゝなつた。

曉や出初の半鐘打込んだり
出初式江戸は男の花の春
千雅女
絆纏の紺匂ひ立つ出初式
宇岐
出初式富士正面に町寒し
素泉
朝日影出初の階子纏かな
碧童
今のやうな出初式は、幕府時代には勿論なかつたもので、松の内に火事でもあると、其戻り道で梯子乗位を行き、所謂出初式と云ふのは、明治八年一月四日に行つたのが最初で有る。それから消防仲間専ら唄はるゝ木遣と云ふのは、舊は麻の裁附袴に白足袋を穿き、木綿の格子縞の着附で、右手に日の丸の大扇をもつて唄つたもので、これと梯子乗りとは、消防夫の嗜みとしてひどく賞ばれたもので有る。

松の内

元日より六日までを松の内と云つて、六日の夕刻松飾を取拂ひ、松の小枝のみを元の處にさし込み置くことは昔と變つたことはない。以前は松飾を取拂ふためにや、年を越ゆるの心にて六日の日を六

日年越と云つて、蕎麥を食つて祝ふ家が多かつたが、今はあまりに行はれて居らぬらしい。けれども、蕎麥屋にきけば平日よりは蕎麥の出が少しは多いと云ふ。

尙此夜昔は「厄拂」と云つて、大晦日や節分の夜のやうに、厄難を拂ふ言葉を送るながら、錢を乞ふものがやつて來たり、獅子舞の笛大鼓の音が夜半まで喧しいと云ふことが普通で、明日の七種菜をはやしたのも今夜で有るが、いづれも今はすたれて了つた。

人顔の若ううつるや松の内
我門の出入めづらし松の内
口紅や四十の顔も松の内
松の内日々來るはがき哉
松の内を舞子のやうな娘哉
酔ひつれて雪駄ならずや松の内
松の内貧乏公卿の衣裳哉
松過ぎし人の心や杜甫が錢
松過の臺所見たり近衛殿

沾 德
才 磨
子 規
格 堂
虚 子
紅 葉
牝 羊
紅 葉
東 洋
城

七 草 (七日)

支那の習慣にては、元日を鶏、二日を狗、三日を猪、四日を羊、五日を牛、六日を馬、七日を人となし、正月の七日を人日と云つて居る。

俳人詩人の人日と云つて句を讀み詩を賦し、歌人の七草と云つて歌を咏ずるは此日のことで、昔は五節句の一に數へ、若菜の佳節と云つたもので有る。

七種とか七草と云ふのは、此朝七種の野菜を粥に入れて食ふと云ふ舊來の習慣から來たものでらうが、今は本當の七菜で粥をたく習慣は漸く廢れて、大抵は薺、小松菜などの一二種を用ふるのみやうで有る。

昔の所謂七菜とは菘(青)蘿蔔、芹、薺、五行、紫莢、佛の座の七種にて、最初正月の子の日に、小松を引くと同時に摘み來つた菜を子の日の若菜と云ひ、後には之をもつて七種の粥をたくに至りたるにて、其頃は七日の朝俎の上にて七菜を打ち噍し、粥に煮て夕食に用いたもので有るが、中古に至り六日の宵から七日の曉までに七度之を打ち噍し、その朝粥として食するに至つたのだと云ふ。

尙七種の若菜を始めて獻上したのは、古今要覧稿によれば嵯峨天皇の御時で、下つて江戸時代には

若菜の御祝儀と云つて、諸侯が登城をしたもので有る、其頃民間に於ては、七菜を俎の上に置き、
くさなづなとらどのとりこ』と唱へつゝ、火箸、搦木、庖丁、杓子、わり薪の五種にて交るく打
囃したものださうな。

此日を廿日正月に對して七日正月と云ふ。

七種の種類については古來諸説あり、或は稻麥豆粟小豆黍小麦、或は白穀大豆小豆黍粟柿苳子或
は米大豆黍粟苳子薯蕷など云ふ、甚だ變つた説もあれど、それにしては齊などを用ふる習慣が今
日まで残りさうにも思へぬから、種類こそ異れ、七菜の方が矢張正しいやうに思はれる。

| | |
|----------------|-----|
| 我庵も人の日なれば芹薺 | 吳山 |
| 人の日や短冊のぞむ旅の衆 | 葛三 |
| 人日に首くゝる身は有り佗びて | 湖水 |
| 人の日を暇なき身の暇かな | 四方太 |
| 七草や拍子とる子の握ばし | 湖春 |

| | |
|-------------|----|
| 七種や明ぬに聳の枕元 | 其角 |
| 七種や袴の紐の片結び | 蕪村 |
| 七草に鼠が戀も別れけり | 几董 |

| | |
|----------------|-----|
| 早かるがやかましかるが薺哉 | 立島 |
| うち囃し男も嘶よなづなの夜 | 白雄 |
| 大ぞらに囃すなづなや一つかみ | 抱儀 |
| それともに叩け薺の薄氷 | 芙蓉雀 |
| 濡縁や薺こほるゝ土ながら | 嵐雪 |
| 其なづな有たけ買はん娘の子 | 一茶 |
| 組になづなのあとの匂ひ哉 | 鳴雪 |
| 薺粥薺の縁たゝよひぬ | 四方太 |

御講書始 (七日)

大抵一月七日と定まつて居るので有るが、時ありては御都合にて其日を變へさせられることあり、
今年十月十日を以て行はせられた。

例により天皇陛下には大元帥服菊花大綬章御佩用にて、午前十時皇后陛下にも同刻鳳凰の間に御
進講者宮内大臣等に拜調を給り、やがて天皇陛下には殿の正面に、皇后陛下には其左に御着席、今
年は穂積博士は希臘羅馬の古典に顯はる、祖先崇拜の事蹟、三島博士は周易大有の卦、猪熊翁は出雲
風土記國引の條について、何れも約三十分宛進講し、十一時四十分御式は終つたので有るが、進講者
と云ふのは豫め御選定、數日前に發表されるので有つて、進講すべきものは洋書漢書國書の各一節と
決まつて居るので有る。

さて愈御式が終つた後には、進講者に對しては應接間にて酒饌の外に白羽二重一匹と御目錄の御
下賜あるのが恒例で有る。

氷川神社の探湯式 (七日)

此日小石川林町の氷川神社で探湯式と云ふものがある。昔は一月十七日の淺草神社に於ける湯立
と同じやうに、お湯の沸ぎつたお釜の中へ、巫子が笹をつき込んで其湯の滴を浴びたもので有るが、

今は只其湯を掬んで神前に供へるばかり、そして其後で一人の巫子が七座の神樂を舞ふのであ
る。

陸軍始觀兵式 (八日)

陸軍始觀兵式と云へど、今は此日を以て陸軍の事務が始められるのではない。其實は六日が陸軍
始になつて居る。

陸軍始觀兵式は天長節の觀兵式と同じく、陛下行幸親しく東京の各兵を御檢閲あらせらるゝので
有るが、必ず晴天でなければ行はせられぬことになつて居て、微雨が有つても、雪がチラついても見
合せさせられることが多い。

| | | |
|---------------|---|---|
| 鹵簿過ぐる陸軍始の日和かな | 丹 | 鶏 |
| 神風を旗に陸軍始かな | 梅 | 求 |

初薬師 (八日)

薬師は人間の苦を醫すると云ふことから、醫王又は薬王師と云つて、八日には本郷四丁目、愛宕町

など方々の薬師が賑ふが中に、茅場町の薬師は殊の外に参詣人が多い。茅場町の薬師如来は恵心僧都の作で、此地が日枝神社のお旅所で有つて。薬師如来は山王の本地佛だと云ふ所から、慈眼大師が此處に安置したのだと云ふ。

講道館の鏡開

小石川富坂町の柔道教場講道館では、例年八日を以て鏡開を行ひ、嘉納館長の挨拶について色々型の型、亂取などあり、昇段者の披露終りて、來會者一同へお汁粉と四斗樽一本半の焼餅と、一本の揚餅との御馳走が出る。

初金刀比羅 (十日)

虎の門外の金比羅さんでは午前三時に清祓が有つて、四時にはもう門が開かれたが、それでもその以前から既に門前に詰めかけた参詣者尠からず。門があくと同時に、何れも真先に神の鈴をチャラン／＼と今年幸運の綱を手繰つて、最初のお札を受けやうものと雪崩を打つて轟々と押かける。本堂の左手では、數名の神官が急がしうにお供物お守護札、御符等を賣つて居る。其前では御鏡を入れた

箱を載いては振り、振つては押戴き、鏡を引いては初春の吉凶を占ふ者數を知らず。側に控へた賣卜者運勢判断も二人や三人ではないが、それでも何も大繁昌。本門は勿論裏門の雨側では、蕪王屋や其他の縁喜物の小店がズラりと列んだが中に、紙に包んだ御供餅を置く茶店の小娘は、カチ／＼と頻りに切火を振りかけて客を呼び、あの狭い境内にも活動寫真や手品などが、八ヶ間敷嘶し立てて居る。其間を方々の講中から、御供米の俵や奉納の野菜を大八車に満載し、大小の旗幾十となく押立て、参詣するもあれば、市内消防六區の消防夫十五六名は、木遣節勇ましく静かに練つて参る。其他美々しく飾つた粹な人々、俳優、力士なんどの参詣引きも切らぬ中に、拜殿とお百度石の間を南無妙法蓮華經々々と、珠數爪線りながら往復する人も少くない、金比羅さんの信心家と聞いた東郷大將の令夫人令嬢も屹度参詣されたことだらう。



一月十日
初金比羅

初場所大相撲

其昔三月に興行されて居つた春の本場所相撲は、明治になつて一月に興行されることとなつて、大抵は十日を初日として八日の朝大番附を發表し、九日午前十時頃から、呼出奴等四人乃至十人宛一團になつて、江戸太鼓、新山太鼓、本所太鼓、浅草太鼓、品川太鼓、四谷太鼓の六組に分れて、所謂六柄の觸太鼓が市中を廻りある。そして以前は回向院の境内に其場所中を間に合せの假り造りの小屋掛をして、相撲がすむと其小屋は再び取拂ふことになつて居たので有るが、四十二年の五月場所以後、昔の羅馬のアンフィシアターのやうな常設相撲場の國技館が出来てから、天幕張の趣のある昔風の相撲場は跡を絶つて、バタ〜と騒々しい天幕の隙目洩る川風に吹かれながらも、棧敷の上で拳には汗を握つて居る看客の寒さうな姿はもう見られなくなつた。

初場所 や晴天十日 江戸の春 松 濤 樓
 初場所 の大番附や江戸の春 烏 堂
 川 風 に一月場所の賑かな 麥 人
 試みに最後の相撲小屋で見た一月場所のスケッチを擧げて見やう。

一月場所

四十二年の一月場所の七日目である。
 北方の天には雲を孕んだ灰色の霞が途切れ〜に横はり、寒い空ツ風がプ〜と絶間なく砂を吹き捲つて近頃無き日だ。乳は女よりも大きく、腹には太鼓を載せかけた様な小笠原に、見事に叩き附けられた伊勢の濱が、土俵を下りるや下りない中に、例の裁着を穿いた、若い小男の呼出しが、既に土俵の真中に駆け上つて、マラツと扇を開いて、口前に當て、東駒ヶ嶽、西玉櫛と、妙な所にアクセントを附けて、黄色い聲を長く〜引張つて呼んで居る。あれでは逆も全體ではない、半分の人にも聞かぬだらう詰らないのだが、然し趣のある役だと思つて居る間に、駒も玉もホイと下ヲラを脱ぎ棄て、夫々東と西の柱の側に立つ。東の方には、小笠原がまだ柄杓を掲げて、駒の受取を待つて居る。
 麻裏草履を穿いた、新しい行司が出て来て、前の行司に向つて、恭しく敬禮して、草履を穿かぬのと入替はる。新しい行司は二歩許前へ進み出て圓扇を胸の方まで持上げて「片や駒ヶ嶽」と謂つて、三尺許の圓扇の房をマラツと垂れる。破れ天井の幕を濡れ来る冬の日が閉に方つて、房の紅色がマツと表える。
 行司の呼聲が終つて、丁度善からうと思ふ頃に、剛力士は、云ひ合せた様に倏然として土俵の上へ對立し、互に顔を見合せた様な見ゆ様な振をして、其儘ホイと膝がんで、大きな手で調子を揃へて、マンマンと柔しく拍手を三つ拍ち合ひ、チホイと腕腕を擦けて踊りさうな手つきをする。宣戰の儀式で有る。之が済むと互に立つて本陣の柱に向ふ。赤い布を斜にくる〜と捲き附けた柱には、大きな御幣が結び附けてあつて、それが川風にゆらゆら〜と揺れて居る。双方此柱に向つて、始めは大きな四股から、段々小さいのを三つばかし〜と踏みつける。盛り上げた土俵の底で、ドシン〜と地震がする。やがて二人はチホイと柱の根にある紙包の籠を右手で摘まんで、振向いてマラ〜と撒きながら、互に土俵の真中に到つて蹲む。

寒い川風がヒューヒューと音をさせて、ホロホロの森天井がバタバタと時を置いては大波を打つ。入口に建て井へてある大小

数百の轆はバタバタと小さな小波を打って騒がしき一通りでない。先程からにが盛な漬した様な顔をして、土俵の真中を覗いて仁王立になって居た行司は、右足を一步後へ引いて膝を少しばかり

り斜にし、團扇を腰の當りまで上げて少し斜に持ち、駒の頭の邊に眼をつけて居る。黒い團扇が洩れ来る日光に照れてヒカリと光る。今迄踏んでツツとして居た玉椿は、両手を地べたに突いて首を差延べ、體を低うして敵の顔を覗み上げ、猫が鼠を捕る時の

やうな風をする。恐ろしい顔附だ。覗まれた駒は氣のない様な顔附で、右手を地に突いて玉の腰の邊をポーと見て居る。暫くすると駒がヤツと謂ひ様本立に立ちかいて、両手でチヨイと玉の肩を叩いて見る。玉は動きさうにもない。観衆が一時にドツと笑ふ。四本柱の根に坐つて居る年寄はツイツと凝視した儘、ニヤリとさせぬ。

其間に駒が先に玉が後から立つて、溜へ水を飲みに行く。駒はグツと一口飲んで肩から腕へかけてツツと水を吐き付け、吊つて有る紙片をもぎ取つて、一寸口を拭い、夫から兩腕をスーッと拭き取つて、玉の方の様子を覗つて居る。玉は其間顔をひれつたり、體をひれつたりして、やがて、紙片をちぎつて頻りに鼻汁をかんで居る。打合せた様に双方が土俵へ上ると、又柱の根元へ風で捲んだ鹽をバラバラと振りながら、前の様に中央に至つて双方蹲んで了ふ。今度は猫のやうな玉が先に立ちかいて、チヨイと駒の肩へ飛び附いて見る。にが盛な漬した様な行司が「まだ」と呼ぶ。氣の乗らぬ様な顔をして居た駒がニヤリと笑つて身を反らす。可愛い顔だ。駒が又先に退いて水を吹きに行く。玉は一口飲んで又鼻汁を拭き出す。二人は又鹽を撒きながら、儼然として土俵の真中へ進む。行司が團扇を斜に差し上げて横向になつて、「マダ」と云ふ。駒が又ヨツと謂つて立ちかいて玉の肩を抱きかける。噛も飲まず、噛もせぬ観衆が、又一時にドツと笑ふ。

今度は玉が先に立つて、溜りへ行つて鼻汁をかむ。駒は柱の陰から一寸西の方を見渡し、両手で腹の皮を撫で見て、ハーツと喚をなく。兩虎は鹽を撒きながら又儼然として進み出でる。短かい冬の日が、屋根の蔭の裂目から光明のやうになつて、四方に光の矢を放つてる。寒い川風に蔭が動く度毎に、日の光がヒカリと自分の額口を照らす。眼鏡が反射して角力の顔がポーとする。西の隅の方で、ヤイ畜生ッ、馬鹿ッ、と云ふ聲がする。喧嘩が始まつたらしい。「ヤレッ、積み出せッ、止せッ、ヤレッ、四方八方から彌次馬の聲が起る。暫く西の隅に集つて居た視線が又直に土俵の上に歸る。蹲んで居た玉が両手を突いて、愈々首を突出す。駒の眼が次第に鋭くなる。突いて居た両手をハツと打つて、腰の邊りに力を入れる。行司が「まだ」と見合して見合して」と早口に叫ぶ。玉が掌の甲を一寸背めて眼を摩する。鼻の下を撫で見る。體は段々

と血眼になつて連呼しつゝ、行きつ戻りつして居る。やがて玉の足が土俵の外に出かゝつたなと思ふ間に、駒が長い足を玉の小股に引懸けて、雜作もなく土俵の外に蹴倒す。今迄息を殺して見て居た観衆が一時にローと呼ぶ。四本柱の主は瞬もせずツツとして居る。行司の團扇は先程から、東に向いて斜に上つて居る。土俵の上には帽子が飛ぶ、襷袢が飛ぶ、外套が飛ぶ、大きな坐布團の兩さへ降つて居る。駒は其中を儼然として大股に歩いて、土俵の上り口へ行つて、くるりと振り返つて蹲んだ。行司が嚴めしい聲で「駒ヶ嶽」と呼ぶ。中入の柏子木がカンカンと三つ程鳴ると、又してもエホ茶イと云ふ聲が四方に起る。屋根ではホロホロが頻りにバタリと大波を打つて居る。喧嘩はまだ終らぬらしい。

翌四十三年の一月場所には久し振りで珍らしい台覧相撲が有つた。序に其時の様子を日記から引い

て見やう。

台覧相撲 (四十三年)

一月九日皇太子殿下國技館へ行啓、明治十七年以來久しぶりの台覧相撲で三段構への古式が有ると云ふので、古式の相撲が陪覽したさに、思ひ切つて始めてシルクハットと云ふものを買つた。

たつた此間までは「シルクハットで電車は變だ」と云つて人を笑つて居たものが、いざとなつて見ると、矢ッ張護國輪の車に乗るのも馬鹿くしいと云ふので、靴をさきさきにして電車に乗つた。電車の中でも平生の安椅子よりは何となく頭の釣合が變で、とするとヒヨコリく脱げさうになるのを、氣にしいく時々直しては、やつとの思で國技館へ着いた。

着いた時は最上相撲は始まつて居つた。そして幕下が半分許り済んで居た。それから暫くすると、丁度二時五分も前頃だつたらう、館外で、萬歳萬歳と云ふ聲が天地に轟いた。やがて物の十分も経つて、平の石と赤鷲ヶ嶽の呼出しがすんだと思ふと、台覧席の方が騒がしくなつて、土俵の上へ「脱帽最敬禮」と書いた小さな幕が下つた。頭を擧げると東宮殿下が台覧席に玉顔笑はしく立たせ給ふので有つた。

君が代の奏樂が終ると思ふと、一寸他處を見て居る間に、梅と常陸とは既に土俵の真中に向合つて立つて居る。之が上段の構だ。それから折扇帽子に紫袍の行司が國旗を横にしてシーと云ふと同時に、常陸は左手を梅は右手を、共に前へ水平に延ばして指先を合はせる様にし、各一方の手を腰に支へる様にする。之が中段の構へて有る。行司は吉田追風である。之に次いで行司のシーと云ふ聲に應じて、前と同じだが、而も前より少し碎けた風をする。之が三段構への式と云ふのだ。後に聞けば梅と常陸の二人が土俵へ上る前に首上行司即いづもの呼出しが、土俵口即ち二字口に出で、東の方水月の産常陸山谷右衛門と名乗を擧げると、之に次いで西の

方でも西の方西中の産梅ヶ谷藤太郎と名乗をあげて、やがて力士は土俵口で例のチヨと云ふ挨拶をして、それから土俵の中へ進んだのださうな。台覧席の方をチヨと仰き見ると、寺内大將が殿下の御側に在つて顔りに何か御説明しあげて居る。殿下と大將との間は僅かに二尺ばかりしかない。

それから又幕下の相撲が三つ四つ済むと、チヤンくくと、拍子木を合圖に樂隊につれて、東方の御前掛り土俵入りが始まる。之は普通の土俵入りと大差はない。之がすむと西の方の土俵入りが有る。その間絶えず拍子木と樂隊とは同じ音を繰り返して居る。之に續いて、今度は常陸と梅との横綱方屋入りが有る。東と西と別々て有るとは勿論で有つて、これも平常のどの變りはない。此式が終ると同時に、拍子木と樂隊の音が止んで、後は暫くしんとする。

けれども静かな間は極めて暫くて有つて、間もなく幕の内力士の勝負が始まる。處が此日の相撲は平常のものと異つて、例の呼出のヒカアシー駒がターケーと云ふ様に、長く引張つた趣のある聲は聞かれぬ代りに、呼出は東西各一人宛、折扇帽子に紫袍姿で西と東の各の土俵口にしてやがんで一揖して、東の方が「東の方大渡」と云ふと、西方は其聲を直に受けて「西の方上ヶ沙」と、雙方共に極めて短く餘韻のない聲でやる。そして東西更に一揖して後にさがつて行く。すると力士が土俵口で例の挨拶をやつて直ぐに土俵の真中へ進む。そして平生とちがつて、一旦土俵に上つてからは、水も飲まれば腹も撒かぬ。況んや不敵のマツタ〜をやつて有る。て勝負と勝負との間は瞬く間く有つて、面白くもなければ趣きもない。

處で、呼出がすんで兩方の力士が息土俵の真中に行つてしやがむと、行司はいく頃を見計つて「勝負ッ」と一聲高く呼ぶ。そして愈勝負がついて了ふと、力士は雙方共土俵口に引下つてしやがんで居る。不敵ならば負け角力はまつまつと行つて了ふのだが、横式角力ではさうは行かぬ、つまらなさを顔をしてお附合なして居ると、その間に行司は力士溜りの後方に在る道花の菊の花束を受取つて、東の方勝負角力と高く呼んで、くるりと其勝負角力の方に直角に曲つて行つて、しやがんで其菊の花束を渡す。勝負力は之を受取つて、右手で花束を後へ廻して、行司が元の自分の位置に復してしやがむのを待つて、力士二人と行司とが互に一禮して一勝負が

終るのて有る。そして勝相撲はまた其儘歸つて行くことは出来ぬ、残つて次の一勝負を見るのて有る。
なほ古式によると、勝負力が負ふところの菊の造花二輪に添へた葵の花若しくは夕顔の花は、其實昔は角力が始め土俵に出る時に
盥に結び附けたものだからな、此日は菊花と同時に渡すこととして有つた。通の語る所によると其他にも少からぬ遠式が有つた様
だ。

それから三役になると又三役の土俵入のやうな儀式が有る。これは不測の相撲でも、十日目には必ずやるのて誰も知つて居る所て
有るが、今一つ平生と違つた所の有つたのは——實際は古式に則つたものではないかも知れぬと云ふことだが——三役になると呼出し
の樣子が頗る八ヶ間敷なつて、三段構の時と同じく、藝名の前後に角力の生國と名前をつけて呼んだ事て有る。即ち東の方仙
臺の産駒ヶ嶽國力、西の方高知の産國見山悦吉と云ふ風に呼んだ事て有る。
やがて例によりて常陸と梅の引分相撲が終ると、間もなく樂隊が君が代を奏し始めた。そして殿下の御選替についでシルクハットは
うよ／＼と動き始めた。

鏡開 (十一日)

昔は具足餅とか鏡餅とか云つて、武家では元日に床の上に甲冑を飾り、其前に餅を供へて軍神を祭
つた、或は廿日と及柄と訓の似通ふた所から及柄を祝つたと云ふ説もある。そして正月二十日には其
餅を切らずに手で崩したり槌で砕いたりして食つたもので有る。鏡開と云ふのは即ちそれで有つて寛
永九年以後は之を正月十一日に行ふやうになつた。今の鏡開は其名残で、床の間や神棚に飾られた鏡

餅は大抵此日に打碎かれて、東京では多くはお汁粉にこしらへられる。そしていづこの家でも女子供
は嬉しうにお代りの敷を競ふので有る。

- 伊勢 海老の鏡開や具足櫃
- ものゝふの及柄祝ふや鏡割
- 許 六
- 知 石

報恩寺の俎開 (十二日)

六百七十八年前の昔から今に至るまで、連綿として絶えな事のないと云ふ俎開の古式が、今年
も例によつて午後一時から淺草北清島町眞宗大谷派報恩寺の大書院にて行はれた。

書院正面の床の間には開基性信上人の畫像が掲げられ、下總國岡田郡の飯沼天満宮から獻上した目
の下一尺許りの御手洗の鯉二尾が、竹の簀の子に巻いた儘黒塗の臺に載せて型の如くに供へてある。時
至つて住職が役僧以下を従へて畫像と筋違の席に着くと、忽ち緋毛氈の上に四尺二寸に二尺五寸と云
ふ大俎が据えられて、土佐折鳥帽子に大紋の裝束つけた料理人が、書院に面して俎の前に端坐し
て右手に庖丁左手に眞名箸を携へ、一人の介添と共に活きた大鯉を俎の上に載せる。やがて白紙を截つ
て俎を清めた後で、頭から始めて胴尾と順次に鯉は見事に切り下される。左右に別れて見守つて居

る善界善女の口からは念佛の聲が聞え始める。さて料理人は此時切り下ろした鯉の尾を立て、魚が天に登らんとする形を示す、それが龍門の鯉と云ふの有る。

これがすむと今度は今一人の料理人が又しても折烏帽子、直垂の装束で、介添人を従へて大鯉を俎に載せて、例の箸と庖丁を手にしたと見る間に、料理はずん／＼と進んで、鯖で「長」の字、骨で「久」の字が俎の面に畫かれる。これが「長久」の鯉と云ふの有る。

かうして料理された鯉の身二切は、干して竹の簀に巻いて白木造の桐の箱に納れ、京都の本山東本願寺に送つて法主に獻じ、後の肉は悉く細かに刻んで、二切宛を笹の葉に載せて、三十錢以上を布施した信徒にお齋として、鱈と鹽鮭と密柑に酒まで添へて、お寺に珍らしい腥い御馳走が有る。

如何に門徒物知らずの誹のある真宗なればとて、お寺の中での鯉の生づくりは頗る珍な圖で有るがこれには面白い言はれ因縁が有る。此寺の開基性信上人と云ふのは、真宗の教祖親鸞上人の高弟で有つて、親鸞が歸洛の後は獨り下總に在つて岡田那飯沼に寺を建立し、師に代つて關東の布教に餘念なき折柄、偶性信上人の徳を慕ふて毎日説教を聴きに來る一人の名もなき老人が有つた。時のたつまに二人の間には遂に師弟の約が結ばれ、老人は性信から性海の名を貰つたが、一日性海は師の僧に對して多年の鴻恩を謝し、之に報ひんが爲には今後年々二尾の鯉を贈りまゐらすべしと云つて、漂然と

して行衛も知らぬ人となつて了つた。その後暫くあつて飯沼天満宮の神官は恐ろしい夢を見た。夢の中には天神様が現はれて來て、自分は性信上人に歸仰して性海と云ふ名まで貰つた。其恩義に酬ふるが爲には年々御手洗の鯉二尾宛を贈る約束をした。就てはなんぢ謹んで約の如くせよとの嚴かな御託宣が有つた。翌朝馳けつけて試みに御手洗へ行つて見ると、思ひも寄らぬ大きな二尾の鯉が正しく浮いて居つた。神官畏み／＼早速之を捕へて性信上人に獻じたのが丁度天祿元年一月十日のことで、爾來飯沼天神の神官から毎年一月の十日に二尾の潑刺たる黒鯉を贈つて來るので有つて、返禮としては鏡餅を贈ることになつて居る。そして昔は此鏡餅を天満宮へ獻じ、廿五月初連歌の際にひらくを例としたと云ふ話である。

十四日年越 (十四日)

此日に家の内外の輪飾や注連飾を取拂ふことはまだ一般の風で有るが、代りに削掛と云ふものを用ふることは殆んど廢れて了つた。地方では此日に取去つた輪飾などを集めて、書初の試筆と共に明日のどんどこで吉書揚をする習が有るが、東京には古くから火事を慮かつてどんどこ即ち左義長と云ふものを禁じられて居る。尤も此日に年越蕎麥と云ふものを食ふことは、六日のそれと共にまだ少しは行

はれて居ると云ふ話。

小豆粥の祝(十五日)

古來此日を上元と云つて、今猶赤小豆粥に餅を入れて煮いて食する習慣がある。枕の草紙に「十五日は餅粥の節供まゐる」とあるのは即ちこれ、此の日夜の刻小豆粥を煮て天狗を祭つて食すれば、年中の邪氣をのぞくと云ふ支那の習慣から來たもので、寛平の頃から禁中に於て行はれたもので有るらしい。或は昔は米大豆赤小豆粟麥黍稷の七種の穀類を交へ煮て食つたと云ふことあれど、今は餅ばかりの粥を炊いて食ふ所もある。

關西の方では此粥を餅の粥と云つて、神棚に供へたものを此日果物の樹皮を削り懸けて其切口に嚙ませる習慣が有る。自分が小供の時代には、能く父に連れられて果樹の下に立つて、庖丁でもつて樹皮を削り懸けた父が『成るか成らぬか』と云ふに對して、『成ります成ります、枝の裂ける程成ります』と言はされたもので有る。すると父は其切口に餅の粥を食はせて次の樹に進むので有つた。漢名之を嫁樹と云つて、東京でも山の手の方には桃や柳の樹に對してまだこんなことを行ふものがあると云ふ話であるが見たことはなから。

小豆粥の中の餅のことを粥柱と云ひ、昔は粥を炊た木を切つて杖となし、之を携へた兒童が、新しく嫁を迎へた家毎に入つて、嫁さんの腰を打てば男の子を生むと云つて、廣く諸國に行はれたものだからな。枕の草紙にも『粥の木引ぐしてうかゞふ。うたれじと用意して心づかひしたる氣色をかし』など云ふことが有る。粥杖、お祝棒、祝木、粥の木、「よめたゝき」など云ふは皆此杖のことである。

- | | |
|----------------|-----|
| 淺漬の寒き匂ひや小豆粥 | 故流 |
| まつ腹の力になるや粥柱 | 冬柱 |
| 粥杖や袖の香に後ろ知られけり | 綾足 |
| 粥杖や御簾にほつるゝ鬢の髪 | 曾天 |
| 粥杖に逃る振して打たれけり | 三敲 |
| 粥杖や花守か子の杓子顔 | 素磔 |
| 粥杖に冠落ちたる不覺かな | 鳴雪 |
| 古妻の腰の梓に粥木かな | 東洋城 |
| 七草のつきて美し粥柱 | 青々 |

藪 入 (十五日、十六日)

盆と合せて年に二度しかない所謂奉公人日の二日で、主人持の小僧大僧、女中おさんどんに至るまで、此二日間を公然と暇を貰つて、親兄弟を省するもあらず、知己縁者を訪ふもあらず、そして上野浅草からさては芝居寄席活動寫真といづれも力限りの頭を擡つて、思ふ存分に羽を伸して飛廻つて、半年中の命の洗濯をする。西に東に南に北に、動く電車も止まつた電車も、今日を晴れと着飾つたニコニコ顔のおさん小僧連で何れも皆満員。特殊學校や孤兒院養育院なんでも競技會とか温舊會とかそれ相當の催しが有つて、菓子袋や折詰なんのお土産が出て、親兄弟のないものも矢張藪入の樂丈は得られることになつて居る。殊に面白いは、巢鴨の養育院分院などでは、そこを出て既に一人前の小僧中僧となつた連中が、年に二度の藪入には、養育院を自分の家元と、必ず幹事や友達などに五錢十錢許りの菓子などを携へて、樂しなつかしげにぞろぞろと歸つて來ることである。

それから浅草觀音の二王門へは、盆と正月の藪入りの日と涅槃の日灌佛會の日などに限つて上らせ

養父入や鐵漿もらひ來る傘の下

蕪 村

やぶ入の夢や小豆の煮ゆるうち
 やぶ入を獅子の口より見初けり
 やぶ入の顔けばくし草の宿
 やぶ入の脛おしかへす野風哉
 やぶ入の枕うれしき姉妹
 やぶ入や船で落合ふ従弟同士
 やぶ入の炭火に酔ふた顔の色
 藪入の貌見にゆくや枕元
 藪入やよき下駄はいて田圃道
 藪入の薪を割つて歸りけり
 藪入の父や閻魔のほくそ笑
 藪入の子を見送るや里の犬

蕪 村
 曉 臺
 大 祇
 几 董
 召 波
 多 代 女
 一 馬
 青 々
 格 堂
 鳴 雪
 紅 葉
 霞 山

閻 魔 參 (十六日)

東京年中行事

獄入の二日目は例のうそをつくと舌を抜くと云ふ閻魔の賽日で、各所のお閻魔様は、今日に限って
 盗い顔をニコつかせて居らつしやるやうにも思へる程の人数。いつこの境内でも曲獨樂、居合抜、映
 し書狂言、活動寫真、玉乗、足藝、改良劍舞などで、ドンチャン〜囃し立て、居るが中に、少し
 く場末の方となると、腕無小僧、首長娘種あかし、猿芝居、猫芝居など云ふ見世物から、早取寫真
 なども云ふ前世紀時代のものがまた相當に幅をきかして居る。
 試に市内の閻魔様のお宿を擧げて見ると、

浅草公園内閻魔堂、浅草蔵前長延寺、同大圓寺、上野廣小路閻魔堂、坂本善養院、金杉回轉寺、谷中天王寺内瑞光院、湯島圓満寺
 本郷六丁目法眞寺、駒込正行寺、同光源寺、小石川小日向源覚寺、同餅差町菊園覺、牛込通寺町養善寺、同横町宗伯寺、同原屋
 町松雲寺、四谷區寺町眞成院、内藤新宿大宗寺、麹町八丁目酒岩院、青山南町四丁目教覺寺、麻布一本松長傳寺、同六本木町巖藏
 寺、芝赤羽圓覺堂、同増上寺境内花岳院、西久保圓養院、同高輪如來寺、日本橋茅場町顯師寺内圓覺、同本銀町觀音内圓覺、深川
 龜住町法乘院、同萬年町圓覺堂、本所元町同向院、同北割下水花嚴寺、南品川長徳寺、目黒不動内、淺谷長谷寺、中野成願寺、千
 住金藏寺

因に閻魔と云ふは梵語にて、靜息の意、惡を爲す者の不善の業を靜息せしむるを云ひ、遮つて惡を
 造らざらしむるの意から又遮と譯し、佛經に所謂地獄の亡者の魄を司どり、其行を賞罰するると云ふ魔
 王で有つて、堂によりては閻魔の外に十王を安置する所から、十王詣りとも云はれて居る。

草花を供へてゆかし閻魔堂

青々々

やぶ入や戀しき顔の閻魔堂

鳴雪

浅草觀音亡者送り (十八日)

亡者送りは浅草寺温座陀羅尼開白とか、陀羅尼温座秘法とか云つて、天下泰平國家安全の御祈禱で
 有る。古來備前の金山寺にて行はれ來つたものを、正徳三年金龍山浅草寺に移し傳へたもので、本堂
 左方の不動尊の前に壇をしつらへ幔幕をめぐらして、一月十二日より十八日まで七晝夜の間百六十八
 温座の秘法修行があり、十八日結願となると、時は夜の七時頃、一百の御燈明バツと一時に消えると
 思ふと、一人の坊さんはお供物の入つた飯櫃のやうなものを抱へて暗闇の中から飛出して來る。と頭
 に頭巾をかぶつて、松明を携へた二人の坊さんがツト物陰から躍り出て、前の一人の後を追駈ける。
 供物を抱へたのが追はれながらに御堂を三遍廻ると、松明の二人もぐる〜と追かけながら三遍まは
 る。そしてやがて三人共に西の階段から下りて、左甚五郎作の木馬の隣に在る鹽蔵地蔵の後ろへ供物
 を埋めに行く。それで亡者を送り届けたことになるので有つて、松明の燃えさしは戸口先に下げて置
 けば、厄病除の呪になると云ふので、松明坊さんのあとを女子供がぞろ〜と附き歩くも面白い。

歌御會始 (十八日)

歌御會始の式は起源詳ならずれど、古よりの儀式にて、明治となりても三年以後は戦争時の外は引つゞきて行はせられ、御都合の外は大抵一月十八日風凰の間にて行はれることになつて居る。

午前九時御歌所長を始め讀師、講師、發聲、講頌等の所役奉行參候奇人并びに拜觀員參列、採點のすんだ詠進の懷紙を案上に置き諸般の準備を整へて出御を奏請し奉ると、十時兩陛下には侍從長侍從武官長侍從典侍掌侍命婦の諸女官を從へて出御。其以前皇太子殿下を始め諸親王などの御參列あり。やがて奉行先づ起ちて御硯蓋と呼ぶ文臺を裏返して宮殿下以下の懷紙を置いて下ると、上席讀師は謹んで披講の席に進みて式の指揮者となり、懷紙を整へて講師に目くばせすると、講師は進んで着床ついで發聲及講頌の人々もそれく自分の席に着く。此時讀師は御前に向つて懷紙を引のべ再び御硯蓋の上に置くと、講師は先づ『年の始めに——寒月照梅花——と云へることを——仰せ言によりて詠める歌』と云ふ様に其年の御題を、一句毎に最後の韻を長く引いて高く讀み上げ、ついで選に預つた詠進者の族籍住所氏名を讀み上げ、選歌の初句に二息を、二句には二息を、三句には三息を、四句には一息をやすんで、ついで終りの句を讀み上げる。と今度は、それについで發聲が聲を張

つて初の一句を誦ひ、二句以下は講頌諸共に聲を合せて非常に六ヶ敷い節に従つて一首の歌を吟ずる。之が歌を講ずると云ふのである。

さて各一反りづ、選歌を講じ終ると、今度は前と同じ風に親王のお歌を各二反りづ、講じ、之についで讀師は皇太子妃殿下の御懷紙を引延べ、御前に向つて御硯蓋の上に置くと同時に、講師以下起つて之を拜見し、再び着床の上前の歌と同じく之を奉讀すれば、やがて發聲講頌は之を誦ひ講ずること二反に及ぶ。ついで皇太子殿下の御歌に對しても同様のことあり。之についで讀師は皇后陛下の御前に進んで御懷紙を頂き、席に歸りて前のやうに引延べて御硯蓋の上に置けば、講師は例によりて奉讀し、發聲講頌は之を講ずること三反し、ついで讀師は御懷紙を取りて巻き整へ、再び皇后陛下の御前に進んで之を返上する。

最後に讀師は天皇陛下の御前に進んで御懷紙を賜はり、殆んど皇后陛下の時と同じやうにして後、講師の方に向つて御硯蓋の上に置き、講師以下起立拜見の後着床、講師奉讀席に復ると同時に、發聲講頌は同音にて、一反は高く一反は低く、前と同じく之を朗吟すること五反に及び、席に復ると讀師は御懷紙を巻き整へて、再び御前に進み之を返上する。之にて式は終りを告げ、兩陛下には入御おらせられるので有るが、自分の歌の披講中は詠進者は各々起立して謹慎の意を表し、皇太子妃、皇太

子兩殿下、皇后陛下の御歌に至ると、參列員は悉く起ちて拜聴し、最後に御製奉讀の際には、皇后陛下にも起立せさせ給ふので有る。それから式後所役及參列員一同へは別殿にて酒饌を賜はることになつて居る。

尙歌御會始の御題はその前年十一月中旬に、御歌所長を題者として御選定せられ、書式と共に官報にて發表し、明治七年以後は一般の臣民にも詠進を許され、其詠草は府縣別にして製本し、歌御會始の當日御覽に供ふることになつて居るが、殊にそのうちより秀逸の歌五つを選び、御前に於て披講せらるることとなつたのは明治十二年以後のことである。

廿日正月 (二十日)

廿日正月とも骨正月とも云つて、お雑煮のお仕舞で有る。今日を正月のお仕舞として、女子供の遊び戯るゝことは關西地方にはまだ盛なれど、東京では殆んど名のみである。

骨正月と云ふのは、京阪地方にて此日のお祝に、必ず鱈の肺を用ひ、其骨に大豆、酒の糟、大根などを入れて煮て食ふからだといひ、此日には昔から廿日團子と云つて團子を食ふ習慣が有り、廿日と初顔と其訓の近い所から、初顔を祝ふの意にて、婦女は鏡臺の鏡餅を祝つたと云ふ話。けれども

今の東京では此處ことは一つも行はれて居らぬ。

- 正月も廿日になりて雑煮かな
 - 正月の二十日を雪の山家かな
 - 正月も二十日過ぎけり手鞠唄
 - 鼻すゝる骨正月の曇りかな
 - 酒飲まぬ骨正月となりけり
 - 鱈の首尾祝ひ納むる二十日かな
- | | |
|---|---|
| 嵐 | 雪 |
| 松 | 宇 |
| 茂 | 樹 |
| 鳴 | 雪 |
| 一 | 轉 |
| 蝶 | 衣 |

此日また夷講と云つて、商家では鯛を供へて恵比壽と大黒の二神を祭り、どうかどつさり儲かりますやうにと祈りながら、親戚知己を迎へて盛んな酒宴を張ると云ふことは、昔は一般に行はれたもので有るが、今は夷講は大方秋にゆづつて、正月にはあまり行はれて居らず、従つて十九日の晩に大傳馬町の邊りに立つた夷講の爲の市も殆んど姿がない。

初大師 (二十一日)

初の字の附くのは何れも賑はふが、初大師でも川崎のは殊の外に賑やかで、西新井などは殆んど

比べものにならぬ位 前晩から御堂にお籠りをするものも五十や百どころにはあらず。午前五時に開扉があると、大師講だとか、びんづる講だとか、京日講だとか云つて、色んな講中が旗押し立て、練込んで来る。品川大師間には京浜電鐵が十臺許の臨時ボギー電車を間断なしに往復させても逆も間にはあはず、品川停車場の如きは溢れるばかりの大混雑で、女小供は幾らあせつたとしても、容易に乗れないと云ふ有様。やつこのことで飛乗つて

鮭ぶら〜と大師驛に着いて、電車を下りると、山門までの十町許の間は例の名物の葛餅、奈良漬、軽焼、麥稈細工や、土地で捕れる蛤や蟹などの兩側の土産物店から客呼ぶ變な聲が殊の外に耳につく。本堂を覗



初大師

いて見ると盛に焚き上げる護摩の焰とけふりとで本尊様も焦げさうな勢。客殿を見ると何の間も〜溢れるほどの講中で、何れも廿五錢でお寺から出る精進料理で、たら腹食つて飲んでぐでんぐの有様。かうして夕方までにつめかけた参詣者が四萬を超えて、焚上げた護摩の数が三千五百とは、何と云つても川崎平間寺の厄除大師様は多らぬものである。



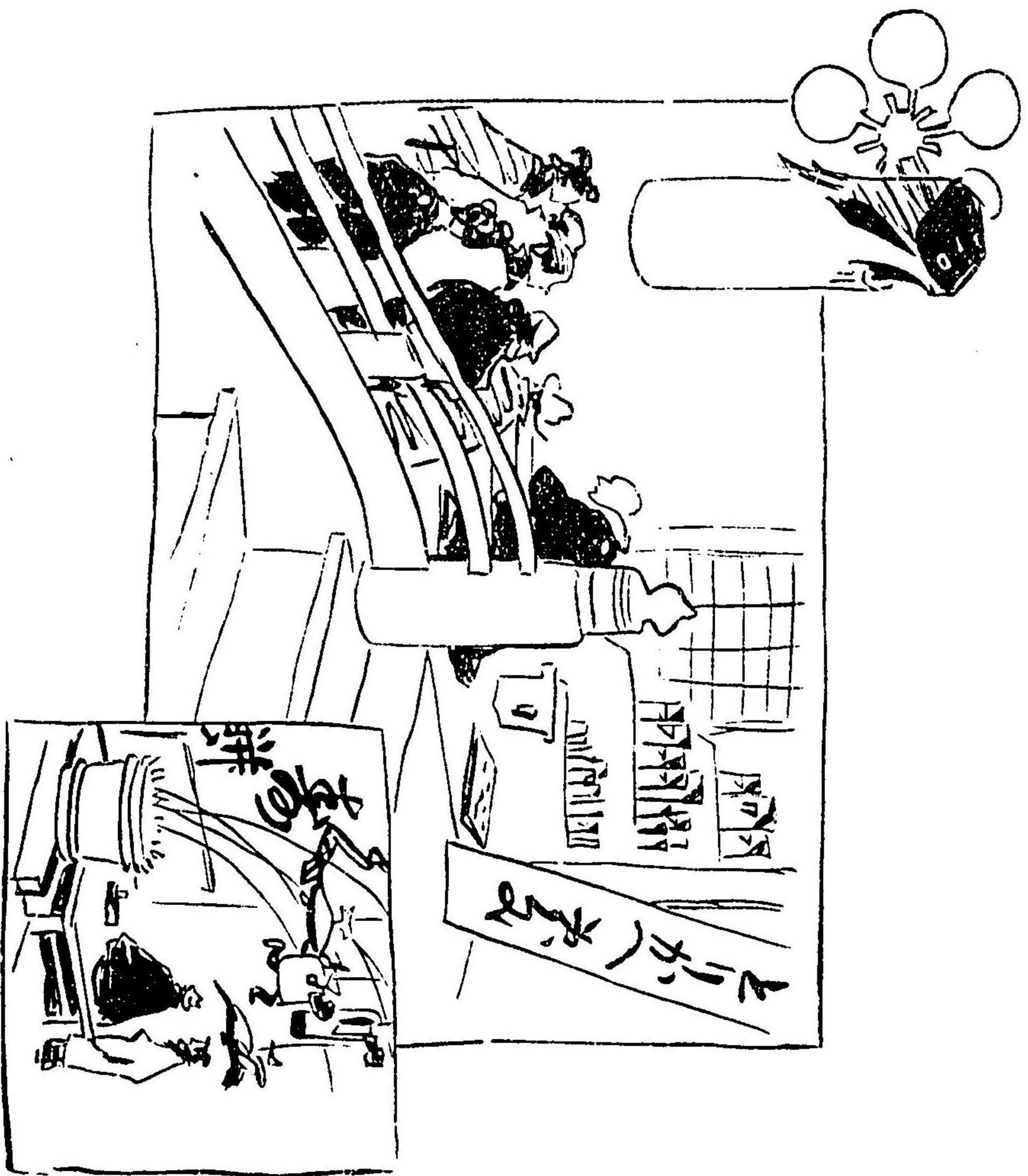
近衛一、二聯隊軍旗祭 (二十三日)

兩聯隊の軍旗は共に明治七年一月二十三日今の日比谷公園なる日比谷練兵場で御親授あつたものにて、十年西南の役を初陣として、日清戦役には北白川師團長宮の麾下に屬して土賊平定の功あり、日露戦争には鴨綠江戦から沙河の最終戦に至るまで殊勳偉功の多きこと擧げて數ふべくもない。午前十時聯隊旗手が軍旗を捧げて護衛兵着剣護衛の下に營庭に出ると、兵員一同は聯隊長指揮の下に捧げ銃の敬禮をする。『足曳』の喇叭が寒い空に響き渡る。こゝで軍旗を交銃で支へて祭壇にかざつて酒饌を供へた後、やがて聯隊長の祭文朗讀について第一、二、三大隊の分列式がある。かうして兩聯隊共略同様に式を終つて、午後からは軍隊相應な相撲茶番講談などの餘興の外に、各中隊の造り物飾物を見ん爲の下士卒の家族等がどや／＼と繰込む。

愛宕神社の『御事の使』 (廿四日)

此儀式は「毘沙門の神使」又は「御事の使」と云つて、以前は正月三日に行つたものだが、近頃は例月縁日の廿四日に行はれる。

午後二時頃第二の太鼓に引つゝいて響き渡つた第三の太鼓を合圖に、毘沙門天の使は御幣を持つた神官について拜殿を下る。神のお使の服装は昔ながらの古風なもので、白衣の上に昆布で編んだ鎧を着し、更に昆布で組合せた大兜を戴いて居る。尤も鎧と云つても背の部分丈腰の邊りまでだらりと垂れたもので、立派に整まつた鎧ではない。それから兜の前面には鍔形のやうに裏白を結つけて、兜の頂天には蜜柑の上に小さい御幣が立て、有る。武者に假装したものは神官にわらず、神樂師の何とか云ふ六十五歳の老人で有つて、長さ九尺餘り徑三寸餘りも有りげな大太刀を佩き、長さ四尺五寸太さ之に適ふた摺古木を副差しとなし、右手には摺古木と同じ長さの飯杓子を逆さに突き、一本歯の足駄を穿いて、徑二寸長さ六尺餘の大弓を携へた供人を具し、大太鼓の音につれて優然として峻しき男坂の階段を下る。前後に従へた太刀脇は重さうに大太刀をかゝへて居る。そして男坂を下つて一町餘り左に進むと、神使は忽ち折返して更に新道坂を上り、拜殿に歸つて神靈に事なき旨を復命する。やがて暫くして賑やかな大神樂が終ると、昆布の鎧や兜は徹塵に刻まれて、參詣者に頒たれる。煎じて飲めば如何なる風邪も立ろに平癒すると云ふので、人々は互に先を争ふて詰めかけ、押しつ押しされつ人波は暫く凄まじい勢で碎ける。



鶯替 (廿四、五日)

龜戸天神にては大宰府天満宮の例に倣つて、毎年正月二十四五の兩日鶯替の神事を行ふ。けれども大宰府では二十四五日に非ずして正月七日の夜之を行ふ事になつて居る。その夜酉の刻頃近郷近在の人々は皆自分で作つた木の鶯を袂に入れて参詣し、互に「鶯替へませう鶯替へませう」と云ひながら、袖から袖へと替へ合ふ中に、神主が携へた金製の鶯を手に入れたものが、當日の最も幸福な人とせられて居つたが、近頃になつて参詣者が携へ來つたものをば、神官が受取つて單に別の鶯と取替へて呉れることとなつたとやら。兎も角も龜戸神社の鶯替は大宰府のに模したもので、参詣したものは社前に設けられた假壇で賣つて居る木の鶯を買つて、拜殿のうそ取替處へ行つて、其處に供へて有ると取替へて貰ふので有る。なかには去年買つて、神棚に供へて置いたものを携へ來て、新しいのと取替へて貰ふものも有るが、これは別に金を取られるやうだ。

東都歳事記に、「詣人袖中にして取替ゆる神事なり」とあるに見ると、龜戸でも初の頃は袖から袖へと替へて居たものらしいが、かくては之に乗じて掏摸が他人の物品を掠去る事の便があるが爲に、近頃に至りて之を禁じたのだと云ふ。

龜戸神社で鶯替の神事を始めたのは文政三年のことで、賣つて居る鶯の包み紙に鶯の圖が有つて次の縁起が書いて有る。

筑前の太宰府天神宮御やしろに毎年正月うそへといふ事あり四方のまど人木のえだ其外のものをもてうそとりの形をつくり持きたり神前において互にとりかへてその年の吉兆をまねくことになん是やいままてのあしきもうそとなり吉に鳥かへんとのころにてうそがへといふ元より此おん神の託によりて始めり直き心をもてすれば誠のみにちに叶へしこゝに龜戸神社はつくしのうつしなれば文政三年この事を始めて毎年正月廿四日五日うそ鳥の形をつくり境内においてうらしむれば信心の人々はかひ求めて神前にある鳥とへ給いかけまくも鶯替神の御心にもりなひ開運出世幸福を得べきものなり
筑紫にては正月七日なれども、龜戸にては正月廿四日五日と定む

これで見ると開運出世幸福を祈り縁起を祝ふべきものなることは云ふまでもない、従つて参詣者には粹々な稼業の連中が一番多いので有る。

序に鶯とはどんな鳥か、或は雀より大きく、頭深黒にして、兩頬より頸の邊りまで深紅に、喉短く腹えて黒く、背腹腹裏は灰青色にて赤味を帯び、尾は黒く、養ふて聲を賞するもの云ひ、又俳諧談事記 菜草には和漢三才圖繪の説明を引いて、其聲圓滑にして短く、鳴く時聲に隨ひて兩脚を互に擧げて、琴を弾く手を搦がすが如し、故に里俗字音響を彈くと云ひ、或は形體はしく聲圓なるを以て字音娘と云ひ、雄は啼をよび雌は雨をよぶ、又大和本草の言を引いて「雄をてりうそと云紅し、雌をあまうそと云紅のり」と云つて居る。

今龜戸神社にて賣つて居る鶯は大小數種あつて、七錢位より一圓位までの品あり。柳にて作り、圖

の如く頭と尾を黒く、口の邊りを赤くし、背を縁にして金箔を塗り、腹の所を削り込み、尾は削り起して作つた頗る古雅なもので有る。

鶯かへて腹立させん妙しらめ 大江丸

曉の鶯かへて來た袂かな 紅葉

鶯替や袂に残る宿の塵 且笠

鶯替や美人ほのかに山かつら 青々

鶯替やまこと顔なる古帽子 知十

初 不 動 (二十八日)

目黒の不動とか、目赤の不動とか、不動様も随分澤山あるが、東京では矢張成田の不動さんの出張所で有ると云ふ深川の不動さんが一番賑ふ。

今年折悪しく、全日を心地の悪い雲が降りつめたにも係らず、お厨子の開いた午前四時前から、霽も雨も物かはと詰めかけたもの甚妙からず。午後の小降りとなりては、黒江町の停留場から深川

公園に至る道筋は、往々来るさの種々雑多の傘々互に相摩しつゝ、お汁粉を打扱したやうな泥濘の中を繰るが如くに進んで行く。

お堂の前では『お蠟！お蠟！』の懸聲が絶え間なく、これについでチャンチャンと投げられたお賽銭が箱の中で勢よく響く。手を合せて何だか呪文が唱へられる。雲の中を傘もささず、ノウクマサンダを唱へながらお百度を踏んで居る熱心家もある。さうして夕方までに出たお圃の敷一萬に上つたが、それでも例年の三分の一しかないと云ふ。

此處の露店の主なものは例の突羽根お圃と張子の達磨で、清水屋の金鑄焼は名代のお土産で有る。

日の出見し洲崎の戻り初不動

三 九

孝明天皇祭 (三十日)

此日皇靈殿にて御親祭を行はせ給ふの外に、敕使を京都の後月輪東山陵に遣はし、幣帛を奉らしめ給ふので有る。

御親祭の次第は元始祭の時と始んど異なる所なく、只此日は孝明天皇御一柱の御祭典なれば、實所神殿の御祭典は行はせられぬので有る。其外皇后陛下の御拜を始めとして、正午十二時より臣民の参

拜に至るまで元始祭のそれと全く同じで有るが、此日は更に午後五時に至りて夕べの御饗を供へて、陛下再び出御、午前の如く御拜あらせられ、入御の後翌三十一日の午前一時に至るまで御神樂が行はれると云ふことと有る。

淺草観音行事 (一月—十二月)

一寸八分の観音様を御本尊にして、大きな仁王様を門番にした観音堂は秘密の塊で有る。只一口に淺草の観音と云つて了へばそれまでなれど十分二十分と観て居れば、不思議も不思議、山出しのポット出のものには何が何やらさつぱり分らぬやうなことはかり。聞いて始めてハハ！成程、成程と感心する不思議な謂れ因縁古事來歴。さらばと云つて江戸子を捕捉まへて『お前さん観音様の階段が幾つあるか知つてゐるかねえ』と聞いても『何云つてやがるんだい観音様に段なんか有るもんか、籠棒奴』と啖呵を切るものも偶にはないでもなかるべく、『おやお前十段あるんだと』と云へば、あべこべにおつ魂消て『へえ左うだつけなわ』と云ふ位色んなことが澤山にあつて、内陣の真中で賣つてお守の數でも傷除け、開運、安産、火除など云ふのを集めて十三ある。そしてそれが別段にお利益が有でもなからうが、見るから心地よいほどずんぐと買れて行く。側のおびんづる様とか云ふのを見

て居ると、八枚の布圍の上へ暖々と坐つて御座るのを、入れ交り立ち交り色んな人が来て、自分の體の悪い所と同じ所を撫でさすると其處が治ると云ふので、散々に摩つては叩頭をし、叩頭をしては摩つて行く。中には真面目な有りがたさうな顔をして、それでも恥かしげに人目を気にしながら、その人と人なき折を見計らつて、おびんづる様の股から腰の方から矢鱈に摩つて行く品のいゝ年増も眼につく、振向いてちつと見て居ると、丁度一分間に七十三人の參詣人が有る。決してそれがお正月だからと云ふ理でもなし。

仰向いて見ると薄暗い鴨居の上には色々な額が澤山懸つて居る。深見支位が、書いても氣に喰はず書いても氣に喰はず、さうする中にとらうく死んで了つたので、弟子共が寄つて集つて、一番出来栄のあるのを選んで彫らせたのだと云ふ本堂内陣の正面の上に懸つて居る『施無畏』の額は誰にも眼につかう。その外にも高嶺谷の源三位頼政が砲を射る額だの、容齋の堀川夜討の御廐の喜三太が弓を張るの圖だの、國芳が苦心の一つ家の額だの、見て居れば色々な名高いものが、成る程これか、これのことかと眼につく。

本堂の内にも外にも何とか様とか、かんとか様とか、矢鱈に陳列されてあらせられる。變な黒いものがと覗いて見ると、勿體なや何神様とか何佛様とかが鎮座まじりて有らせられる。正觀世音菩薩

と書いた側には『一月五日より十一日まで柳の牛王』と書いて有る。見れば見るほど聞けば聞くほど觀音様の周圍には不思議と秘密が充ちて居る。

従つて年が年中今日は何、明日は何と、行事と云ふもの殆んど絶え間がない。觀音様の本堂のうらになければ堂の外に在る。外まで来た人はついでお參をして行く。いや序で處ではない兎角は觀音様の方が主で有つて、主で有るべき方が客にする。斯うして一寸八分様はだんぐくに榮えて、身體は小さくとも淺草の二字を大方一人で背負つて立つて御座る。

試みに今觀音様と其境内にある年中行事の、非常に大きなものは更に別に擧げるとして、ざつと一通り丈を茲にあげて見やう。

元日の大般若 正月の元日には觀音の本堂で大般若經が有る。そして天下泰平國家安全の御祈禱が有る外に、午前四時から、七時頃までに、本堂前の三社の神輿庫の前に、年末に氏子が納めた御札と注連繩とが焚かれる。毎年決まつたやうに行はれて、初詣の連中が通りが、りに立寄つては暖まつては行くと云へば、矢張行事の一つと見てもよからう。

流鏑馬 一月五日には、別に記したやうに觀音堂前の淺草神社——維新前までは三社權現と云つた

——で流鏑馬の神事が有る。

藪入 一月十五十六日は例のお賽日で、藪入の連中が仲見世のお閻魔様への序を観音様へお参りを
する。仁王門の扉は開かれて女小供の昇降に任される。かうして二日の間境内は全で人の海になつて
了ふ。

初観音 一月十七日は初観音と云つて、どんな御無沙汰をした連中でも信心家は必ずお参りを
としてお鏡を頂かして下さいと云つて一錢銅貨を出すと、え、うるさいと云はぬばかりの顔をして、
紙のお鏡の端を左手でつまんで、右手でメツとこいでパーと投げて下さる坊様も、お腹の中ではホク
クとして御座らつしやるやうだ。

湯立 同十七日淺草神社の拜殿の前では、笹竹を四方に立、注連を張つて、真中には大なお釜を仕
懸けて其年の注連繩を焚いてお湯を沸かす。湯が沸き立つと白衣姿に黒髪を垂れた巫子が、右手には
櫛左手には熊笹を携へて出て来て、櫛と熊笹とを熱湯に浸して、直ちに引あげて肩先で両手を振り動
かし。そして眼をつぶつて無念無想の境に入つたやうな風をする。之れを湯立ちと云ふのださうな。
以前はそして神託だと云つて此巫子が正月から十二月迄丁度一年間の吉凶禍福を豫言したものとや
ら。

亡者送り 一月十八日には観音で亡者送りと云ふものが有る。尾張の方にも此處ことが有ると云ふ
話だが、詳しいことは別の記事に譲る。

節分 二月四日節分の日には、一千枚を限りて午後の一時から観音様で安産のお札が出る。お札に
は『分』の字が書いて有つて、産氣がついた時其字を裂いて飲むと安産請合だと云ふので、我もくと
云つて集つて来る迷信家でそれはく恐ろしい雑沓。此の日また修正會と云ふものが行はれ、夜の七
時過になると、近來の流行につれて豆撒の式が有る。上下姿の年男は例の鬼は外福は内を聲高らかに呼
はりつゝ、堂の内外に豆を撒きちらす。雷除けのお呪になると云ふので、豆を拾はんとする男女暫く
の間は血眼になつて押合ひへし合ふ。

灌佛 四月八日は例のお釋迦様の御誕生日で有る。観音堂と云へども佛像が有るともく。本尊様
に、前立の本尊に、右の本尊、左の本尊に、右の二番の本尊に左の二番の本尊と云ふ風に、五つも六
つもある。従つて本堂の前下には竹の小筒と柄杓を賣る爺さん婆さんの小店が四五軒も出る。それを
手桶の市とも竹筒の市とも云ふ。お参りをした人は其竹筒を買つて甘茶を頂いて行く。

三社祭 五月十七八日は三社祭と云つて、淺草神社に柏板の神事と云ふのが有る。此祭は元三月十
七八日で有つたのが、大陽曆に改つた爲に五月に變つたので有る。

大祓 六月三十日は大祓の日で、他の神社同様淺草神社でも其式が有る。氏子は各形代を以てお参りをする。

一四八

四萬六千日 七月九十の兩日は一年中の一番のお茶湯日で有つて、此日にお参りをすると四萬六千日の間参詣したと同じやうな御利益が有ると云ふので、有かないかは別として参るわ。序に雷除のお守も頂かうと云うので、降らうが照らうが朝から晩まで仲店通りはカラコロと下駄の音で騒々し

五蘭盆 七月十五日は五蘭盆、十六日は地獄の釜の蓋がわいて鬼の首もゆりると云ふお閻魔様の縁日、仲見世の閻魔様は正月の藪入同様の賑やかさ。公園の見世物には書入の日で有る。

菊の取換 東京の行事は今では大抵新暦の相當日に行はれて居るが、菊の取換と云ふのに限つて舊暦の九月九日に行はれて居る。此行事は昔は非常に盛んなもので有つたが、今は只残つて居ると云ふばかり、参詣人は堂の前に店を出して居る菊店で菊の花を買つて、自分の観音様へあげて、観音様のと取り換へて貰ふとして貰ふとして取り換へて貰つたのを、枕に敷いて寝ると頭痛が治つて、自分の子に先立つて死なれることなどが無いと云ふ誠に難有い功德が有る。

十夜 十月十七日は例の十夜で有る。徹夜のお籠が有る。踊が有る。これも別に一項を設けたが便

利で有らう

酉の市 十一月には酉の市が有る。けれどもこれは観音様ばかりの専有物でないから、酉の市の項に譲ることにする。

年の市 十二月十七八日の年の市は随分盛なもの、其時になつて説くのが有らう。

雪

東京に於て雪らしい雪の降るのは、矢張一月の中旬頃から二月一ぱい位のもので有る。そしてそれも五六寸と云ふ所が大抵關の山で有るが、時によりては三月に入つて、乃至は一昨年やうに四月八日の花の盛りを、大雪が降つたやうな例が時々はないでもない。

雪が降つて景色の善いのは、宮城のぐるりか外濠一帯のうちでも殊には辨慶橋の遊りか、乃至は上野九段日比谷芝等の公園の内などを外にしては、向島では竹屋の渡、言問附近は流石に名所丈あつて替ふるに物なく、玉川大崎遊りの水と樹との配合のいゝ所もまた捨てたものではない。けれども此節では最上瓢箪腰にしてふらふらと出懸けるやうなものは殆んど眼につかず、雪見くと云つた所で、精々が上野か向島か、乃至は方々の公園などを何かの序に、これはくと暫し佇むか、ずつと碎けて

四疊半の雪見か、さもなくば寫眞機を片手の敵本主義が多い中には、墨堤一里の時ならぬ枯木の花を
 我物顔に、屋形船などをゆらり〜と流れにまかす風流子の偶にはないでもない。

いざさらば雪見に轉ぶ處まで
 いざ雪見容づくりす篋と笠
 御次男は馬が上手で雪見哉
 埋れて死なで本意なき雪見哉

芭蕉村
 大祇良
 樽

宿貸せと刀投げ出す吹雪哉
 旨さうな雪がふうわり〜と
 門の雪白と盟の姿かな
 應々と云へど叩くや雪の門
 下京や雪つむ上の夜の雨
 大雪となりけり關のとざし時
 馬の尻雪吹つけてあはれなり

蕪村
 一茶
 嵐雪
 去來
 几兆
 蕪村
 子規

鴛鴦の羽に雪降り積る静さよ
 大雪になるや夜討も遂に来ず
 戸をあけて驚く雪のあしたかな
 湯歸やあら面白の雪げしき
 人と馬とかたまつて行く吹雪哉
 埋火の夜は更けけらし竹の雪
 雪の門村の者ぞと叩くかな
 心ゆくや月は千里の雪の上
 百尺の杉森閑として雪の中
 着せかける女羽織や雪の朝
 湯豆腐や障子にかゝる雪の音
 遠山の雪見やりつゝ楊子哉
 雪とつて薬のんだる苦味哉

子規
 同石
 漱葉
 紅六
 雨竹
 洒梅
 野宇
 松梅
 臨風
 西男
 大羽
 醒雪
 紫蘭

二月 曆

▲初午の日 羽田の穴守、王子、向島の三圍、淺草田町の袖摺、橋場の真崎、烏森、豊川橋荷等賑ふ。

▲初庚申の日 柴又の帝釋天詣

▲初甲子の日 各所の大黒天賑ふ。

四日 節分の日 龜戸天神、下谷五條天神、淺草大鷲神社、日本橋濱町の清正公堂、深川不動等を始めとして各所の追儺式、淺草觀音の修正會、神田明神の疫神祭、高輪安泰寺の五福神祭、愛宕下身代不動等の節分會、遠くは成田山川崎大師の豆撒式。

七日 愛國婦人會の首唱者奥村五百子の忌日、淺草本願寺にて追遠會

十日 湯島天神祭禮、昔正月なりしも今二月に行ふ。

十一日 紀元節 諸臣の參賀、豊明殿の賜宴。△此頃より梅笑ひ初む、各所の梅見。

十五日 釋迦寂滅の日にて各所の寺院涅槃會。

二十日 此日頃より日本橋十軒店及兩國に雜市立つ、各所の呉服店等にては十日頃より飾り始む。

△深川八幡祈年祭 十四日より十八日まで白羽矢の守を出す。

△日本橋小傳馬町祖師堂にて日蓮上人降誕會

二十一日 西新井大師の開帳

二十二日 靖國神社にて熊本籠城祭

▲此月より上野其他にて美術展覽會始まる。

初 午

二月の最初の午の日を初午、次を二の午、その次を三の午と云つて、前晩から提打を掲げ旗や幟を樹て、地口燈籠などを作つて飾り立て、當日はお神樂が有るとか、馬鹿囃しが有るとか、太鼓を放り出して縦まゝに小供等に打ち慰ましめるとか云ふやうなことは、今も昔も變らな

東京中には稻荷の社が數へ切れぬほどあるが中に、妻戀、烏森、鐵砲洲、淺草の袖摺、豊川、玉姫、三圍、吉原の九郎助稻荷などは名高い方で、近郊では王子と穴守稻荷が最も賑ふ。

王子稻荷は關東稻荷の總司社で有つて、此日は賑かな大祭が行はれる。穴守稻荷は近年恐ろしい御繁昌で、京濱電鐵は豫備の車を悉く繰り出して盛に人の山を運搬するが、穴守停車場はこれでも十

重二十重の人垣を作つて、押し合ひへし合ひ全で火事場をつくり。中には運徳一番目にお札を頂かうと前の晩から川崎あたり泊り込んで、四時五時頃から詰めかけるものがあり、今年の如きは日曜と暖かつたのとで八年來ない珍らしい人出で有つたとやら。

鎌倉御用邸でも折柄御滞在中の泰宮内親王殿下の御思召にて、御用邸内の諏訪神社にて初午祭を行はせられ、通用門から社殿に至る間、萬燈やら旗やらの裝飾賑はしく、里神樂、茶番などの催しも有り、一日庶民の参拜を許させられたと聞く。

- 初午や物種賣りに日のあたる 蕪村
- 初午に小供遊ばす狐哉 凡兆
- 初午や江戸一ばいの春霞 鵬齋
- 初午や火をたく島の夜の雨 一茶
- 初午や馬鹿が見て居る馬鹿踊 洒竹
- 初午や戻りは鳥羽の夕月夜 楓江
- 初午や小鍛冶が宿の飾り鏡 蜆洲
- 初午の太鼓野面の青むなり 癖三醉

七浦の大元締や一の午 碧童
 王城を南に去るや一の午 露月

面白くことには、此日上野清水の観音にても、初午と云ふ貼札がされて、朝から晩くまで頻りにお百度をふんで居るものが数へられぬ程有る。かうすると福智を得ると云ふ云ならはしが有るからで有らう。飛んだ處に坊さん達のお儲は有るものと見える。

元來此祭は二月初めての午の日を祝ふので有つて、俳諧歳事記柔草に「神祇拾遺」の語を引いて、「元正帝の御宇當社影向の日、偶二月初午の日、故に今に至つて此日を用ふ」と有るによりて見ると、随分古くから行はれて居たもので有る。猶柔草に「元來衣食の祖神にて蒼生安逸の社なり、今日農民参詣殊に多し。門前の家に百穀の種并に雜菜の種を賣る」とあり、更に「江戸の賑ひ目を驚かすに堪たり」とあるのを見ると、如何に盛で有つたか大抵想像し難くない。それから世間には稻荷と云へば直に狐を祭つたもの、様に思ふは全くの誤りで、本當は宇迦之御魂の神又の名を稚産靈の神、豊宇氣毘賣の神、保食の神、御食津の神等云ふを祭つたものにて、御けつの神のけつが、狐のまつ又はけつねのけつと誤り混ぜられたものだと云ふ説が有る。要するに五穀の神で有ると云ふことは疑ひない。

昔の初午

舊曆時代の旗本屋敷に於ける初午と云ふものは斯處なものであつた。
 昔は武家の屋敷毎に大懸稻荷様が有つて、骨正月即二十日正月と云ふものを過ぎるとほつゝ初午の準備に取り入り、元來
 が小供のお祭で有りながら、大懸籠に奉納の巻物を書いたり、鳥羽給師に頼んで地口行燈を畫かせたり、接待茶屋を設へると
 か、踊屋を拵らへさせるとか、それは大人の方が寧ろ先に立つて騒ぐと云ふ有様。
 それから正一位稻荷大明神と書いた例の大懸籠は、どの家も一定したと云ふ理でなく、家風によつて四本のもあり、六本のもあ
 り、今でこそ正一位と云へば、稻荷様が鎌足位に思はれて居るが、あれは昔は相當の金を拂つて、寺社奉行から正一位の位
 を買つたもので有る。従つて無位の稻荷様へあつたので有るとやら。その他奉納の巻物を書き列れた大懸籠、鳥羽給に地口
 を書いた田樂懸籠なども、家によつて二十本五十本七十本と云ふ色々有つた。
 此日の御馳走を云へば、赤飯は云はずもがな、茶飯、焼豆腐、芋、蒟蒻などの田樂、煮染、小松菜の芥子あへなどに新澤庵を添へ
 飯の上には必ず二輪の梅の花を載せて出したもので、神前へは此等の外に神酒と搦とを備へ、更に鰻魚と呼んで、鰻二尾宛を組
 合せたものを三組、五組位葉で吊つて神前へ懸け、三人五人と神主を招いて祝詞をあげさせたもので有る。
 そうして接待茶屋には甘酒、團子、餅などを備へ、又狐、お多福、ひよつと、般若の面などを籠の葉につけた玩具物の菓子や小
 供に與へ、巳の日の晩から始めて午の日の夜を晩まで騒子屋敷では太鼓をたいて、盛に騒したて、住吉踊、通化踊、地踊地
 走などをやつて、底が抜けるやうな騒をしたもので有る。そして屋敷によつては特更門を開いて、一般の見物を許したもので有
 るが、中には雙稻荷と云つて一切鳴物を用ひぬもあつた。けれども此處のは淋しい面白くないといふので、奉公人などはかう云
 ふ家へ身を寄せることを嫌ふのが一般で有つた。
 序にその昔御本丸大奥の内庭に鎮座あつた吾妻稻荷と云ふのは、二代將軍の時日光より移したもので有つて、毎年二
 月の初午には賑はしいお祭が行はれ、一日の間大奥の天地は姿えくり返るやうな賑はしまつたもので有つた。



初午

上野廣小図

初庚申の帝釋詣

今年の最初の庚申の日は二月十九日。東京では其前晩から、柴又の帝釋詣をするもの多く、汽車の通じた今日になつても、態々歩いて詣をするものなかくに少からず。お水頂戴の小瓶を背負つた連中が三人五人とついでに往々来るさに、小梅から曳舟通りの如きは今も猶大方夜通し市が立つたやうな有様。そして知るも知らぬも遇へば必ず互に『お早う〜』と挨拶するは、今宵夜更の路を通る人々こそ信者同士のなりでやはとの考からなるべく、何とはなしに、純朴な昔の人に立歸つたやうな氣がする。道筋には人通りを當込みの壺焼屋おでん屋など、一二町毎に腰掛場を設けて客を呼んで居る。



初庚申

兩側にぞろりと並んだ露店のカンテラで、晝のやうな境内にはいつて、更に本堂につくと、中には五十幾つの講中の面々が早くから詰め込んで、爺さん婆さんは云ふに及ばず、若い男も女もお芋をころがしたやうに重り合つて、曉のお開帳を待つて居る。さて

愈々四時過になつてお開帳の式が始まると、今迄ウジャ／＼して居つたお籠りの連中はバラ／＼と
勿ね起きて、一生懸命になつて南無妙法蓮華經のお題目を唱へ出す。夜が明ると臨時汽車から吐き出
された参詣人は群々とつめかけて、境内は瞬く中にこね返すやうな雑踏、弾き猿に張り子の達摩は、
うよ／＼する人々の肩から肩を輕業のやうに飛び交ひ行き交ひする。

帝釋天と云ふのは佛經に所謂忉利天喜見城の主と云ふ天帝で有つて、三十三天尊と號するもの。寺
は經榮山題經寺と云つて、寛永の頃の創建にかゝり、本尊の帝釋天は、日蓮上人が嘗て庚申の夜靈夢
に見たと云ふ像を木板に刻ませたもので、此に祈ると疫病を免れると云ふ言傳へが有る。

丁度此日にお寺から出した開帳札が千六百、一粒御符は十七萬枚を出し切つて、上野驛から七回の
臨時列車で送つた乗客丈でも八千六百餘と註せられた。それから一粒御符と云ふのは小さい紙の中に
罌粟粒のやうな赤玉を一つ包んだもので、お水と云ふのは側の井戸からブク／＼と噴き出してる水を
掬んで分つので有る。

初甲子

福の神と云はれて居る大黒天の縁日で、小石川傳通院内の福聚院を始めとして、淺草寺の出世大黒

天、神田神社内の大黒、本所龜澤町大黒院、駒込妙義坂の大黒堂、牛込原町經王寺、麻布一本松大黒
堂、青山の仙壽院など何れも俵ふまへてニコ／＼顔の大黒天を開帳して盛んに信者を呼寄せるが中
も、傳通院の大黒天ではどつさりお金が儲かる様にとあつて、福財布と開運のお守とを出すので賑は
一通りではない。

田舎では此日二股大根小豆飯黑豆などを供へて大黒天を祭る風があるとやら。

追 儼

(一) 古の追儼

今では節分會又は豆撒と云ふが、昔は追儼又は鬼儼と云つて、毎年大晦日の夜疫鬼を拂はんが爲に
朝廷にて行はれた儀式の一で有る。

大舍人寮の舍人が鬼の役を勤め、大舍人長は黄金四つ目の假面をかぶり、玄衣朱裳、右手に戈を左
に楯を持ち、鬼を儼らふ任に當る、之を方相氏と云つた。紺布、朱衣末額をつけた小供が百人（或は
二十人とも云ふ）之に従ふ、之を振子と云つた。

最初に陰陽寮にて儼祭が有り、畢つて方相氏が鬼儼の詞を唱へ、戈を以て楯を打つこと三たび、す

と群臣は之に唱和して桃の弓葦の箭桃の杖を以て鬼を走り去らしめたのださうな。

鬼雛の原を尋ねて見ると、文武天皇の慶雲三年諸國に疫病が盛に流行したので、十二月始めて土手を作つて大雛をしたと云ふのが最初で、方相氏と云ふのが周官で有る所から見れば此儀式が支那に學んだもので有ることは疑なからう。やがて此儀式は久しく恆例のやうになつて居たが、江戸時代の始には全く廢れて了つたので有る。が民間及諸國の神社に在つては徳川時代の始に於ても猶盛に行はれて居つたさうで有る。

それから熬大豆を撒いて追儼を行ふに方りて、聲高らかに呼立つる「福は内鬼は外」の詞が四百六十餘年前に行はれたと云ふことは臥雲月伴録と云ふものに見えて居るとか。此詞は始めは口の中で細聲で唱へたものが次第に今のやうに唱ふるに至つたので、詞の文句は時により地方によりて各差別あり、兩羽地方のは國訛の交つた頗る面白いもので

鬼は外さづんでべえ、福は内さづんでべえ

と云ひ、關西地方では

鬼は外福は内、隣の婢の雑炊食うた面お見

と云つて居る。又黒船渡來當時の厄拂の詞と云ふのは殊に面白

「アーラ煩さいな、毎年波瀾の御馳走に、大筒小筒で捕ましも、鐵砲玉が新玉の、春立ちかへる君が代の一夜明たる若水な、實ひに北のまびす國、どうも交易盛と、とつけいふとれたら言、例も長き長崎の、とよの眠りや唐人の、寝言に交る初夢に、寶船やら唐船の、波乗り始め蒸気船、砲をチロシヤ、アメリカも、海路通の蕙方より、友入り来る沖の方、浦賀波な眺むれば、空に帆をのす異國船、陸では固め嚴重に、我神國の深きよく、世は磐石の鏡餅、具足開や勝栗の、勝て兜をしめ飾り、弓は發へ四海波、治まる御代の萬歳樂、先づ何事も七草の、唐土の船の波らぬ先へ、すとドン、と打鐘す、寶惡魔の毛唐人、妨なさんする所を、伊勢の神風ふくは内、鬼は外へと海の底、逆巻く波へスアリ、大筒拂ひましよ筒拂ひ、(風俗叢書所載)賀茂季鷹狂歌つて曰く
鬼は外福は内へといり豆のまめで今年も歳をとり升

(二) 今の追儼

民間に行はるゝ外諸方の神社佛閣にて之を行ふことは、維新前後から一時殆んど廢れて居つたので有るが、三四年前より漸く復舊するの傾著しく、一方で始めて盛なのを見ると、お賽錢を的の坊さん神主なかくに抜目なく、役者や力士や吉原の樓主連を年男に呼んで來て、此處でも彼處でも鬼は外福は内と、蝦で鯛を釣らうと羹豆を撒くわく。さうした風で此豆撒を始めるお寺や神様が年々四ヶ所や五ヶ所ではなく、中にも深川不動の三俵の豆は素晴らしいもので、龜戸天神、上野廣小路の五條天神、虎の門の金刀毘羅、淺草觀音など亦市中での賑はしい方に數へられて居る。其他近郊では成田

の不動が關東第一と稱せられ、川崎大師鎌倉の半僧坊のものなく、遠くは上州太田の吞龍様と云ふ大光院へは、力士や俳優の連中が盛に出懸けるので、田舎では珍らしく賑ふと云ふ。そんな風で節分の豆撒は今や關東の流行となつて了つたので、その豆を拾はうとする連中も、流行病に驅られて各其鼻の向いた方へ流れて行く。そして上を下への大騒ぎに、到る處負傷者の數名が出來ぬことはない。

此日にまた色々の神社佛閣で出すお守やお符はどんなものかと思つて見ると、成田の不動では豆と共に劔のお守を撒き、深川の不動では寒行満願者に對して守札と御影とを、其他に對しては星札を授け、龜戸天神では鬼拍豆の袋を、淺草觀音では佛の數に因んだ三萬三千三百三十五枚の節分のお札と云ふを、牛込の穴八幡では金銀融通のお札と云ふ難有い重寶なお札を授けて呉れる。

此夜民家では例の『福は内鬼は外』を唱へつゝ、熬豆を撒くの外に、疫鬼の恐れると云ふ鱒の頭や格の枝を門や戸口に挿む習慣がある。昔は此鱒の代りに口女即ち鱒魚を用ひたとも鱒を用ひたとも云ふ色々の説がある。

(三) 龜戸と五條天神の追儼

年々復舊されつゝ有る節分の追儼の式の中で、最も古雅なものとして云つたり云ふまでもなく龜戸神社のそれである。

日が暮れると間もなく、神前の注連繩で結び合せた四本の青笹の中では、大きな篝火が焚かれる。ぐるりには豆拾ひの群集が豆を盛つたやうに重なり合つて居る。紙燈籠の光ほの暗い神殿では、神官一同が天下泰平國家安寧の祈禱を始める。暫くして祈禱が終ると更に可愛らしい綺麗な巫女舞が始まる。それが済むと、ドーン〜と凄まじい太鼓の音が神殿の中に響き渡る。之を合圖に神官一同が立ち上つてずらりと左右に立ち併べば、忽ち堂上堂下の群集が一時に騒ぎ出して『夫れ來た！ 鬼が！ 鬼が！』と云ふ聲が四方八方に起つて耳も聳せんばかり。と見る間に四つ眼の大假面を被り、手に一丈に餘る鹿又を持つた赤鬼青鬼が、勢凄まじく馳せつけて神殿に飛び上らうとするを、狩衣風折烏帽子姿の一神官が入口に立ち塞がつて、神杖を横たへて之を遮ぎり、朗々たる大音聲殿かに、追儼神符の詞と云ふのを誦しつゝ、鬼に向つてヒシ〜と詰懸ける。其神符の語と云ふの立派な面白さ、誠に素晴らしいもので有る。

『十二間四面に花のお社を建て、八間に神殿の飾羅網を張り、天下泰平國土安全の神事をなす所へ不思議なるもの見えて候。』

調高き莊重な神官の聲に、静まり返つた神殿はふるくと震へて、群集悉く襟を正す。

『夫れ東方の人ならば其色青かるべく、南方の人ならば其色赤かるべく、西方の人ならば其色白かるべく、北方の人ならば其色黒かるべく、中央の人ならば其色黄なるべし。色は青黄赤白黒にして、角は深山の枯木の如く、眉毛は鐵の針をならべたるが如く、眼は日月の如く、鼻は羅刹の如く、上下に喰ひちがひたる牙は劍の如く、耳は巖洞の如く、手には鹿杖を持ち、走れば早馬の如く、動かねば石いわの如く、その身ははしき姿にて出でたる人は、如何なるものにて候ぞ、早々名のり候へ〜』

と青鬼赤鬼は聲を揃へて、

『某にて候か』

『早々名のり候へ〜』

神官の聲は、愈急で有る。すると赤鬼先づ、

『四方中央の人にもなし、見るもどうりかそらおもて、月日は眼、風は息、海山かけてわが身なるもの〜、それ赤き息をホットつけば七日七夜の病となり、青き息をホットつけば疫病となる。依つて節分毎に罷り出で、人の命をねらひ候〜』

聲暴々しく叫び立て、重げなる鹿杖を以てゴッン！と階段を打つければ、神殿ためにふるくと震へて、群集はオ、！とばかり皆驚く。青鬼之についで、

『我も災神にて、この世上に悪事をなす悪鬼なり。女に悪しき目を見せ、時ならぬ災難とてもわが爲す業なり。依つて節分毎に罷り出で人の命を狙ひ候〜』

鹿杖の音は又してもゴッン！と凄しく響き渡る。神官即ち幣杖を打ふり〜、徐ろに神道のいはれを説く。

『然らば神道のいはれをあら〜語りて聞かすべし、謹んで承り候へ』

『昔し伊弉諾伊弉册の尊妹背の語らひを爲し給ふ時、魔王ども来て障碍をなす。その時此かみの此もちたる幣杖を持つておさへ給へば、重ねて障碍をなすまじと、己が手より血を出し、木の葉におして奉る。今の世の手形證文これより始まり。其後天満大自在天神と現はれ、十六萬八千の眷屬を従へ、其眷屬等我國に馳せ下りて、善人の家に至りては幸を興へ、悪人の家に至りては忽ち蹴殺し給ふ。かく有りがたき幣杖をもちてかみのこそ打て〜』

神官かう云つて幣杖をもつて鬼を打たんとすれば、鬼其即ち、

「許らせ給へ、許らせ給へ」

と叫ぶ。と神官忽ち、

「我國は王國なれば、己が住家にあらず、るじきを與ふる間元の山へ歸り候へ〜」
と聲を限りに呼はりつければ、鬼共は、

「元の山へ歸り候」

と答へて忽ち踵を返へし、狐鼠〜と群集を押し逃げて逃げ出す。今迄水を打つたように静まり返つて居た群集が一度にフーツと鯨波をあげる。後ろに立ち控へて居た神官一同は此と同時に「鬼は外福は内」の聲勇ましくパチ〜パチ〜と四方八方に熬豆を撒き散らす。老弱男女押し合ひ揉み合ひ、悲鳴をあげつ、中には懐中電燈を照らして之を拾はうとする。拾つた豆は持ち歸つて神棚に捧げ、やがて一家内で之を嚼ぢり合ひ、其年の禍を免れ福を得やうとするので有る。

此追儼の詞は多少の漢字をあてはめた外神社にて出す神符其儘である。それから、龜戸神社の追儼には神官の外別に豆を撒く年男と云ふものなく、鬼は以前は氏子の中の若い衆が當番をやつたものが、群衆が面白半分を追かけて篝火の中へ突飛ばしたり、池の中へ投込んだりするので、誰も彼も尻込するやうになつて、今では葛西邊りの神樂師を雇つて鬼に扮せしむるのだと云ふ。

序に下谷の五條の天神にては赤鬼青鬼の逃ぐるを傍らに待ち受けた武者が桃の弓葦の箭で射つける、そして福助の面を被つた長社杯の男は鬼の後を追かけ様に豆を打附けるさうだが、他の處の節分會では鬼やらひはなくて只豆を撒くばかりで有る。

なやらふの聲こたませり大内裏
鬼やらひ裏の町へも聞えけり
嵐山
星高く鬼追ふほとに更にけり
召波
戈執つて鬼門に向ふ追儼かな
子規
鬼となる身はあぢきなき舍人哉
青々
羅生門の一角暗し鬼やらひ
松宇
由良殿は遣手の顔に追儼哉
如雨露

年とつて内裏出るや小提灯
大祇
年一つ積るや雪の小町寺
蕪村
豆打の呼びそこねたる笑かな
初聲

年の豆妻に嘘ある昔かな
豆打つや鼠か走る臺所
打つ豆の闇をたばしる壘哉
道さゝに寄れば豆打つ戸口哉
節分や藏皆開く問屋町

琅々
牛翠
浮浪閣
水巴
象外

節分賦

横井也 有

こよひは鬼のすたく夜なりとて、家々に鬮の頭、枝を渡し、わが大君の國のならばし、いづくか鬼のすみかなるべき。昔の聖は衣冠して殊にこの夜をつし給ふとこそ。世なのがれたる鬮の相繼に足さしわたり、年を惜むの外に何のわきまへたる事もなきこそ、中々安かりけれ。今は捨てたる世に似げなきわざながら、家に老いたる男の、かりめる腰にしほたれ袴かけて、けしきばかり豆うち散し、聲わなきて鬼やらひたるも、昔覺えておかし。年の載な豆に拾ひて厄拂ふ者にとらするものとして、おのが様々する事なるに、昔は膝のあたりか探りてもその数は得たりしが、今は八疊の一間にも餘るばかりになりたるぞ作しきや。厄拂ふ男の背は町々をめぐりて後、夜更くる程聲呼びからして、このわたりへも音なふ事にぞありける。行く年波のしげく打寄せて、形見にくう心ひたくなに、今は世に厭はるゝ身の、老は外へと打出されざるこそ、せめての幸なれ。

一枝の梅はそへずや終賣り
雪はらふ垣根や梅の厄落し
梅や咲く福と鬼との隔垣

紀元節 (十一日)

此日宮中に於て午前八時の朝の御祭典について、天皇陛下には午前十時出御、皇靈殿にて御親祭を行はせ給ひ、やがて賢所御拜の後入御、更に午後五時には夕の御祭典を行はせられ、御神樂あるが恆例で有つて、其次第及び皇后陛下の御拜より、臣民の参拜に至るまで、皆元始祭孝明天皇祭の例と少しも變りはない。

尙此日陛下には御親祭の後諸臣の参賀を受けさせ給ひ、十二時前豊明殿に出御、群臣百官及び外國使臣に輔宴を給ふことも、此際賜はる所の勅語も奉答も新年宴會の時のと殆んど差別はない。尤も此日宴會の最中は、前庭に於て伶人の舞樂が有ると云ふことで有る。

此日を以て三大祝日の一と定めさせられたのは明治五年十一月十五日のことで、翌年一月廿九日より此儀式あり、明治七年太陽曆に換算後二月十一日になつたので有つて、民間にては丁度此日が明治二十二年の憲法發布の當日で有る所から、立憲の記念日として時々其祝典を行ふので有る。現に昨年は日比谷公園に於て立憲二十二年の盛んな祝典が行はれたので有つた。

序に此日を梅花節と云ふことあるのは、丁度此頃から早咲の梅が咲き始めるからのことで有らう。

久米舞の庭のいざごや梅花節
 紀元節暮れて大古の廳かな
 梅にわけて十一日や國の歌
 鶯の輪の下の山河や紀元節
 雲晴れて高千穂山や紀元節
 學校の廣き障子や紀元節

一七〇
 碧梧桐
 松 宇
 知 十
 柑 子
 孤 村
 香 村

涅槃會 (十五日)

年七十九歳に於ける釋迦入滅の紀念日で、種々の説はあれど、昔から此日何れの寺院にても涅槃像を掲げ、遺教經を誦して法會を營んだもので有る。所が近年に至つて降誕會の方丈は盛に行はれつゝも、涅槃會の方は兎角忘れられたのを、今年は妙典研究會、講妙會、第一義會、妙教婦人會、顯本協會、日蓮主義青年會の六團體が一處になつて、古式を復興持續せんが爲とあつて淺草北清島町の統一會堂で盛んな涅槃會を催した。
 書院の床の間には狩野法眼中信の筆になつた涅槃の圖を掛け、左右の柱には沙羅雙樹に因んで二本

の檜の樹を結び附け、願文、三寶體、方便壽量、三華行道、涅槃講式などの色々な嚴やかな儀式が行はれた。

序に沙羅と云ふ樹は檜に似て樹皮は青白く葉は至つて光澤あり、釋迦涅槃の日其葉悉く垂れて眞白に變つたとやら。涅槃像と云ふのは佛が入滅の狀を描いたもので、五十二類の天道、人道、地の三十六禽恆沙の麟類など皆悲歎せる様に畫かれ、就中東福寺所藏兆殿司の描いたものは極めて有名なもので有つて、常樂會、雙林の夕、鶴の林、二月の別れ、佛の別れ、去りし佛、寢釋迦、涅槃粥などは皆涅槃に關係のあるもので有る。

京都附近にては釋迦の鼻糞と云つて、蓬を入れた團子をつくつて供物とする習慣が有る。

御涅槃やとりわけ花の十五日
 一 茶
 み佛や寝てござつても花と鏡 同
 死花となつて咲せる佛かな 同
 涅槃會や雲下り來る音羽山 曉 臺
 無我の信鶴の林の霞かな 言 水
 御別に花ものいはぬ別れかな 白 兒

東京年中行事

雙樹林二月の別れ水寒し
ねはん會や合羽傘下駄草履
海棠の舩をさとれ涅槃像
雪山に死なで見苦し涅槃像

雙 野 坡 兎
其 角
越 人

しろくと寢釋迦の顔の胡粉哉
赫灼と釋迦が今死ぬ灯哉
鐘の音の静かに暮るゝ涅槃かな
蠟燭も日暮となりぬ涅槃像
かくて世に婆が花賣る涅槃哉

虚 子
へ き
孤 村
碧 梧 桐
古 門
路 臺

因に釋迦の入寂は我認徳天皇二十五年にて明治四十四年を去ること實に二千三百九十七年である。
それから東京に於ける涅槃像の名あるものは、左の六つである。

- 上野寛永寺 (狩野常信畫)
- 小石川護國寺 (狩野安信畫)

- 芝増上寺 (長谷川等雲畫)
- 淺草淺草寺 (長谷川等雲畫)

- 兩國同向院 (長谷川等雲畫)
- 下谷阪本町養王院 (長谷川等雲畫慈眼大師贊)

祈年祭 (皇靈殿四日、賢所及神殿十七日)

その年風雨の災なくて、五穀の豊穰ならんことを祈らせらるゝ祭にて、二月四日宮中にて、祈年祭班幣と云つて、全國三千百三十二座の官國幣社に幣帛を班たせられ、伊勢神宮にては二月十七日祈年祭を行はせられるので、此日特に勅使を遣して幣帛を奉らせ給ひ、宮中にては此日賢所と神殿にて御祭典を行はせられるので有る。

その祭典の次第は午前九時御殿の裝飾の後、式部職員承りて開扉、賢所には折敷高坏六本立、折櫃甘合、酒二瓶を、神殿には洗米、酒、餅、海魚、川魚、野鳥、水鳥、海菜、野菜、菜、鹽、水の神饌を供へ、祝詞を奏し、了つて神饌を撤せられるので有つて、又皇靈殿にては二月四日班幣の日祈年祭を行はせられると云ふことである。

祈年祭の歴史に見えて居るのは天武天皇の時が始めて有るが、其實は太古の時代から久しく行はれて居り、應仁以後一時中絶して居つたのを、明治二年二月廿八日再興せさせられ、賢所皇靈殿にて

新年祭を行はれるに至つたのは明治四年以後に始まつたことである。

西新井大師の開帳 (二十一日)

梅はもう大方盛りを過ぎ去つて、芹洗ふ小川の流もボツ／＼と温みかける二月の未近く、西新井大師の初開帳が行はれる。東武線の淺草驛からは引切なしに臨時列車を増發する。天氣のいい時には郊外散歩がてらの善男善女の参詣で、西新井は一月の川崎の開帳にも負けぬ賑ひで有る。寺は五智山總持寺と號し、弘法大師の開創にて、本堂には大師自作の像を安置して有る。

熊本籠城祭 (二十二日)

三十五年の昔、明治十年西南の役、時の熊本鎮臺司令官少將故谷干城氏が、薩南の荒武者を一孤城に擁しつゝ、頑として敵に下らなかつた壯烈な熊本籠城を紀念し、兼ねて當時陣歿せる戦友の英魂弔慰を目的の籠城祭は、例年二月の二十二日、九段靖國神社にて舉行。元來此祭は故谷子爵等が發起にて三四年前から起つたものにて、現在の會員百五十餘名、合祀の人員は千二百五十一名で有るが、當時の猛將難辨今や漸く老いて、會員の數ははれや段々に減つて行く。

午後二時の鐘を合圖に先づ嚴かな弔魂の祭典が行はれて、それが済んで一同が社務所の十疊と十五疊とをふつ通した設けの席に退くと、白丁を着た下司が不恰好な手つきで配膳を始める。酒宴の御馳走と云つては、當時を偲ぶのよすがとして、兵食其儘の濁酒、鹽麩、粟飯の外には薩摩汁、松葉湯、澤庵漬と謂ふあつさりしたもので、乃木、奥、樺山の各大將を始めとして、髪も髯も大方雪白の老將軍等が、互に追懐の樂に耽りつゝ、盛に濁酒を傾け合ふ。白粉の香のせぬ宴席は酒つゞ手つきまで不器用ながら、見るからに聞くからに心地のいい勇ましい會合。ところで當時の籠城者は年々漸く他界の人となつて、會員の數の次第に減じ行く所から、今度愈籠城祭は、會員の遺族によりて永遠に繼續することゝなつた。おゝ思出多き會合！西洋の所謂ラウンド、テーブルと云ふのも斯んなもので有つたらう。

十軒店の雛市

室咲きの桃の枝が床に生けられて、白酒の徳利がボツ／＼と酒屋の店先に並び始めた二月二十一日のボカ／＼する様な午後、フラー／＼と歩いてる中に、何時しか白木屋の側へ來た。シヨ、ウインドーを見ると立派なお雛様が飾立て有る。と十軒店へ行つて見やう、然し何の邊だつたかしらと思つ

たので、まだ建設中の日本橋の板圍ひの側に立つて居るお巡りさんに聞いて見ると、『橋を渡つて二二丁行くと十軒店です、十軒店と云ふのはつまり俗稱に過ぎないのです、町の名ではありません』と云ふ。

成程一二丁許り行くと、右にも左りにも紅白の段だら幕をからげて、光月 久月 光玉など云ふ大きな看板を懸けた雑店が飛びくりに十軒許り有る。幕をくぐつて覗いて見ると、箱入のお雛さんや、色んな附屬品が店一杯にずらりと積上げてあつて、殆んど見る目も眩ゆい位。花には早い暖かい春日を、花のやうな美しい人に手を引かれながら、綺羅びやかに着飾つた可愛らしいのが右に左りにぞろりく〜と續く。此座な人を宛込の附屬品の安物や玩弄物の店などを始めとして、客樂亭なんてふ箱庭式につくつた小料理屋の門口から頭を出したお供物賣などが、右と左の人道の片側にずらりとならんで、此附近一二三丁の間は宛がら縁日のやうな賑はしき。

かうして十軒店と兩國あたりは、二十日頃から雑市が立始めるので有るが、敵を本能寺に控へた三越白木屋などの呉服店では、最う大抵二月の十日頃から雛をかざり始めて、此をだしにして氣の早いお客を引く。そして此座ところでは、上巳の儀式を重んずると云ふよりも、只買つて慰物にすると云ふ道樂の人々を相手のことで有る所から、勸進帳だとか小鍛冶だとか、能に因んだものを始めと



して、子寶籬、お部屋籬、有職籬、光琳籬とか、さては天平籬、吉野籬と云ふやうな、變つた物を盛んに仕入れる。従つて中には一個二百圓など云ふ法外な値段のものあり、幅物になつたお籬様となつては、玉章半古柳塙廣湖月耕など云ふ名家や人氣畫家の揮毫したもので、二三十圓から百圓内外のもの少からず、殊に三越などと來ては、箆笥長持を始めとして、陶器の御飯道具、漆器の膳部、さては其他の附屬品何から何まで悉く備はつて、見取り取り取られかこれかと云つてる内に、百や二百の金は何時の間にかやらバラ〜と飛んで了ふ。そして五月、人形と異つて高價な品がどん〜と賣れて行く、と云ふのも年中行事などが此頃になつて次第に復活して行く氣味が有ると云ふ許りでもあるまい。

それから近年になつて、お盆に眼鼻をつけたやうな狂ひ籬や、京籬など云ふ古雅なものが、多少復活したと云ふ氣味が有るとは云ふものゝ、これ等は物好連のことで、普通には矢張顔も面長な美しい、しなやかなのがもて囃されて、大さは大形の京籬よりか、立ち背四寸から三寸五分位の昔からの翟粟籬が賣行がいゝと云ふ。

そして十軒店と云へば昔は縁日の植木商人宜しくと云ふ風で、客の様子次第で勝手な値段を吹きかけ、押問答の果は十五圓と云ふのを五圓三圓位にまけて了ふ。従つて買ひに行く人も二三人の連を作

つて不^ふ断^{だん}着^{ちやく}の粗^そ末^まなのを着^きて喧^{けん}嘩^か腰^{こし}で出^でかけるか、さもなくば近^{きん}所^{じよ}の老^{らう}爺^{にや}媪^{おん}に頼^{たの}んで買^かつて來^きて貰^{もら}ふと云^いふ風^{ふう}で有^あつたが、去^き年^{ねん}あたりから三^{さん}越^つ白^{はく}木^{ぼく}屋^やなど云^いふ店^{みせ}に壓^{おさ}されて大^{おほ}方^{ほう}は正^{せい}札^{さつ}附^つとなつたので、恐^{おそ}ろしい惡^{あく}口^{くち}雜^ざ言^{ごん}交^{かう}りの押^{おし}問^{もん}答^たも見^みられなくなつた。

序^{ついで}に雛^{ひな}の作^つり方^{かた}について聞^きいて見^みると、一^{いっ}口^{こう}にお雛^{ひな}さんと云^いへど、雛^{ひな}屋^やの方^{ほう}では五^ご月^{げつ}の端^{たん}午^ごがすむと直^すぐにお雛^{ひな}さんの製造に取懸り、頭師は首から上を拵へれば直ぐにそれを鬘師の手に廻すと云ふ風に、手^ては手^て、足^{あし}は足^{あし}、胴^{どう}は胴^{どう}と、あちこちで造^つり合^あせ、着^き物^{もの}も冠^{かん}も、太^{たい}刀^{とう}の鍔^つり、箱^{はこ}のこしらへ、女^め雛^{ひな}の檜^{ひの}扇^{せん}と、それ〱の手^てに渡^{わた}つて、一^{いっ}つの雛が出来上るまでには十人の手に懸ると云ふから面白い。

- 雛見世の灯を引く頃や春の雨
 - 雛市に立ち交りけりすたれ賣
 - 古雛の衣やうすき夜の市
 - 市姫の花よ柳よ町直し
 - 葦葎の下に雛屋の本家かな
 - 雛買ふと馬の背につひ小判哉
 - 百姓の馬つなぎけり雛の店
- 兼村
 恒丸
 鳴雪
 青々
 雪人
 同
 秋竹

梅

梅一輪一輪づゝの暖かさ、毎年大凡紀元節前後から百花の魁と統ひそめて、清楚な姿と馥郁たる香と乃至は雅致ある樹より枝よりとで、文人墨客ならぬ只の人までも引寄せらる。今試みに江東から始めて江北江南と最も知られた郊外の梅の名所を數へあげるに先つて、先づ市内の梅を探つて見やう。

▲公園の梅 公園では日比谷上野靖國神社其他植物園などにも梅は大分あるが、最も見られるものは矢張芝公園であらう。昔から辨天池茅野天神などの邊りには、梅の數が大分澤山あり、公園になつての後も丸山の下には梅林が作られる。昨年はまた銀世界の梅四百餘株を移植したので有るから、二百四五十年も経たと云ふ將軍お聲懸りの三老梅もあつて、市内の梅林としては最も見榮のあるもので有る。

其他宮城平河門内には梅林坂と云ふのが有つて、昔は此處に澤山の梅が有つたが、今は残つて居る數が甚だ少いと云ふ。それから一般の人の觀るに委せぬと云ふ點に於ては之と其趣を異にして居るが、猶市内第一の梅として知る人ぞ知つて居る珍らしい老梅が大藏省の構内に在る。屋敷は元來大老酒井雅樂頭の舊邸の有つた所で、梅は幹の太さ七尺高さ僅かに五尺に過ぎぬ樹ながらも、生ひ茂つた

枝は實に百餘坪に擴つて、誠に稀世の老梅ながら、役所の人以外には縦まに之を觀ることの出來ぬのは惜しい。

一八〇

▲臥龍梅 龜戸天神より東へ五丁、東京近郊の梅園中最も古い歴史を有し、三百年位は大丈夫經過して居るもので有つて、梅と云へば直ちに臥龍梅を想はせる程の名物ながら、近頃之に垣を巡らし、見料二錢を取つて客を呼ぶは、餘りに俗つぼくて心地が悪い。臥龍梅と云ふのは水戸光圀の命名したものだといひ、又は八代將軍吉宗が、此梅は枝から根が出て再び若木になつて居るので、世継梅と名づくべしと云つたとも云ふ口碑が有り、花は單瓣精白の中輪、樹の形は宛然臥龍の姿に似て居るので有る。それは兎に角に臥龍梅を訪れたものは、必ず其歸途に名物の葛餅を忘れてはならぬ。

▲江東梅園 龜戸から東北へ十丁にして、南葛飾郡小村井にあり、吉兵衛が梅林として名を得たもので有る。場所も可成に廣ければ梅の數も三百本もあつて、三代將軍家光公お成の榮譽を荷つたと云ふお成梅は珍木の一つに數へられて居る。毎年二月十一日の紀元節を卜して開園と決めて居る。

▲木下川 江東梅園から北へ十餘丁、次郎兵衛が梅園として名高いのが所謂木下川の梅園で有る。五代將軍綱吉公腰掛の梅と云ふのが園中第一の名木に數へられて居る。

▲百花園 吾妻橋で一錢蒸汽に乗つて言問であがつて、名物の團子を左に見て北に墨堤を進むこと

六七丁、白髯神社の前なる道しるべに従つて堤を降つて、あつさりとした吳竹の籬について曲ると、風雅な柴折門は蜀山人の手に成つた『百花園』の扁額で先づ人の眼を引き、中に入ると『お茶きこし召せ梅干も候ぞ』の貼札が人をして笑ましめる。文化元年春二月、開祖佐原菊塙が千蔭、春海、南畝、鵬齋、詩佛、五山、佛庵、抱一、文泉、眞顔等の助を得て始めて園を開き、其際一年の日數に因んで三百六十五株の梅を植付けたと云ふが、今は其數増して千株にも近からう。弘化元年將軍家齊の命名したと云ふ壽星梅は近頃枯れて了つたが、猶玉垣梅、朱梅、鶯宿梅、八房梅、鶴頂梅、浪花紅、朝日鶴などの名木少からず、一昨年の梅移し會にも三百六十五本を植ゑたと云ふことで有る。

▲吉野村の梅林 三代將軍家光の愛木として名高かつた新宿銀世界の『壽老梅』は、昨年から持主が變つて縦寛を許さぬこととなり、園内には何やら會社が建てられ、梅の樹は大抵芝公園へ移植せられたさうで有るが、之れに反して吉野村の梅林は近頃漸く其名を高むるに至つた。村は西多摩郡にあり、甲武線を立川で乗換へて青梅鐵道の日向和田驛を下りて、甲州街道を行くこと五六丁、萬年橋の渡しを隔てた對岸が吉野村で、背には墨繪のやうな山を負つて、蜿々とたなびく一帯の薄紅梅の數が大凡三千八百餘り有ると云ふ。山の中腹には梅文亭梅翁亭の二つが有つて田舎の料理も却つて興が有る。青梅驛からこゝまではざつと一里、ポツリ／＼と路々の梅を數ふるうちにはいつとはなしに梅

林に着く。

▲八景園 江東北の名高い梅は先づこれ丈として、さて江南の梅のうちで先づ指を屈すべきものは八景園で有らう。今は甚だしく俗化はしたれど、名にし負ふ八景の眺めもあるが上に、海を控へての景色は萬更捨てたものではない。此處まで来ると更に笠を池上まで曳いて、曙樓の鏡泉にさらりと塵を洗つて、高樓の欄から瞰下ろす梅は又一種變つた趣がある。それに一萬四十株もあると云ふ南天の赤い實が霜に騙つて、白い梅の花の間を彩る姿は此處ならでは見られぬ眺で有る。

▲蒲田の梅屋敷 京濱電車蒲田停留場の前に在る。開祖梅木堂仙鶴居士の記念で有つて、既に天保時代から世間に知れて、眞顔の「大森の梅の木に住む翁は麥わら笠も花に繞つてふ」の狂歌は碑面に刻まれて居る。剪梢梅と云ふのは園内唯一の老樹で有るが、猶此外にも五百株許りの老梅が有る。

▲原村の梅と川崎 京濱電車を六郷土手に下りて、多摩川堤を西に十四五丁、原海岸から右に折れた處に伴田某の別荘が有る。原村の梅と云ふのが即ちそれで、名うての立春梅を始めとして老梅二百七十株、また少しも俗氣のない處が見つけない。此處からは例の矢口の渡しも新田神社も頓兵衛地蔵も指願のうちにある。それから附近では川崎大師の門前及境内は勿論、穴守の泉館などにも若いながら可成に樹が有るので、場所柄丈けに散策を試みるものが少くない。

▲三の谷と杉田 瀧口入道と横笛の遺物で名高い三谿園と云ふのは、濱の豪商原某の別荘で、横濱の在の屏風ヶ浦は三の谷に在る。梅園の經營は古いものではないが、梅は小向井のをすつかり移植したので有るから、有名な御幸の梅も此處に移されて居る。それから京濱近郊に於て梅を稱するものは大抵佐藤一齋の記文で名高い杉田のそれに止をさすので有るが、近頃はすつと進んで小田原の公園とか、乃至は東北の方面では常陸の水戸とか佐倉の堀田侯の下屋敷などに探勝と出懸けるものもなかなか少くないやうで有る。

| | | | | | | | | | | |
|----|---|----|----|----|-----|----|----|----|---|----|
| 紅梅 | や | 比丘 | より | 劣る | 比丘尼 | 寺 | 蕪 | 村 | | |
| 白梅 | や | 誰 | が | ひ | かし | より | 垣 | の外 | | |
| 梅園 | に | 揮 | 引 | ず | る | ある | と | 哉 | | |
| 白梅 | や | 墨 | 芳 | ば | し | き | 鴻 | 臚 | 館 | |
| つ | や | く | と | 梅 | 散 | る | 夜 | の | 瓦 | 哉 |
| 白 | 雪 | の | 龍 | を | つ | ひ | や | 梅 | の | 花 |
| 夜 | の | 梅 | 寝 | ん | と | す | れば | 匂 | ふ | なり |
| 紅 | 梅 | や | 梅 | 垣 | く | づ | れて | 廳 | 月 | |
| | | | | | | | | 曉 | 臺 | |

夜人を許さぬ寺の野梅かな
 園の梅散るや火のなき烟草盆
 奥に灯あり梅園の門鎖したる
 紅梅や藥調ずる女醫者
 紅梅に聲は恐ろし猫の妻
 海を受けて山も畑も梅の花
 明星の消え込む梅の白さ哉
 老梅の梢に遠し晝の月
 野の梅や折らんとすれば牛の聲
 夕月や納屋も厩も梅の影
 梅干は賣切申し梅屋敷
 山中に梅あり道はこゝにあり
 雪一升霰は五合梅の花
 三日雨四日梅咲く日誌かな

青子規々
 同山湖
 同虚子
 甫醒雪
 同鳴雪
 同同
 紅葉
 碧梧
 漱石

人幾人訪うても梅の静なり
 茅屋に玉壺の酒や梅の花
 月天心身に影あびて梅に立つ

竹冷
 把栗
 繞石

美術展覽會

正月も過ぎて二月になつて、人の心も何となく春めいて來ると、梅の花もポツ／＼咲かうと云ふ頃
 から、上野公園竹の臺陳列館では、種々の展覽會が開かれ始めて、色とり／＼の美術の花が匂ひ出す。
 尤も竹の臺陳列館で開會する畫會は大抵所謂竹の臺茶話會と云ふ社交俱樂部に屬する二十二團隊で有
 つて、其中には巽畫會、日月會、讀畫會、天真會、太平洋畫會、美術研精會、南畫協會、金工會、日
 本畫會、无聲會、日本彫刻會、漆工協會の外、彫工會、二葉會、玉成會、大東協會などが含まれて居
 る。尙此外に美術協會、紅兒會、コスモス會、トモエ畫會、天籟會、寫真競技會、國香會などが有つ
 て、或は上野に於て或は其他の處々に於て展覽會を開く事になつて居る。
 何れにしても、此等の畫家團體は、春から秋にかけて大抵一回の展覽會を開くが例で有つて、竹の臺
 茶話會に屬する團體の展覽會開期は前年の暮に於て抽籤で定められることになつて居る。

三月 曆

一日 東京帝國大學記念日、

△一高記念祭、

三日 雜祭、

△二月の末より各酒屋にては山川白酒の看板かゝり、菓子屋、團子屋にては菱餅を賣る、

四日 此日頃芝泉岳寺及麻布増島博士邸にて四十七義士切腹記念祭舉行、

十日 陸軍記念日、△芝罘平神社祭禮、

十五日 此日頃早稲田大學擬國會、

十八日 十八日頃より彼岸に入る、△六阿彌陀詣、

十九日 此日より二十八日まで池上本門寺にて開帳を行ひ法華經千部を修す、參詣者多し、

二十日 廿日廿一、二日頃彼岸中日、△中日の日春季皇靈祭、

二十一日 大師正忌日、各眞言宗寺院にて御影供を修す、

二十二日 此日頃耶蘇復活祭、

二十四日 廿四五日頃彼岸明け、

二十五日 龜戸神社祭禮、

二十八日 品川千體荒神祭、

三十日 其角忌を芝二本榎 上行寺にて、

▲月の始頃より栗餅賣、

▲彼岸前より桃咲く、

▲月半頃より各學校卒業式、

▲月末より女學校展覽會、

▲彼岸前後より櫻咲き始む、

▲月始め頃より菓子屋餅屋にて櫻餅を賣出す、

▲月末より隅田川にて端艇競漕始まる、

大學記念日 (一日)

大學記念祝賀式は一高自治寮記念祭と異つて、至つて儀式はつたもので、御眞影敬禮教育勅語捧讀
について、總長の訓示、帝國大學令第一條の朗讀などが有り、終つて一同陛下并に大學の萬歳を祝

し、別室にて來賓學生に對して赤飯茶菓の饗應が有るばかりである。

一 高記念祭 (一日)

駒場農科大學の運動會、早稻田大學の擬國會、東京帝國大學のポートレース、女子大學の運動會等と共に、東京學界の名物中に數へられて居る第一高等學校寄宿舎自治寮記念祭は、毎年三月一日に行はれる。

此日に限つて女人禁制の制札が撤せられると云ふので、飾り立てた滿都の女學生連が、東西南北、中の各寮目懸けてドヤ〜と流れ込む。寮内の各室では、一ヶ月も以前から、各々夜の目も寝ずに趣向を凝らして、夫々見世物を拵しらへ、観客をしてアツと謂はせてやらうと競争する。洋書を堆かく積んだ三角塔に女面獅子塔をわしらつて『學者の墓』と題したのや、『批評界』と題して雑誌『早稻田文學』には『推讚の辭』が『遂慘の死』としてあると云ふやうな皮肉なのや、『文藝植物園』と題して、漱石氏寄贈の『門』、蘆花の『寄生木』、晶子の『毒草』や、其他『菜根譚』、謠曲『鉢の木』など、三十餘種の文藝上の珍草奇木を陳列したやうな奇抜なのや、電氣仕掛けで淺草の夜景を見せた『隅田の夜』、『アプト式鐵道』教授連の長所短所を巧に諷刺した『一高雜』と云ふやうな色んなのが、大膽

に而もなか〜大仕掛で飾りつけられる。中にも各室三名宛を選んでやると云ふ大假裝行列に至つては、頗る振つたもので、眞に奇想天來のものも少からず、東京に於ける假裝行列中の行列を以て目せられたもので有る。

此等の外に、餘興として大神樂、蓄音機、奏樂、學生相撲などあり、夜は再び喫鳴堂に會して、鹽煎餅やお芋を嚙つて演説追憶談其他内輪同志の藝盡しに暖かい春の夜は更けてゆく。今年丁度二十一回の記念祭で有つた。

一 高の俗謡

序に一高には一高的俗謡とか一高的寮歌など云ふものがある。調も譜も詞も皆男性的な雄々しい、世の中の流行歌とは一種趣を異にしたもので、中にも此頃大分久しく耳にする俗謡の中には、所謂『デカンショ』と『佐渡節』の二つがある。後者は佐渡の盆踊歌その儘であるが、前者は少しく風變りなもので有る。試にデカンショ節の三四を擧げて見ると、

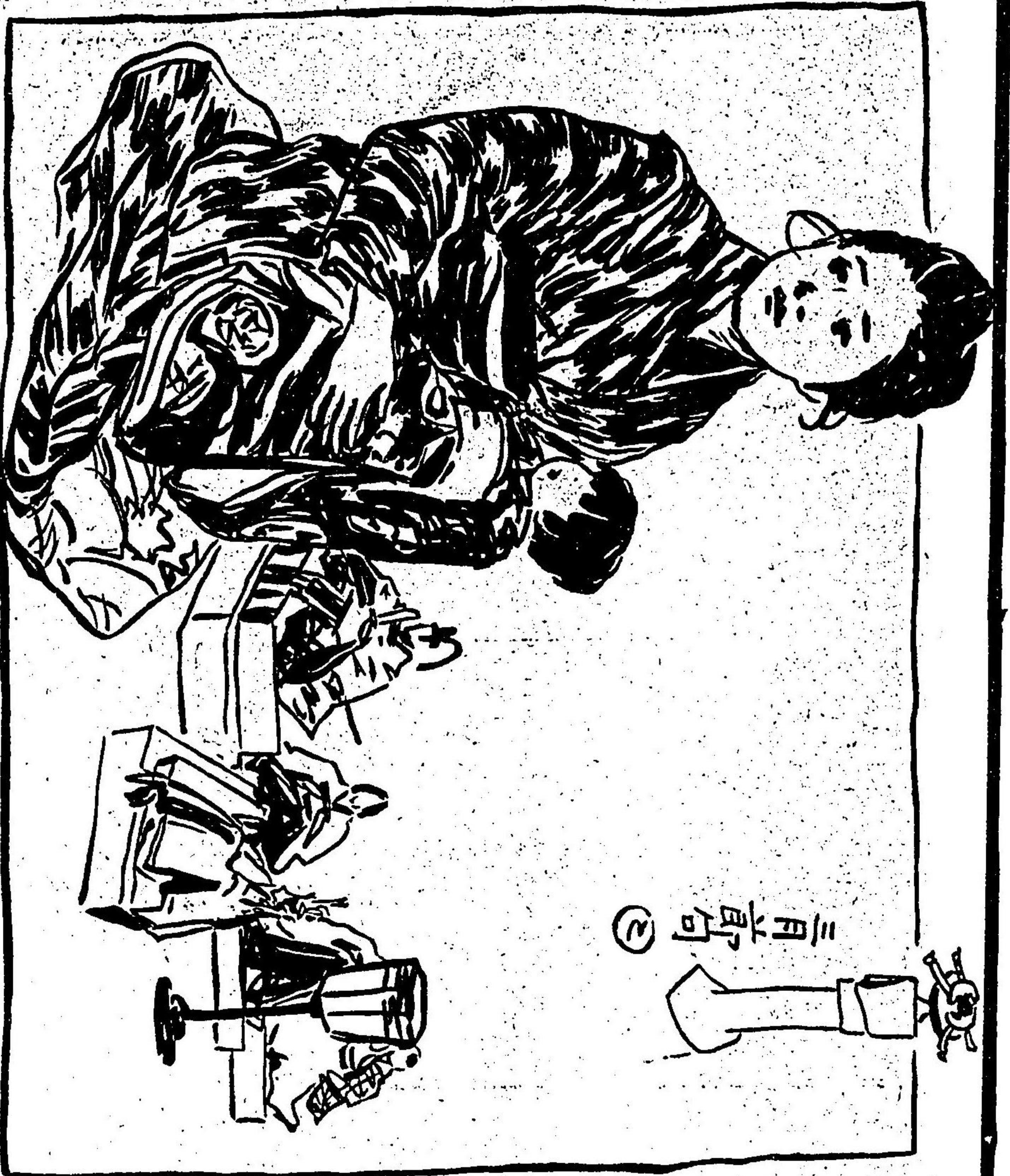
デカンショ〜〜〜半年や暮す、あとの半年や寝て暮らす。
デカンショ〜〜〜赤門の前で、おてん畑酒稻荷寄し。
丹波篠山山家の娘が、花のお江戸で芝居する。
空に響ゆる宮城の鐘で、思ひ起せし故郷な。

どうせ死ぬなら櫻の下よ、死ねば屍に花が散る。
優柔不剛は男子の恥よ、腹の朱袴は伊達じやない。

そして此等を歌ふには人をして躍り上らせるやうな身振と調子とが有るんだとか。それから『デカンショ』の語源は何だと聞いて見ると、デカルトのデと、カントのカンと、ショーペンハワーのシヨを採つたんだなんて、デカンショ旨くも附會たりな。

雛 祭 (三日)

雛祭の起源については種々の説が有るが、要するにはつきりしたことは分らぬ。けれども諸書の説を参考して見ると、支那傳來の風俗が漸次に變化して今のものとなつたらしいことは疑ふべくもない。支那では昔から子供が生れると、それが安全に育つ様にと云つて、子供に象つた人形をつくつてお祈をしたもので有る。この風が王朝時代頃に日本に傳來して、竹を十文字にして其上に頭をつけ、紙を折つて着物を着せた様な恰好にした所謂天兒と云ふものになり、是れで以て子供の無事生育を祈つた。そして夫が段々に進んで雛を弄ぶやうになつたので、源氏物語枕の草紙などの中には、雛遊びと云ふことが所々に見えて居る。試に源氏『若紫』の巻を見ると、



三月下旬

②

その後はひいな遊にも、まかい給ふにも、源氏の君をつくり出て、さよらかなるきぬ着せかしつき給ふ。

雛を三月三日に祭るやうになつたのは、或は足利時代と云ひ、或は土御門院の頃からと云ひ、種々の説が有るが、天正以後と云ふ説が確かであるやうに思はれる。そして三月の初の日は五節句の一として、悪い日の一日に敷へられ、古来上巳の穢と云つて、人の身に悪いことなき様にと、此日紙にて人の形を拵へ、それにて身體をなで、河の中へ流したもので有る。思ふに天正の頃から、此穢の意味と雛遊とが混するに至つたので、其後徳川時代殊に元祿頃になつてからは、雛祭も著しく進歩して、素晴らしく立派な雛壇が飾られる様になり、明治になつて一時衰へかけて居たのが、二三年前頃から漸く復興の氣味を帯びて來て今年になつてはそれが最も盛になつたやうで有る。現に今年などは、數寄者の間に、雛の結婚や里歸りなど云ふことが、見事な儀式を以て普通の結婚同様に行はれたのさへ有つた。

序に今より三百年前慶長元和寛永の頃の雛は、多くは紙雛で有つたが、萬治寛文の頃には非常に贅澤なものが出来、幕府から其贅澤を禁じられた位で有る。それから又元祿頃よりは、後の雛と云つて九月九日にも此雛祭と云ふものを行つたものだと云ふ。

かうして雛祭は初めは宗教的の意味を以て行はれ、次第に一種の娯樂として盛になつたもので有るが、近來では學者連がこれに對して色々と牽強附會の説を立て、或は一家團樂の和親の情を養ふとか、忠君愛國の念を養ふとか、祖先崇拜の念を養ふに、ものだとか、色々と理窟つばい見方をするやうになつて來た。かうして雛祭の意味もだん／＼に變つて行く。

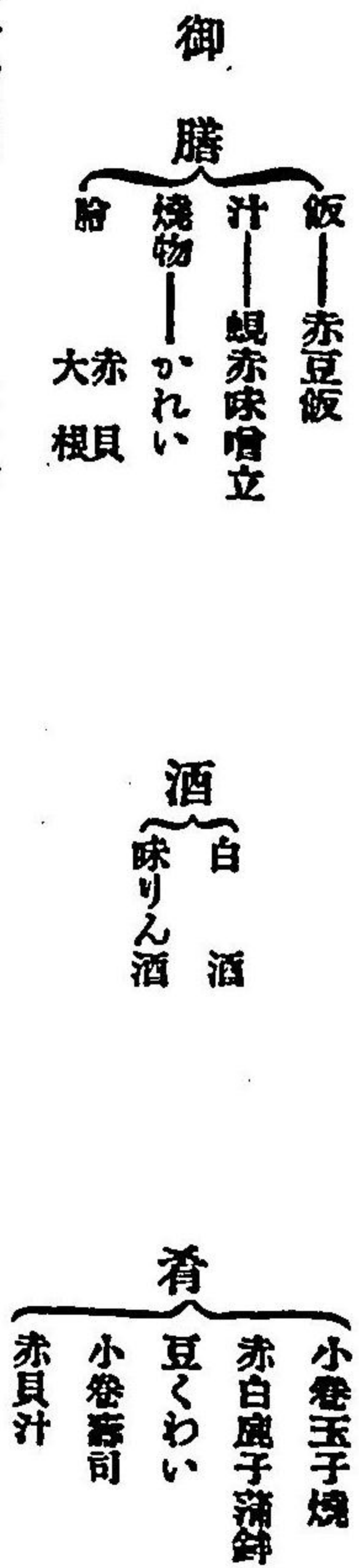
雛は、早きは一週間乃至十日も前から飾り始め、京都では桃、柳、梅の三種の花を供へると云ふが、東京では大方は室咲きの桃の花と、こ柳ばかりを供へる。それから立派なものになると御殿飾と云つて、花やかな宮殿造りの御殿に、長くも兩陛下に象つた内裏様だとか親王様だと云ふものを飾り、其下には四人官女三人仕丁五人雛子などを列ねるので有るが、普通の家にては屏風飾りと云つて、雛の後方に一雙の金屏風を立て、更に簡單なものになると、素飾りと云つて唯三重の壇を設けて雛をならべる。今年あたり最も流行した贅澤な雛段と云ふのは、屋根のない御殿飾りで有つて、間口五尺四寸位ので百三十圓、之に飾る人形は五寸位のを揃へて百十五圓位だと云ふ。近頃盛に雛を賣始めた三越の今年の尤物だと云ふのは次の七種ださうな。

- 木彫有職雛(臺付三寸位十四圓五十錢) 木彫光琳雛(臺付二寸五分十二圓) 木彫大内雛(臺付三寸位十八圓) 木彫天平雛(臺付二十四圓) 木彫親王雛(臺付三寸位十八圓) 木彫大内御前屋雛(神代杉繪付箱入雛大と一寸五分の木彫極彩入一揃十五圓)

于寶雛(雛は木彫で二寸五分、其體内から五人雛子及諸道具が出る、朱塗敷板付一組三圓五十錢)

近頃になつて雛の形も漸く昔風に立返る傾向が有り、色々の名前のものが有るが、昔から知られた雛の種類としては次の二十餘種が有る。

- 芋雛、立雛、絲雛、芥子雛、狩衣雛、鴨川雛、室町雛、吉野雛、三輪雛、琉球雛、薩摩絲雛、深草雛、内裏雛、紙雛、大雛、小米雛、繪雛又は懸雛、古今雛(今東京に行はるゝはこれ) 装束雛等。
- 尙雛壇の供へ物と云ふのは多少の差別はあるが、通常次のやうなもので有る。



其他御供のものには赤白青三色の菱餅を供ふ。

それからお雛様の附物に敷へられて居る煎豆を製造する家は、神田大和町浅草黒門町等に在りて其數二十餘軒、そして此等で賣り上る煎り種の量は六萬石位に上ると云ふことと有る。

箱を出る顔忘れめや雛二對

蕪村

東京年中行事

内裏雛人形天皇の御宇かとよ
 大雛や身の先から日の暮るゝ
 雛の宴五十の内侍酔はれけり
 段の雛清水坂を一目かな
 石女の雛かしづくぞ哀なる
 蠟燭のにはふ雛の雨夜かな
 古雛やがらくた店のひなたぼこ
 今一つ雛の目をせよよい娘
 へな土でつくねた雛も祭哉
 雛の影桃の影壁に重なりぬ
 思ひ出に雛と遊ばん夜もすがら
 雛すえて天下の女子や春を知る
 傾城の雛を祭る茶棚かな
 太刀佩いて跪坐す雛の大臣哉

芭 蕉 左 波 角 雪 雄 茶 一 白 嵐 其 召 釋 芭
 同 同 同 同 子 同 青 酒 東
 規 竹 々 城

見に行かん子持高尾が雛祭
 灯ともせは雛の屏風に雛かな
 貝料理二汁五肴や雛の宴
 雛の間やいぢわるの内侍おしやま君
 袞龍の袖にかくるゝ雛かな
 向きくに花笠雛の手振かな
 雛より小さき嫁を貰ひけり
 灯ともすや雛の冠のゆらぐ影
 紅筆の獻立帳や雛の宴
 子を生まばまさに雛の如く哉
 灯揺れば皆首長き雛かな
 出戻りの姉哀れなり雛の客

射 竹 霽 紅 鳴 碧 廬 麥 青 微 野 樂
 石 冷 月 葉 雪 桐 子 人 嵐 笑 梅 天

お雛壇

お雛段には人形ばかりではない。色んなものが色んな風に飾りたてられる。お節句の當日にあらはれた各新聞の雛祭りについでの記事を参照して、お雛段のつもりで色んなものをならべて見る。

(一) 雲上の雛祭

▲九重の雲深き邊りに於てせられても、此日御禮例によつて、狩野法眼元信の筆に成つた極彩色「大内山」の六曲金屏風を後ろに、千年御相傳の古雛をすてつて雛祭を行はせられ。

▲東宮御所にあつては、妃殿下御入奥の折、九條家より御持参のダイヤモンド入の王冠を戴いた内裏雛を祭らせられ、女官たちには御酒肴を賜ひ。

▲麻布御殿に在します泰宮内親王殿下には、京雛奈良人形などの古雛を始めとして、西洋人形などの珍らしきを飾つて盛な雛祭を行はせ給ひ、引ついで御學友など多数を呼び寄せられ、御歌所の主事阪正臣翁を招いて、宮中の御歌會に倣つて雛祭に因んだ御歌會を催させられるとす。

(二) 名家の雛壇

駿河臺秋元子爵家の雛壇の並べ方と云ふの上の段から順に記してみると、一の段が中央に東帯一對、左に直衣一對、右に小直衣一對、背後に金屏風を展べて紙雛が二對寄せかけてある。二の段の中央が官女と稚見、左右に隨神、其の左に女三宮、右に蘭陵王、三の段は中央に舞樂の五人囃と能樂の五人囃、其の前に刀掛一臺、左に櫻、右に橘、四の段は中央に衛士幾人、左に諸冊二尊、大黒、惠比

壽、辨財天女、右に高砂、鶴龜及び末廣、左右の前に犬張子一對、五の段は調度類で、奥に黒棚、書棚、鼠棚、挟み箱、長持、箆筒、前に料紙硯、机、茶辨當、籠、牛車、ほかい、貝桶、さげ重、組硯、十種香、文喜硯、碁盤、將碁盤、雙六盤、化粧道具と左から右へ順に並ぶ。六の段七の段には白酒、菱餅、麦汁粉菜、菓子等の供物が並べて有る。

(三) 女學校の雛祭

雛祭は近頃何處の女學校でも年一年と盛になつて行くと聞くが、試に二三の例を擧げて見ると、▲目白の女子大學寄宿舎では、各寮思ひくこに意匠を凝らして飾り合つたのを、一同打運れたつて寮から寮へと見廻はりながら、お客になつたり主人になつたり、なつかしく盛んな雛祭が催され。▲市ヶ谷見附内の日本女子商業學校では、嘉悦學監が二階十二畳の一室に大きな雛壇を設けて、澤山のお雛さんから器具調度に至るまで立派に揃ひも揃つたものを飾り立て、寄宿舎の生徒が十人二十人宛入れ代り立たり、お客になりつなれつして、飯ごとのやうな楽しい半日が暮らさるゝのださうな。▲澁谷の實踐女學校でも、平生寄宿舎の各室に飾られて居る人形や、此日を記念に特につくられた紙雛などが、色んな製作品と共に俱樂部に飾られて、あつさりとしたお雛祭が催されるんだとす。▲此外休日の都合がだらう、四日の土曜には神田青年會館でお雛俱樂部の盛んな雛祭が有り、五日の日曜には成女高等女學校にて幼年會の、京橋小學校にてはソホミ會の雛祭お伽會、女子美術學校にては雛祭が有つた。中にもお伽俱樂部の雛祭は同會持寄りのお雛さんを中央の大雛段に飾り立て、お話やら合唱やら、歌劇やら手品やら色んなことが有

つて、それは「賑なもので有つた。

(四)各時代の雑祭

源氏物語に

見し人のかたしかならば身にそへてこひしき瀬々のなごもいにせん

と云ふ歌が有る。かたしかならば、其昔三月の最初の巳の日に、陰陽師から紙の人形を買つて来て自分の身體を撫て廻した後、之を陰陽師に返せば、陰陽師は夫を以て祓をする事、今東京の氏神にて、大祓の時に行はれて居ると同様で有つた。此人形がかたしかならば、人の形を身代りにして其身の穢を祓ひすると云ふ意で有る。其昔宮中や公卿殿上人などの家庭の遊戯で有つた所謂「雑合せ」と、此上巳の祓の人形とが一緒に混同して来て、今の雑祭になつたもので、以前は雑遊は季節の定まつたものではなかつた。

下つて室町時代になると、雑の一對と云つて、女の子等は女夫人形や、其他にも色々な人形を作つて、酒食を供へて雑遊ひをしたことは、今と大した變りはないやうで有るが、それをもまた雑祭と云はずして雑遊びと云つた。今の雑祭は天正以後の風で有つて、更に下つて徳川時代の中葉以後になると、雑は最早女子には缺くべからざるものとなり、女の子が生れると最初の三月上旬巳の日に、は初雑と云つて必ず之を祝ひ、毎年「雑壇」を飾つて、結婚すると其雑壇を携へて嫁入り、更に婚家へ行つて、年々雑祭を行つたもので、此風は今も大方其儘に残つて居る。

白酒、菱餅、豆炒

雑祭の供物のうちに在つて、最も離るべからざるものは白酒と菱餅と豆炒とで有る。東京では三月

のお節句前になると、何れの酒屋にも『山川白酒』と書いて、其下繪には桃の花でなくて、不思議にも櫻の花をわしらつた大きな看板が店頭を立てられる。

白酒は又の名を初霜とか雪月花と云へど、要するに糯米を蒸したものを大桶に入れ、味淋を混ぜてやがて澄にて磨り潰した酒にて、關東では之を山川白酒と云つて居るが關西では之を東白酒と云つて居る。單に『山川白酒』と云へど、酒屋にきくと其中に十種もあるとやら。

序に神田美土代町角の豊島屋と云へば、白酒では江戸の草分で、幕府時代に白酒賣出しの間は、店頭一面に人止めの柵を作つて雑沓を防いだと云ふことと有るが、今猶お節句前には當時の面影が見られぬでもない。

それから草餅は餅屋で賣つて居るが、菱餅は豆炒と共に方々の菓子屋でも賣つて居る。尤も豆炒の方は乾物屋から種を取り寄せて自分のうちで拵へるものも少くはない。

- 臘夜を白酒賣の名残かな 支考
- 白酒を打出の濱に卸しけり 青々
- 白酒に酔て小さき吐息かな 煙村
- 白酒に酔ふて手に取る鏡哉 鐵山

東京年中行事

白酒に酔ひつぶれたる禿哉

英香

草餅や禿は紅をつけたがる

馬六

白とりも杵も女や草の餅

如洋

草餅に育つ佛や田舎寺

駒村

草餅の色も香も知る男かな

鳴雪

草餅や出流れの茶を暖めて

虚子

草餅に妻が知らざる苦吟哉

露月

鄙はもの、蓬の餅も四角なる

子規

豆炒の豆こぼる、や膝の上

拈華

豆炒や宵賑はしき雛の前

百合女

四十七義士忌日祭 (四日)

(一) 泉岳寺

今年の三月四日は陰暦の二月四日、元禄十六年赤穂四十七士の切腹後恰も二百九年の正忌日に相當する所から、例によつて高輪泉岳寺に於ては、午後一時より讀經參詣者の焼香追遠講演會などがあるつて、盛んな義士切腹の忌日祭が行はれた。

(二) 増島博士邸

泉岳寺の義士祭と并んで、法學博士増島六一郎氏は、麻布材木町五十五の自邸芳暉園に於て、今年より義士切腹記念會を開くこととし、同じ三月の四日に其第一回を開いた。元來博士の邸は舊長府藩主毛利氏の邸で有り、乃木大將が呱呱の聲を擧げた所にて、四十七士中竹林唯七外十一名が、一旦此處にお預の身となり、やがて自刃した地である所から、博士は昨年三月自費を投じて義士自刃記念の爲に勿去碑と云ふを建設したので有る。

此日増島氏が陳列して數多の來賓に觀覽せしめた記念の珍品數あるが中にも、最も人眼を引いて、骨董家をして垂涎萬丈ならしめたものは、關町乙彌氏出品の赤穂義士の切腹を報じた號外とも見るべ

きものを軸仕立にしたものにて、義士自刃の報道が赤穂に達すると同時に、赤穂本町の武藏屋と云ふ繪草紙屋が、逸早く木版にして配つたもので、義士の氏名年齢世知行高など悉く説明が加へて有る。

當日の主なる來賓の一人杉浦重剛氏は、例年の吉例だとあつて五升入の大きな貧乏徳利を携へて來て、「例の樹飲の徳利です」と云つて受付に差出したを見れば「高田馬場下町小倉屋」の銘が有る。福本日南氏見るからハタと手を打つて「やあ堀部安兵衛の記念だ」。

それから此日模擬店に出して有つた餛飩や蕎麥の御馳走は、義士が姿を棄して吉良の屋敷を探る間に、門前の餛飩屋九兵衛方に足を休めたに因んだもので有ると云ふ。

陸軍記念日 (十日)

日露戦争最後の決戦場として、兩國の運命此一舉に係るとせられて居つた奉天の會戰に於て、我軍が大勝を得て、遂に露國をして和を講ずるに至らしめた戦勝の記念日。

記念祭は東宮殿下行啓の下に例によりて九段偕行社に於て舉行。先づ餘興として靖國神社境内に於て大相撲の取組が有り、四時頃からは偕行社内にて祝宴が開かれる。食卓を飾る御馳走には當時を

記念の牛肉の罐詰と、携帶口糧の名ある重焼麩麩の外には、牛肉の甘煮に里芋と蒲鉾と玉子焼をわしらつた折詰に冷酒と云ふ質素なもの。

尙此日には、昨年あたりから各學校に於て、陸軍將校の記念講演と云ふものが行はるゝこととなつて、所謂戦勝記念の儀式を擧ぐることとなつた。

早稻田大學擬國會

一高の記念祭、駒場の農大運動會など、共に、學界の一名物とせられて居る早大の擬國會は、今年も三月十八十九の兩日同大學講堂に於て開催。初日は大學生のみの役割にて行ひ、翌日は例によりて廿三期早稻田議會を招集し、政界の有ゆる名士を網羅し、日比谷の向を張つて正午開議。先づ外交に關する質問あつて後に各議案の討議に移つたが、試みに當日出席の辯士と黨派別とを擧げて見ると、

- ▲内閣 首相犬養毅 △内相箕浦謙人 △藏相加藤政之助 △外相服部毅雄 △文相藏原惟郭 △海相日向輝武 △陸相田邊元次郎 △法相副島義一 △逓相平沼淑郎 △農相服部文四郎 △植民相永井柳太郎 △政府委員 宮澤、吉宮、村田、中野、西井、上村、五島、渡邊、坂入、宮岡
- ▲書記官長伊藤正 ▲議長高田早苗 副議長藤澤昌貞 ▲急進黨總理島田三郎 副總理井上角五郎、福本誠、田中權積、森田勇次郎、早速整爾、高木正年、大内暢三、水野正巳、鈴木寅彦、佐々木安五郎、石橋爲之助 ▲保守黨總理長谷場純孝 副總理大岡育造、元田肇、戸水寛人、吉植庄一郎、小久保喜七、鶴澤建明、松田源治、卜部喜太郎、荒川五郎、關和知、茅原華山

此日の日程の重なるものは公債償還延期案と海軍擴張案の二つで有つた。

彼岸と六阿彌陀詣

春の彼岸は大抵三月十八九日頃に入つて廿四五日頃に明ける。真中の一日は中日或は春分と云つて、晝夜平分の日で有る。此一日と前後の三日宛、丁度一週間の間方々のお寺では佛事が有る。それを彼岸會と呼び、其間東京では特に行基菩薩の作にかゝる一木六體の阿彌陀如來を安置した寺院に參詣する。これが所謂六阿彌陀詣で有る。

彼岸とは佛典に所謂到彼岸の略語にて、生死と迷境を彼岸、解脱の悟境を彼岸、中流を煩惱とし、菩薩無相の智慧を以て禪定の舟に乗り、此岸から彼岸に至るを般若波羅密多と云ふ。ところで春分と秋分に何故に彼岸の名をつけたかは、物好きな人の詮索に任ずとしても、寒い暑いに分れ目と云ふ此季を利用して淨業を修めしめんとしたのは、印度の風習を襲ふたものでないとするれば、最初は確かに何かの意味が有つたかも知れぬ。

東京の所謂六阿彌陀には北方、西方、山手の三つが有る。北方のは六つの佛體悉く行基菩薩の作にかゝつたもので、近い所から順に擧げると、

| | | |
|---------|-----------|----|
| 上野廣小路 | 常樂院(天台宗) | 五番 |
| 北豊島郡田端 | 興樂寺(眞言宗) | 四番 |
| 同郡西ヶ原 | 無量寺(眞言宗) | 三番 |
| 同郡豊島村 | 西福寺(禪宗) | 一番 |
| 南足立郡沼田村 | 延命院(眞言宗) | 二番 |
| 本所龜戸 | 常光院(禪宗) | 六番 |
| 芝西久保 | 大養寺(運慶作) | 一番 |
| 麻布飯倉 | 善長寺(空海作) | 二番 |
| 芝三田四丁目 | 春林寺(春月作) | 三番 |
| 高輪庚申堂 | 正覺寺(安阿彌作) | 四番 |
| 芝白金 | 正源寺(作者不詳) | 五番 |
| 目黒 | 祐天寺(惠心作) | 六番 |

にて、沼田より三丁には北足立郡宮城村性翁寺のお餘り阿彌陀あり。此沿道には西新井の大師を訪ふの便も有る。又西方六阿彌陀と云はるゝは

それから山の手六阿彌陀と云ふは

麴町十丁目

心法寺(惠心作) 一番

四谷寺町

西念寺(聖徳太子作) 二番

青山南町

龍泉寺(行基作) 六番

同

梅窓院(聖徳太子作) 五番

青山北町

高德寺(聖徳太子作) 三番

同

善光寺(中將姫作) 四番

この日観音に参詣するものも多く、浅草観音は殊の外にお賽銭の飛び込む日である。彼岸園子又は彼岸茶の子と云つて、彼岸の間に園子牡丹餅又は五もく鮎などをつくつて佛に供へたり、知人の間に贈り合ふことは、今も盛に行はれて居る。

何を見て彼岸の入日人だから

鬼貫

彼岸まへ寒さも一夜二夜哉

路通

くりくりと彼岸園子の天窓哉

支考

蝶々も袖脱ぎかけて彼岸哉

支考

戸障子を明け放したる彼岸哉
中日と知つてのさばる虱哉
嫁の里のぞく彼岸のついで哉
手に寒き彼岸の小錢こぼしけり
ほろくと椿こぼる、彼岸哉
到彼岸ぬくとい乞食日和かな
爺婆の養めき出づる彼岸哉
嫁そしる婆つれだちて彼岸哉
極樂の話しねむたき彼岸哉
からくりの地獄を覗く彼岸哉
國寶の羅漢見に行く彼岸哉

木札 一茶 貞祗 子規 同 紅葉 鳴雪 紫影 翠峯 烏不關 松宇

春季皇靈祭 (春分の日)

皇靈祭と云ふのは、春秋二季春は春分、秋は秋分の日を以て、宮中皇靈殿に於て、歴朝の皇靈の

東京年中行事

外、皇后皇妃及び皇親の靈を御親祭あらせられ、ついで神殿に於て入神并に天神地祇を祭らせ給ひ、皇靈殿祭と神殿祭の二つの祭典を行はせられる國祭で有る。

お祭の次第は皇靈殿朝の御祭典、皇靈殿并に神殿御親祭及び皇靈殿夕の御祭典の三に分れ、始めのは午前八時式部職員によりて行はれ、ついで午前十時に至りて陛下出御、御親祭を行はせ給ふので有つて、先づ皇靈殿に御玉串を奉り給ひ、御拜ありて御告文を奏し給ひ、やがて神殿にて同様御玉串御拜御告文の儀ありて入御あらせられ、後皇后陛下皇太子同妃兩殿下の御拜あり、終りて親王、王以下諸臣の拜禮ありて、東遊の雅樂を行はせられ、一旦閉扉の後、正午再び開扉、更に午後二時迄に伯子男爵以下の參拜あり、更に四時より式部職員が夕の御祭典を行ふので有る。

春分の日に於て、かくの如く皇靈殿并に神殿に於て御祭典を行はせらるゝに至つたのは、明治四年の春のこと、春秋二季に行はせられることになつたのは、明治十一年以後のことと有る。思ふに春分秋分の度毎に、一般に亡靈を供養する彼岸會の風に習はせられたもので有らう。

御影供 (二十一日)

三月二十一日は弘法大師入定の正忌日で有る。何處の眞言宗寺院にても、此日大師の像を安置して

- 御影供や金枝玉葉の袈裟衣 烏不關
- 御影供やさらぬ小寺の花も見る 青々
- 御影供やいろはを書いて奉る 香居
- 御影供の光明あびる衆生哉 丘鳥

耶蘇復活祭

三月二十一、二日、即晝夜平分の日より、四月二十五日の間に於ける最初の満月ある週間を聖週、其間の金曜日を聖金曜日又はグード、フライデーと云ふ。此金曜日は即ち耶蘇の磔刑に處せられた日と有つて、次の日曜日は基督の復活上天の日と有る。イースター即ち復活祭は此日に行はるゝので有つて、西洋で此日の太陽を踊ると云つてゐるのは、我國で彼岸の中日の太陽は旋轉しつゝ、没すると云ふのと甚だ似た所が有る。復活祭には互に贈物をするが例で有つて、彩色をした鶏卵は甦生鶏卵と云つて殊に尊ばれて居る。

今年四月二十三日の日曜午前零時から、神田駿河臺のニコライ會堂に於て莊嚴なるイースター祭

が行はれた。前晩の七時八時頃から多数の信徒は轟々と詰めかけて、市内各區別にした控室に陣取つて、零時を合圖に行はる、復活祭を何れも待ち焦れて居る。本館二階の舊聖堂には下谷淺草本郷本所の四聯合教會の信者が捧げた紅玉子と、聖菓を盛つた花籠及び、神田京橋深川日本橋其他各區の信者が捧げた聖飾菓が山の如く積まれて、ゆらゆらと揺めく聖燭にそれが照り輝いて居る。

六百壘の廣さある聖堂の正面、所謂天門の前には二重の香壇が有つて、一つの香爐からは盛んに靈香が四方に燻じて、金糸銀糸を以て刺繍つた聖像は、七つの紅玉と白玉とを榮光の象として、靜かに兩の手を胸に組んで其處に立つて居る。十一時五十五分、大主教及主教の二人は雪白の法衣を着け、金銀珠玉を以て飾つた天冠を戴き、女子神學校生徒數十名を先導に、磔刑にされた聖像を現はした黄金の十字架を翳して、司祭三人補祭二人を従へて聖門を出る。そして『死をもて死を滅し、墓にあるものに生命を賜へり』の讚美歌につれて、列はゆらゆらと聖堂を一周する。やがて大主教等は其間に閉ぢられた聖門に立ち歸り、血に燃ゆる祈禱を繰り返した後、幾度か讚美歌を合唱する。そして十二時の鐘を合圖に大主教はコツコツと聖門を叩く。其昔聖主は金曜日午前九時に磔刑に處せられ、土曜日の午後三時アルマヘア村イオシンの新しい墓の下に埋められたので有るが、日曜日の夜半彼は俄かに復活して各所に其靈を顯はし、『主は蘇へり』との警報は到る處羊の如き民をして驚喜せしめ

たので有つた。大主教が聖門の扉を叩くのは即耶蘇が蘇へつた合圖で、之を合圖に再び聖門は開かれ、之と同時に聖火一時に點ぜられて、廣き殿堂は忽ち黄金世界と化し、讚美の聲、感謝の祈の裡に復活を祝しつゝ、式の終られたのは午前三時半で有つた。

品川千體荒神祭 (二十八日)

十一月と等しく廿七日より別當海雲寺にて護摩を修し、參詣人なかくに少くない。本尊の千體荒神と云ふのは天竺の神で有つて、如來荒神、盛亂荒神、忿怒荒神の三身を現はし、又三寶を護ると云ふので三寶荒神とも云ひ、或は眼識四方千里に及び、千手能く惡人を捕へ罰するが爲に千體荒神の名が有るので有る。

其角忌 (三十日)

寶永四年二月三十日が忌日の其角忌は、陽曆に直して今年も三月三十日芝二本榎の上行寺にて舉行。寶晋寮機一宗匠等舊派の俳人集るもの三十餘名。本堂に其角の厨子を開いて讀經焼香の後、運座の披露あつて寺の後の其角の墓に詣で、引上げた後は例によりて故人をまねの何處かの酒宴に終つたとやら。

其角忌の鐘に牙あり山かつら
其角忌や隣の垣の帘
其角忌や昔賣れたる鐘が鳴る
俗腸に晋子を祭る大酒かな
其角忌の座に三尺の古刀かな

松 宇
青 々
竹 冷
不 喚 樓
鳴 雪

粟 餅

足袋を穿いた足の先がウヅ／＼し出して、玄關から飛上るなり直に素足になつて椽側の板の上を理もなく走つて見たい様な心地のする二月の末頃から、天氣の好い日を選んで屋根車を引張つて、一寸耳を傾けた丈では何だか薩張理の分らぬ様な、引付られる様な、美しい聲で、そろり／＼と市中を振られて歩くものが方々に見え出す。老人連に尋ねると「フン暖くなる記だよ」と謂つた切りハハと許り笑つて居る。根掘り葉ほりに聞き正して見るとそれが粟餅賣で有つて、あの聲が聞え出すと本當に暖くなつたのださうな。車の側には鉢を提げたお神さんや、重箱を掌に載せた下女や小供などが次第に集つて来る。餅と云ふのは小さい梅の實か金柑位の大きさで、大抵が黄な粉と小豆餡と磨り胡

麻とを塗り附けた三色で有る。赤いのはあまい方だが、他の二色は、鹹味を帯びてるのが通常で有つて、茶受の料には一寸乙なもので有る。

桃

櫻と異つて東京の市中には桃の見るべきものはない。一番近いのが市川か大師河原か。市川は心地のいゝ松原を背景に下駄の埋るほどの美しい砂地なのと、まだ少しも俗氣がないのが風流子の杖を誘ひよせる。少し遠ざかつては昔から名の知れた越ヶ谷の桃林と、此頃聞え出した古河のそれとを数へねばなるまい。ずつと隔ると江尻から一里十三丁の三保の桃林、沼津から一里を離れた名高い桃郷、その外には平塚あたりの麥畑や松の間に／＼も彼岸前から櫻の咲くまでを紅の霞がたなびきたなびく。

桃の木や雀吐き出す鬼瓦
鬼 貫
嫩さげて叱りに出るや桃の花
涼 苑
喰て寝て牛にならばや桃の花
燕 村
昔爺と婆と住みけり桃の花
子 規
髪染めて桃に酒賣る女哉
春 曉 子

税 輕き十戸の村や桃の花
旅籠 錢 篋 百と云ふ桃の宿
窓の輪の下の十戸や桃の花

鳴 雪
人 雪
關 圃

卒業式

大學高等學校諸種の専門學校などのやうに、七月に入りて卒業式の行はれるのも少くはないが、三月の廿日過から四月の始へかけての小學中學女學校などの卒業式の行はれるものは、とても毎日五つや六つではない。府知事や市長や視學は勿論、教育の本来本元たる文部大臣などは、一々之に臨んで祝詞を讀んで居た日には兎ても飯を食ふ暇もない位。従つて特別に何かの關係のない所はい、頃に誤魔化して代理などをやつて置いて、主だつた所とか特殊の關係のある處丈へ出懸けて行く。そして文部大臣府知事市長の臨場と云ふ名の下に嚴めしい卒業式が行はれる。

ところが此廢色々の卒業式の中に在つても、最も心地のい、愛らしいのは幼稚園のそれで有らう。幼稚園の卒業式とは云はないで保育終了式と云ふ。式の次第に於ては普通の卒業式と何の變りもないが、何を云つても八つを頭のいたいけ盛りの、これから小學校へはいらうとする、また罪も何もな

い賢てさうな、世の苦も何も知らぬ幼な兒の卒業式と云ふので有るから、其おどけなら一舉一動を見るにつけても、何とも云はれぬ感に打たれて、シクシクとすゝり泣をする母親なども少くはない。げに無邪氣な——人の世のそれにも似ぬ愛らしい聲を張り上げて、別れゆく兒童の歌ふ歌の如何にやさしいことよ。

東も西も知らざるものを、

手を執り教へしその御恩、

山より高く海より深し。

教を受けし先生方よ、

我等は之より別れませう。

おさらば先生、皆さんさらば。

彼等の多くは歌の意味の何たるをも解せずして、唯教へらるゝが儘に樂しく歌ふので有らう。すゝり泣する人を見た彼等は果して何の感が有るだらうか。尙此日に撮影された一同の寫眞は、思ふに十年二十年の後に於ては、彼等が忍び難い思ひ出の種となることと有らう。

鼻垂も卒業の春に漏れぬなり

碧梧桐

鶯や三男様は御卒業
 卒業や花の顔年十五
 桃李卒業式の唱歌かな
 卒業の蝶落第の田螺かな

八重櫻
 醉佛
 董哉
 寒水

女學校展覽會

卒業式が済んだ後の一日二日を、大抵の女學校では生徒の成績品を陳列して所謂展覽會と云ふものを開く。造花、刺繡、袋物、綿細工、ミシン縫物、人形、襟飾、帶上、果實、繪畫、習字等膨ゆいまでに飾り立てられて、宛がら百花一時に咲き亂れた庭園にでも遊んだやう。その間をその花よりも美しかれと塗り立て着飾つたる大きな蝶々が、長い袖振り揺がしつゝ、西に飛び交ひ東に舞ひ歩いて、花召しませぬか、袋召しませやと、巧に人を誘ふことの説くことの、逆も姫様や嬢ちやんの業とは見られぬ位。かうして麻ち得られた利得の大部分は學校の建築費とか維持費とかの中へ繰込まると云ふのが普通で、近頃は入場券とか觀覽券とか云ふものが生徒一人に對して三十枚五百枚と委託せられ、知己朋友の間に五錢十錢宛にそれが賣捌かるゝので有る。處が賣捌かるる入場券の多くには

大抵繪葉書が一枚宛喰付いて居て、切符の裏には金五錢とか十錢とか有つて、その側に「追つて此繪葉書は乍失禮紀念の爲に差上ます、御笑納下さいませやうに」など云ふ文句が附いて居る。

展覽會の入場切符を賣ると云ふことは近頃のこと、展覽會の始めて開かれ出した當時に於ては、盛に角帽の大學生などが歓迎され、學生の方でも亦盛んに花よりも蝶々見たさに群々と詰めかけたもので有る所から、此に乗じて切符の發賣と云ふことが行はるゝに至り、引いては生徒をして切符の押賣に困つて、女心の虛榮心やら恥かしさやらの爲に返すには返されず、果ては自腹を切つて密かに泣かざるべからざるに至らしめたもので有らう。それかと思ふと、切符の裏には「父兄保證人の方の外男子の入場御断り申上候」と断はつたのが有る。一方では青年の學生を歓迎すると云ふ女學校が有る世の中に、一方には若い男子さへ近けぬ様にして置けば、天下は太平無事であるとのみ思つて居る女子教育家が有る。斯うして今の世は知らぬ間にずんぐと變化して行く。

櫻

花の都の名に相應しや。三月の末から四月の末にかけて、向島や上野や飛鳥山は云ふに及ばず、家の圍りと云はず水の邊りと云はず、山の手も下町も満都の櫻悉く咲き出で、都八百八町は本當に

花の巷と化し、空には薄紫の香ばしい霧が閉ち籠めて、鐘は上野か浅草か、夜の籠るは殊の外の眺
で有る。

されば、花が咲くと同時に満都の人の心はウカ〜と浮き立ちて、それ花が散る花が散ると、若い
も若さも家を忘れ世を忘れ業を忘れて浮かれ出す。花咲く頃の都は真に世にも類なき目出度き歡樂の
境なれや。

南獨逸から佛國伊太利あたりにかけて、二月の下旬になると三日の間カルニヅルレと云ふ祭が有る。
耶蘇舊教では基督が殺された命日の少し前から、基督が復活して昇天したと云ふ日までの四十日間を、
肉食を断つて嚴肅な生活をする習慣が有る。カルニヅルレと云ふのは即ち肉食を絶つ前日に行はれる
ので、全市全國の民が狂氣のやうになつて馬鹿騒ぎをやる。なる程そのやり方だとか其主意を聞くと
一寸考へもので有るが、自分は此に似た——敢て似たと云ふ、唯全市民が同時に樂み慰むと云ふ意味
に於て敢て似たと云ふので有る——東京全市民のお祭が、此花の都の花の時を利用して行はれたら
面白〜ことでも有らうと思ふ。神武天皇祭の當日でもい、満都の民が同じ時に祝ひ樂むと云ふこと
ない今の東京に於て、花の祝とか櫻花祭と云ふやうなものが行はれたならば、世界に類のない花を有
つた日本の國には誠に相應しいことでも有らうと思ふ。生活の困難と生存競争の劇烈と云ふことから、



人の心が次第に趣味と遠ざかり、世は滔々として餘りに神経過敏な餘裕のないものとなりつゝ有るが上に、花見の催しや装束にさへ色んな殿しい制裁の加へらるゝ今日に於て、斯の様なことはなかくに望み難いことゝするも、今や自分と同じ考を抱いたものが大分多くなつて來たと云ふことは事實で有る。

今の花見

それはさて置き、今の花見は大分昔と異つて來て、飛鳥山を除くの外は花見らしい花見は見られぬ。一體が眞面目腐つて七六ヶ敷い顔をして、花見と云ふのはほんの名ばかりで、誰一人花を見やうとはせず、男はすまし切つて美人の顔を盗み見、女はキヨロくとして人の着物を品定めするばかり。唯々黙つて疲れたやうな足引ずりながら、行列かなんかのやうにスツく歩いて行く。少し碎けて歌ひながら踊つてゐる歩かうものなら、それこそ直ぐにコラくと來る。花が咲くと花見くと狂氣のやうになる東京の花見も斯うして段々と没趣味になつて行く。

と云つても上野や向島あたりでも、櫻の木蔭や廣場に毛氈敷き擴げて、樂しげに手を打たゝいて酒酌み交はすやら、揃の手拭に揃の日傘で、尻端折つた一隊が千鳥足ふらふらと時々狂氣じみた大聲を

張り上げて唄ひながら練つて歩くのやら、赤櫻に白の前掛のお揃で、店の名と連中の印を染出したのを春風に吹かせた女中の一隊もあれば、さては踊の師匠なんどの櫻狩と云ふつもりかずらりと狩衣を纏ふた美しい姿、揃ひの日傘に揃ひの日和下駄と云ふ氣の利いた打扮の番頭小僧連、半葉鐘頭の紙盤を冠つた滑稽な連中、キヤラコの黒紋附模様の振袖で行列を作つた女の師匠連と云ふやうな、八ヶ間敷い長刀の干渉をくつた花見姿の珍趣向も偶にはないではない。此外破傘を翳して法界坊を氣取つたのや、羽織を裏返しに着て支那人と洒落れたのや、十二三の少女連に喜撰草刈女の扮装をさして練り歩くのや、方々の廣場で旗取や綱引などをやるもあれば、瓢箪を肩に眼蓋の洋服男、揃の手拭を襟に巻いて三味線擔いだ美人連などもあり、中には廣告を兼ねての大旗小旗を押立て、隅田川を漕ぎ上るもの、大傳馬小傳馬に満飾させて馬鹿囃や手踊で人目を惹くもあれば、屋根船で粹な音べを洩らすものもあつて、それは流石に都なればこそと思はせるやうなものもある。

けれども本當の花見らしい花見連の集まるのは矢張飛鳥山で、俗だと云は云へ馬鹿らしいと云は云へ、雨さへ降らねば花の木蔭には、色んな連中がずらりと席を井べて歌ふやら踊るやら。そしてそれを見やうとの連中が朝から晩まで詰めかけ、山は之れ一面の花と人。幾ら眞面目腐つて考へても此處ばかりは花見のやうな心地がする。

昔の花見

櫻を見て樂むことの始めて歴史に見えて居るのは履仲天皇の御代で有る。即位の三年十一月天皇皇后と共に船を市磯の池に浮べて遊宴の折、櫻の花が御蓋に散り込んで来たのを縁りに其花の在り所を探らしめたまふたと云ふことあり。ついでに允恭天皇が八年二月藤原の宮に行幸、井の傍らの櫻花を見て、衣通姫に和歌を賜ふたと云ふこともある。

それから下つて奈良朝平安朝時代になると「百敷の大宮人は暇あれや櫻をさして今日も歸ひつて、花を見て歌を作つて歌んだり、遊び戯れたりすると云ふことは一般の風となり、宮中には花の宴と云つて、群臣を召し集めて、咲匂ふ花の木蔭にて盃を賜ひ、歌を詠み詩を作りなどして御遊興のあつたことは、此時代の詩歌が多く花を歌つたもので有るに於ても明かである。當時左近の櫻を始めとして、神泉苑、落の院、染殿花亭、鳥羽離宮、櫻町、龜山離宮と云へば昔櫻の名所であつた。

其他歴史に現はれた花見として、最も多くの人々に知らるゝものは豊太閤の花見で有らう。丁度朝鮮征伐の最中、このころ有る。秀吉は山城醍醐の三寶院に於て、寺の門前から山の麓までだらりと饗宴を打たせ、百双風と云つて、兩側に花を置いた美しい屏風を引まはし、一代の贅を盡した花見の大宴を開いた。そして太閤始行集ふ將士の面々、何れも農夫商人美人朝鮮人と云ふ風に、色々の意匠を凝らして假裝をなし、花の一日を遊び狂つたと云ふから、當時の太閤の意氣と決心と威光とに比べて、その如何に盛んなもので有つたかは臆ろげながら想像が出来ぬでもない。蓋し歴史に見えた花見の中の花見と云へば、矢張り醍醐の花見に止めをさすが普通で有らう。

江戸時代に至つては櫻は愈々平民的のものとなり、南湖が白河樂業によりて造られる。上野向島小金井御殿山等に櫻が植附けられる。江戸は漸く花のお江戸になつて来た。そして次第に花見と云ふことが一般に盛なるにつれても、元祿時代の花見は、それは一掃蕩なものであつた。

百も二百もあるが中には、小袖帯と云つて機織の代りに、花の木陰に鈴々が新調の目の覚めるやうな派手やうな羽織小袖を、これ見よがしにだらりと打つて、其中に毛氈花造りなどを敷いて、酒酌み交はし舞臺うち開いて、例の細帯に丸袖の袴を穿て、瑠璃の曲などな話ひながら、楽しい一日を舞ひ踊つて暮らしたもので有る。試みに江戸時代に於ける東都の壯觀として名高かつた櫻三十三品の所在を挙げて見やう。

- | | | |
|------------|------------|-----------|
| 一 鳴子 淨圓寺 | 二 麻布 長谷寺 | 三 小石川 傳通院 |
| 四 大塚 護持院 | 五 駒込 海蔵寺 | 六 小石川 蓮華寺 |
| 七 御厩谷 佐野屋敷 | 八 谷中 延命寺 | 九 廣尾 天眼寺 |
| 十 早稲田 五智堂 | 十一 大久保 保養寺 | 十二 谷中 養福寺 |
| 十三 小石川 牛天神 | 十四 目黒 祐天寺 | 十五 牛込 穴八幡 |
| 十六 谷中 維王寺 | 十七 上野 嚴照堂 | 十八 上野 願王院 |
| 十九 上野 尊覺院 | 二十 青山 梅嶽院 | 廿一 上野 護國院 |
| 廿二 千駄谷 仙壽院 | 廿三 青山 最勝寺 | 廿四 牛込 光照寺 |
| 廿五 上野 寒松院 | 廿六 上野 清水堂 | 廿七 駒込 吉祥寺 |
| 廿八 瀧の川 辨財天 | 廿九 目黒 稚宮八幡 | 三十 田畑 興樂寺 |
| 卅一 根津 權現堂 | 卅二 湯島 天澤寺 | 卅三 廣尾 光林寺 |

花の名所

東京で花の名所と云へば、誰しも直に上野向島と云ふが、三好博士は武州の小金井と荒川堤と、これに大和の吉野山を加へて我邦の櫻の三大名所と云つて、吉野の櫻は遠く南朝の昔を偲ばしめ、小金井の櫻は、現に東京市民の飲用する玉川上水と共に徳川幕府の絶好の紀念で、江北の櫻即ち荒川の櫻は、明治照代の一大自然紀念物として、何れも永く後世に遺すべきもので有らうと云つて居る。

▲小金井の櫻 此櫻は三代將軍の時から植え始めて、八代將軍の時に植え了つたもので、初め郡司川崎定孝なるものが幕府の命を奉じて大和の吉野及常陸の櫻川から移植し、其後時の代官大熊某が、田無村の里正半兵衛に謀り、附近の村民に勧誘して更に數千株を増植せしめ、享和の頃に至りて始めて小金井の名を得たのだと云ふ。玉川上水に沿つて蜿蜒一里半に亘り、古來關東隨一の花の名所で有つて、佐藤一齋の小金井紀行を見ても、江戸時代から盛んに持て囃されたもので有ることがわかる。植えられた櫻は關東關西の粹を選んだもので、殊に吉野の山櫻が最も眼立つて美しいが中にも、三好博士が日の出櫻と命名したものなどは頗る優美なもので、幹も大きく枝も繁つて、雪のやうな純白の花に、薄紅の若葉が交つた所は得も謂はれぬ風情。年々花の盛になると甲武線飯田町驛からは臨時列車が増發されて、都の花に憧らぬ人々がえんや〜と出懸けて行く。下車するのは國分寺か境か、何を取るもいゝが、國分寺に下りたものは二十餘丁の行程を喜平橋から流れに沿つて下り、境驛より

するものは上へくと花の堤を遡る。花の中心は矢張小金井橋の附近で、附近一面の芝生には、愛らしい董の花が我も劣らじと、若草隠れに春の色をほの見せて居るのも心地がい。

▲江北の櫻 俗に荒川の櫻と云ふのが即ちこれで、千住の北一里半ばかり、南は宮城から北は鹿濱まで、荒川堤に沿ふた花の墜道。明治十九年三月時の江北村長清水謙吾氏の發意で、村の有志家が隣金して、巢鴨の植木屋高木孫右衛門から櫻の園藝品種七十八種、三千二百二十五本を買入れ、江北村に屬する荒川堤に植えたが源で、其後は枯るれば補ひくとして、新しい樹を植附けたので有るから、實際の種類はずつと多くなつて居るだらうと云ふこと。そして此等の種類は學問上から見ると向島に多い染井吉野と云ふものとは全く同じものにはあらず、古來の山櫻の良い變り種を殆んど網羅したもので、花の色、形、附方、若葉の彩りなどが異なるばかりでなく、木振枝振に至つても殆んど變つて居て、中には非常に善い香のあるものも交つて居り、一里半の長堤中、最も良種に富むのは小臺の渡しから高橋茶屋まで一里二丁の間で、中にも沼田の鎮守様から堀の内へかけては殊の外に良種が有る。試みに荒川の櫻の種類を聞いて見ると、大部分を占むるものは關山、一葉、淺黄櫻、御衣黄、普賢象、楊貴妃、芳野、江戸櫻、等櫻の九種で、千里香、細川香、上旬、御車遣、御座之間香、瀧香、駿河臺香の七種は香氣に富み、最も少いのは狸ヶ紅輪、朱雀、人丸、絲繰り、松月の五種で有る。其

他長州耕櫻、有明、金輪寺白妙、大膳、天川、金剛山、鷲尾、泰山府君、嵐山、水上、麒麟、彼岸枝垂、白普賢、奈良、昔清水、牡丹、熊谷、福祿壽、増山、鞍馬山、渦櫻、大南殿、蓬來山、秋色、祇女、寒櫻、旗櫻、大芳野、八重曙、都櫻、雨宿、法輪寺、桐谷、薩摩寒櫻、菊枝垂、大芝山、名月、手毬、日暮辨殿、水無月、王照君、小汐山、九重、彼岸、不斷櫻、十月櫻、單淺黄、白妙、虎尾、大内、黄里香、寒耕櫻、白寒櫻、鹽籠、大提灯、東錦、敦盛、丁子櫻、白華山、東枝垂、吉野枝垂など其數寧ろ多い方に屬する。けれども大體から云ふと八重も可成澤山に在り、中には有明、大提灯、楊貴妃、關山、一葉、江戸、松月、牡丹櫻、手鞠、天の川、御衣黄、鬱金櫻などは非常に立派な方で、花の盛りには、千住吾妻汽船會社は千住の大橋から花見の汽船を出し、大橋前後には亦花見の乗合早船が四五十艘も出つ入りつする外に、東武鐵道は淺草驛から西新井迄毎日五回宛の臨時列車を増發する。かうして荒川の櫻も今は大分世に知られた。試みに數へて見たり今年茶屋の數が全體で百八十七軒、露店の數は百數十軒あつた。

▲向島の櫻 寛永年中、家綱將軍が墨堤の風致を添へんが爲に、常陸の櫻川から移植したが始めて、ついで享保二年と十一年とに、吉宗將軍が更に増植して制札を立て、花守を置いてより遂に花の名所となつたので有ると云ふ。大抵の櫻は他處の櫻と異つて、學者の所謂染井吉野と云ふ東京特有

のそれで有る。四月に入ると、枕橋から千住まで一里ばかりの間、紅の雲のトンネル行けども盡きぬ中を、一寸の隙間もなく人と人との流れが左と右とを揉まれに揉まれ押されに押されて進んで行く。そして其間を時々ストンと音がしては、水の上ではボートレースが行はれる。堤の上から花見の人が少し早さうなボートを見ては白よ赤よと囃し立てる。花の向島は斯うしてボートレースの爲に一入の賑を加へる。試みに船の中から堤の上を眺めやると、紅の霞の上には砂煙が濛々と天に沖して居る。花の下川と反對の側には茶屋がズラリと並んで、いらつしやい〜と月並の聲を絞つて客を呼んで居る。外へ出ると何か食つて歸らねばお腹への義理が濟まぬと云ふ風に考へて居る東京の人は、此等の茶屋へ駆け込んで、埃にまみれた御馳走を甘さうにバクつく。それかと思ふと、花を見ると云ふでも何でもなく、唯此處美しい騒々しい世界に入つて、唯長閑な一日を遊び暮らして歸ればいゝと云ふ連中の中には、徒らに人波に揉まれて居る最中に何時とはなしに袖附を切り去られると云ふ不幸な方も少くはない。其塵點から云ふと、此處は路が狭い丈にどうしても上野の人出に比して遙かに雑踏する方で、従つてまた非常に下町趣味に富んだものと云つてよからう。

▲上野公園 此處の櫻は江戸の花のうちで最も古いもの、一つで、昔の花見は矢張此處が一番盛んで有つたことは前にも云つた通り。花には染井吉野もあれば八重もあるが、最も多いのは彼岸櫻と枝垂櫻で、従つて早きは彼岸の入りからポツ〜と咲き初めて、八重に至つて他處の櫻と殆んど同じ頃まで見られるが、それでも大體から云ふと上野の櫻は早いときまつて居る。そして元來が大和の吉野山に倣つて植えたもので有るから、山王臺の山口の彼岸櫻から咲き始めて、段々に吉野、八重と奥の方へ咲いて行く。此處の花の中で最も美しいのは、竹の臺から櫻が岡の東花亭の角へかけた一帯のそれで、清水堂の側の二代目の秋色櫻と、慈眼大師が吉野の苗を植えたのだと傳へられて居る屏風坂の上り口の左に在る最古の吉野櫻と、慈眼堂の前の絲櫻と、秋になると必ず返り咲を見せる摺鉢山の山腹に在る上野には珍らしい老木の山櫻と、其傍に在る鬱金櫻とは、何れ劣らぬ上野の名木で有る。此處の花見る人は一體に上品な方で、稍本當に花見らしい花見の人の集るのは動物園の前と美術學校の前と丈で有る。けれどもそれと云つても、到底飛鳥山や向島などに比べられたものではない。

▲飛鳥山の櫻 此所の櫻は享保の頃、將軍吉宗が御小納戸頭松平伊賀守に命じて、吹上の御苑にわつた松櫻三千本を移植せしめたのが植初めとやらで、元此山を王子山と云つたものだと云ふことは、此處の中央に立つて居る碑面にも刻んで有る。前にも云つた通り、此所は俗つばいながらも本當の花見の行はるゝ所で、地勢から云つても郡部で有ると云ふ所から見ても、自然に然るべきが當然の花見場であるので有る。

▲江戸川と其他の花

江戸川の櫻は又一種趣のある櫻で、真中を浅く流る、水を鏡に、兩岸からちらり合つて恥かしげに綻びた所は、他の處で見られぬ眺である。どちらかと云ふと八重の方が呼び物で、朧月夜の趣は又一入で有る。小金井の稱ある此處の櫻の植初めは明治十五年頃で有るさうな。此外花の時候になると東京の天地行く處として櫻を以て満飾されぬ所はないが中に、小石川植物園の櫻はまた變つた趣が有り、半藏門外英國大使館前から九段へかけての電車通りの櫻も捨てがたく、日比谷公園の若木の櫻も愛らしく、芝公園内の千代を緑りの松の間に紅を彩つた櫻は深山の面影が有り、大久保新宿あたりから昌平橋に至る甲武線通りの櫻や、赤坂見附の櫻は電車から居ながらに賞し得べくして、花見る暇なき人には此上もなき景色たるべく、清水谷公園及山王臺あたりのそれも矢張杖を曳く人は少からず、淺草公園の櫻は少けれども、花より團子で色んな見世物目あての客がぞろぞろと出かける。

▲熊谷堤の櫻

荒川の氾濫に對して、熊谷町を救ふが爲に設けられた二十餘町の大堤防に植え附た櫻がそれで、堤の中央に一列に植えられた所が他所と變つて居る。試みに縦に之を望むと、路を折半して二つの花の隧道が作られたやう。堤の東側には霞張の茶店がずらりと並んで、『お休みなさい、寄つてらつしやう』と云ふ聲が盛に耳につく。茶屋女と云へば誰しも銀杏返しに黒繩子の襟と云ふや

うなのを聯想するが常なるに、これはまた文金の高島田に空色染の木綿の三紋附に、櫻の花の裾模様と云ふ打扮が多い。さすがに田舎！と云ふ感じが面白く思ひに浮ぶ。こゝからは名にし負ふ熊谷直實の遺跡のゐる熊谷寺も遠くはない。

▲横濱の櫻

それから少し遠くなつて横濱の櫻では、公園、紅葉坂、掃部山の櫻が最も賞せられ、神奈川の豊顯寺のも此界限では名高いうちに數へられて居る。

櫻の種類

東京の櫻は俗に吉野櫻と云へども、吉野の山櫻とは何の關係もない。學者は之に染井吉野と云ふ名前をつけて居る。もと江戸時代に於て、巢鴨の近所の染井の植木屋が、人工を以て作り出したもので、古來吉野の櫻が天下一品と稱せられて居た處から、此名を利用して賣出さうと云ふので、吉野から種子を取つたものと云つて賣出した所が、それが東京附近の地味に適つて盛んな繁殖を見るに至つた。東京の櫻を俗に吉野櫻と云ふはこの爲だと云ふ説は真に近い。兎に角舊幕の頃に染井の植木屋が多く、の苗木を作つて江戸の内外に植えたもので有ると云ふことは事實で有つて、十年許前までは此櫻は東京及附近に限られて居たので有るが、今は交通の便が開けて東京ならずともポツ／＼と他國にも見

られる様になつた。

染井吉野の特長とも見るべきは、花が咲いてから葉が出ること、咲き立てには薄紅色を帯びて居るが、十分に咲くと真白に見えて見事であること、花の軸には澤山に毛の生へて居ること、木の枝が擴がつて居ること等で有つて、従つて本當の山櫻とは一見直に區別がつくのである。そして此染井吉野は樹が早生の方で、花も極めて夥しく、枝振りも至つて面白いから、公園向としては至極結構であるが、惜しいことには樹の壽命が短かくて、二三十年も経つと段々に枝が枯れて、樹の姿が次第に見苦しくなると云ふ缺點がある。今の東京の櫻の大部分は此染井吉野で、向島江戸川植物園其他市内の櫻の多い所はすべて此種の櫻で有ることは前にも云つた通りである。

尙序に世界中には大凡二十一種の櫻があり、それに園藝品を加へると數百種に上り、有ゆる櫻の源で有る山櫻の園藝品丈でも百餘種に達すると云ふことであるが、試みに最も知られたもの丈擧げて見ても實に左の通りである。

| | | | | | | |
|-----|-----|-----|------|------|-----|-----|
| 普賢象 | 楊貴妃 | 奈良櫻 | 雲珠櫻 | 馬の尾櫻 | 手鞠櫻 | 鹽釜櫻 |
| 牡丹櫻 | 伊勢櫻 | 江戸櫻 | 樺櫻 | 緋櫻 | 淺黃櫻 | 紫櫻 |
| 四季櫻 | 冬櫻 | 大勝櫻 | 迎櫻 | 南殿櫻 | 谷越櫻 | 辨慶櫻 |
| 赤芽櫻 | 墨染櫻 | 栢霞櫻 | 右衛門櫻 | 拾櫻 | 白妙櫻 | 臨關櫻 |

| | | | | | | |
|------|------|------|------|------|-----|------|
| 絲野櫻 | 犬櫻 | 吉野櫻 | 三吉野櫻 | 地主櫻 | 深山隱 | 嵐山 |
| 春日野 | 西行櫻 | 百枝櫻 | 玉兔 | 小菊 | 鶴櫻 | 人丸櫻 |
| 金絲櫻 | 粉瓣櫻 | 延命櫻 | 兒櫻 | 殿櫻 | 鷺尾櫻 | 逆手櫻 |
| 旗櫻 | 駒聚櫻 | 小山櫻 | 八重山櫻 | 小櫻 | 白櫻 | 雪山櫻 |
| 一文字櫻 | 薄盛櫻 | 桐ヶ谷櫻 | 法輪寺櫻 | 海棠櫻 | 九重櫻 | 爪紅櫻 |
| 有明櫻 | 絲括櫻 | 提燈 | 御所櫻 | 王照君 | 香櫻 | 薩摩緋櫻 |
| 泰山府君 | 外山櫻 | 曉櫻 | 旗子櫻 | 風來寺櫻 | 蝴蝶櫻 | 千鳥櫻 |
| 美人櫻 | 長崎櫻 | 常盤櫻 | 蝦夷櫻 | 壽春櫻 | 雀櫻 | 白玉櫻 |
| 觀音櫻 | 輕羅櫻 | 平頭櫻 | 鳳尾櫻 | 芭蕉堂 | 白山櫻 | 大船櫻 |
| 松川櫻 | 玉堂 | 時雨 | 玉盤 | 芍藥 | 九品 | 八景臺 |
| 夕日 | 大枝垂 | 小枝垂 | 山川 | 越前 | 照月 | 殘雪 |
| 夕霞 | 烏帽子櫻 | 寒櫻 | | | | |

それから又年によりて多少の相違は有らうが、前田曙山著『園藝文庫』によると、大體日本全國の櫻の開花期は、下に見るが如く三月中旬から六月中旬に及び、凡そ百日間は日本の何處かに櫻の花が見られる理で有ると云ふ。けれども處によると此表は稍異つた所があるやうである。

▲三月中旬、鹿兒島、宮崎▲三月下旬、高知、熊本、佐賀、長崎▲四月上旬、徳島、和歌山、大分、廣島、松山、多度津、岡山、神戸、大阪、福岡、嚴原、馬關、岐阜、名古屋、津、濱松、沼津、横須賀、館山▲四月中旬、京都、松江、鳥取、彦根、甲府、横濱、

られる様になつた。

染井吉野の特長とも見るべきは、花が咲いてから葉が出ること、咲き立てには薄紅色を帯びて居るが、十分に咲くと眞白に見えて見事であること、花の軸には澤山に毛の生へて居ること、木の枝が擴がつて居ること等で有つて、従つて本當の山櫻とは一見直に區別がつくので有る。そして此染井吉野は樹が早生の方で、花も極めて夥しく、枝振りも至つて面白いから、公園向としては至極結構で有るが、惜しいことには樹の壽命が短かくて、二三十年も経つと段々に枝が枯れて、樹の姿が次第に見苦しくなると云ふ缺點が有る。今の東京の櫻の大部分は此染井吉野で、向島江戸川植物園其他市内の櫻の多い所はすべて此種の櫻で有ることは前にも云つた通りで有る。

尙序に世界中には大凡二十一種の櫻が有り、それに園藝品を加へると數百種に上り、有ゆる櫻の源で有る山櫻の園藝品丈でも百餘種に達すると云ふことで有るが、試みに最も知られたもの丈擧げて見ても實に左の通りで有る。

| | | | | | | |
|-----|-----|-----|------|------|-----|-----|
| 普賢象 | 楊貴妃 | 奈良櫻 | 雲珠櫻 | 馬の尾櫻 | 手鞠櫻 | 鹽釜櫻 |
| 牡丹櫻 | 伊勢櫻 | 江戸櫻 | 棒櫻 | 耕櫻 | 淺黃櫻 | 紫櫻 |
| 四季櫻 | 冬櫻 | 大膳櫻 | 暹櫻 | 南殿櫻 | 谷越櫻 | 辨慶櫻 |
| 赤芽櫻 | 墨染櫻 | 栖霞櫻 | 右衛門櫻 | 拾櫻 | 白妙櫻 | 醍醐櫻 |

| | | | | | | |
|------|------|------|------|------|-----|------|
| 絲野櫻 | 犬櫻 | 吉野櫻 | 三吉野櫻 | 地主櫻 | 深山隱 | 嵐山 |
| 春日野 | 西行櫻 | 百枝櫻 | 玉兔 | 小菊 | 鴨尾櫻 | 人丸櫻 |
| 金絲櫻 | 粉瓣櫻 | 延命櫻 | 兒櫻 | 殿櫻 | 鷺尾櫻 | 逆手櫻 |
| 旗櫻 | 駒繫櫻 | 小山櫻 | 八重山櫻 | 小櫻 | 白櫻 | 雪山櫻 |
| 一文字櫻 | 薄曇櫻 | 桐ヶ谷櫻 | 法輪寺櫻 | 薄棠櫻 | 九重櫻 | 爪紅櫻 |
| 有明櫻 | 絲拵櫻 | 提燈 | 御所櫻 | 王照君 | 香櫻 | 薩摩緋櫻 |
| 泰山府君 | 外山櫻 | 晚櫻 | 撫子櫻 | 風來寺櫻 | 蝴蝶櫻 | 千鳥櫻 |
| 美人櫻 | 長崎櫻 | 常盤櫻 | 蝦夷櫻 | 壽春櫻 | 雀櫻 | 白玉櫻 |
| 觀音櫻 | 輕羅櫻 | 平頭櫻 | 鳳尾櫻 | 芭蕉堂 | 白山櫻 | 大船櫻 |
| 松川櫻 | 玉堂 | 時雨 | 玉盤 | 芍藥 | 九品 | 八景臺 |
| 夕日 | 大枝垂 | 小枝垂 | 山川 | 越前 | 照月 | 殘雪 |
| 夕霞 | 烏帽子櫻 | 寒櫻 | 山 | 越前 | 照月 | 殘雪 |

それから又年によりて多少の相違は有らうが、前田曙山著『園藝文庫』によると、大體日本全國の櫻の開花期は、下に見るが如く三月中旬から六月中旬に及び、凡そ百日間は日本の何處かに櫻の花が見られる理で有ると云ふ。けれども處によると此表は稍異つた所が有るやうで有る。

▲三月中旬、鹿兒島、宮崎▲三月下旬、高知、熊本、佐賀、長崎▲四月上旬、徳島、和歌山、大分、廣島、松山、多度津、岡山、神戸、大阪、福岡、盛原、馬關、岐阜、名古屋、津、濱松、沼津、横須賀、館山▲四月中旬、京都、松江、鳥取、彦根、甲府、横濱、

東京、浦和、千葉▲四月下旬、水戸、宇都宮、飯田、前橋、福井、金澤、富山、新潟▲五月上旬、松本、足尾、輪島、長野、福島、山形、仙臺▲五月中旬、秋田、盛岡、青森、函館▲五月下旬、青森、札幌、上川、十勝▲六月上旬、宗谷、釧路、網走▲六月中旬、根室。

花に鐘そこのき給へ喧嘩買
 花に風かろく来て吹け酒の泡
 小袖ほす尼なつかしや窓の花
 花の雨鯛に鹽する夕べ哉
 花に埋れて夢より直に死なむ哉
 もてあます花の夕べや泣上戸
 花の蔭笑ひ上戸の美人あり
 花もどり錢落したる坊主哉
 傘さして駕かく花の都哉
 山の月花盗人を照し給ふ
 交番やこゝにも一人花の酔

其 嵐 去 仙 越 百 関 同 蓼 一 子
 角 雪 來 化 人 明 更 太 茶 規

牛の角すぼめて通れ花の中
 花咲いて天下に敵はなかりけり
 花一山紫衣の僧あり若衆あり
 花に高尾入文字ふむ伽羅の下駄
 長いとは申さぬ花の堤かな
 煩惱の花の都と鐘が鳴る
 花咲いて八百八町酔たりな
 木母寺や花の七日を歌念佛
 花の幕女女を見に出る
 されてとふ風船玉や花曇
 夕暮や菓子も團子も花吹雪
 花曇り第二の晴衣着て行かん
 人も恐になるまで花の盛かな
 花散つて水は南へ流れけり

鳴 雪 同 同 虚 紅 句 折 握 几 插 李 虚 霞 子
 子 葉 佛 亭 月 湫 雲 坪 子 山 規

東京年中行事

夜嵐や落花吹つける電気燈
大盃落花も共に呑み干しぬ
夕嵐花一ひらの重みかな
雪洞の蠟燭匂ふ落花哉
三味線に樽をかけたる花見哉

明星や櫻さだめぬ山かづら
天の河峰よりかゝる櫻哉
馬下りて高根の櫻見つけたり
此やうな末世を櫻だらけ哉
船で見る櫻の中の喧嘩哉
初櫻鞍馬に天狗揃ひけり
草臥や西施のひそむ櫻茶屋
詠み人の跡追ふ櫻月夜かな

子 宇 柳 鳴 子
規 皎 月 雪 規

同 紅 小 桃 一 蕪 杉 其
葉 波 雨 茶 村 風 角

おふけなく借家の櫻咲きにけり
化された人が通るぞ晝櫻
汽車の窓に見あぐる岡の櫻哉
君見よや八百八町皆櫻
寺あれば櫻宮あれば櫻かな
旅淋し櫻に人を垣間見て
千本の櫻一度に咲きにけり
知り人の妻をよそ眼の櫻かな
着飾りて春は女のさくら哉
開け放つ雨の櫻や迎へ酒
櫻咲く江戸に生れて男かな

紅 同 子 同 鳴 同 露 紅 麥 恕 市
葉 規 規 雪 子 子 月 緑 人 醉 太 郎

山櫻鏡こひしき借あらしむ
歌屑の松に吹かれてやま櫻

蕪 其
村 角

家ありや夕山櫻灯のもる、
須磨寺の飯の烟や山櫻
半日の雨より長し絲櫻
聲あらば二十五弦や絲櫻
山櫻上野は人の曇りかな
傘さして馬に乗りけり山櫻
山櫻しきりに散るや檜木笠

蘭更 芭蕉 抱一 竹冷 格堂 老子 雉

大名の駕に散込む櫻かな
櫻ちる朝静かなり烟草盆
みよし野は散るも散らぬも櫻哉
世に騎る隣座敷や八重櫻

毛執 篤老 把栗 稜々

夜櫻

東京で『夜櫻を見に行かう』と云へば、吉原のそれだとは通人でなくとも大抵の人には通ずる。

花見歸りの夕暮を名ばかり美しい日本堤ふらふらと、いつ下りるとも氣附かぬやうな衣紋坂を下りて十間許りも行くと、花形の電燈で飾り立てた所謂大門が先づ眼につく。門の右の柱には『春夢正濃満街櫻雲』、左の柱には『秋信先通兩行燈影』と云ふ故福地櫻癡居士の題辭がある。門を潛るとその通りが音に名高い仲の町で、花は通りの真中に病院の門までズラリとつゞいて、かゞやく電燈の光とうす暗い燈籠の火影に照されて、ゆら／＼とみる眼もあやに四邊りにたゞよふ紅の霞の床しよ美しき。

櫻は、今は五代目の三河島の植惣が年々植附けることになつて、方々から珍らしいのをくゞと搜して來て植える。今年の櫻は、天の川、普賢櫻、遅櫻、南殿、長州緋櫻、虎の尾、車返し、大提灯、鬱金櫻など云ふ素人別にしても大凡二十四種、本當に分けると百十種、總數三百五十株千餘本もあつて、中には本郷あたりの大名屋敷から移して來た御衣黃の鬱金櫻などの珍種もあり、植附の總費が千三百五十圓に上つたとやら。

櫻のぐるりには丈の低い青竹の垣をめぐらし、生ひ繁つた株と株の間には、松、椿、楓、山吹、丁子なんどの下草をあしらひ、植込の兩側には一間置位に引手茶屋の名を記した、中は洋燈の朝顔燈籠

を立て列ね、江戸の面影を其儘と云ふ兩側の引手茶屋の軒並には、大文字、稻本、角海老、寶來の四つの貸座敷から寄贈の、白茶地に鶴と蒔黄をばかし合つて淡紅色の花の雲を染抜き、真中には四樓の名を染め、ぐるりは匹田鹿の子に絞り上げた花暖簾をだらりと垂れた艶かな華やかだ。

昔は此夜櫻を名として『頭に玳瑁の櫛簪を飾り、身に錦繡の桶襦を纏ひ、鴛母、新道、禿、樓丁など十數人を従へ、揚屋提灯を輝かしつゝ、先を拂つて、引手茶屋への道すがらを徐ろに練つて歩いた所謂花魁の道中を見んとして、來り集るもの數を知らず、廓中の繁盛此時を以て最とした』と云ふが、維新後になつては、明治三年に一度と二十年後に一度行はれた外、所謂道中と云ふもの、廢れて了つた今日に於ても、江戸時代から天下御免の遊女町と云ふ古い歴史のある丈に、せめて一度は夜櫻を見る丈はとあつて、お國への土産話には是非〜にと云ふ赤毛布の老爺さん老婆さんにまぎれて、大抵の人が女までもぞろ〜と大門を潛つて入つて行く。

櫻の植付は大抵三月二十五日とさまつて、四月一日は花開と云つて引手茶屋の軒並に花暖簾を吊し、其晩から朝顔燈籠を立て、燈光をつける。藝妓や花魁はしまいと云つて客から約束をつけて貰ふ。そして四月の十四五日から二十日頃にかけて花はポツ〜と妍を競ひ出す。夕やみにまぎれて花魁の連中は張見世の前の半時一時間を、花の下を桶襦姿でぞろり〜と道中ならぬ道中をやつてゐる。そ

してからかふ冷かしの連中と花魁とがどちらが女やら分らぬやうな言葉つきで毒づき合ふ。廓の中は矢張女が強いから、からかいかけた男の方が却つてやりこめられて了ふと云ふやうな景色も見られる。かうして五十日を限つて願出た植込も花が散つて了へば元の賑ひはどこへやら消えてなくなつて、春も暮れて五月になつて、葉櫻の取拂はるゝ廓の眞晝は殊の外に淋しい。

- 夜櫻 や 三味線 彈いて 人通 葵 太
- 取拂 ふ 廓の 櫻や 暮の 春 眉 月
- 大門 を 押されて はいる 櫻哉 四方 太
- 夜櫻 や 遊女 疲れて 欄に 倚る 格 堂
- 夜櫻 に 綺羅 錦繡の 巷かな 春 洋

仲の町に櫻を植えること云ふことは寛延二年の春鉢植の櫻をかざつたが元で、翌年からは今のやうに植付けるやうになり、近年に至つて二三年廢れて居つたこともあり、櫻の外に菖蒲も菊も植えたことが有るのみならず、仲の町ばかりでなく時には小格子にも植えたことが有ると云ふ。江戸歳事記を見ると『花をつらねたる詩歌遊女の秀吟等あまたあり』と云つて、廓の櫻を歌つた遊女の句として次のやうなのが擧げてある。

居つゝけの夜着遊はせて櫻哉
 空は木々にゆつりて櫻哉
 かいとりのまれして蝶も櫻哉
 たかとの、爪音もつれつ後夜の花
 風通ふ神をはいとへはなの文
 ちりこんでしひる櫻や小盃
 武家かたの供に先たつ櫻哉
 見てのみや此吉原の夕まくら

中近江や 東 人
 松葉や 染 之 助
 玉屋 花 紫
 松葉や 瀬 川 紫
 扇 瀧 川
 同 花 扇
 兵庫屋 月 外
 紫 岡

序ついでに此時このときになると方々はうほうの小店こみせや中店ちゆうみせでは、櫻さくらの造花つくりはなを店みせ一杯いっぱいにかざり附つけ、人ひとの花はなは其下そのした蔭かげにずらりと列ならんで、どれが花はなやら櫻さくらやら分けかねるやうな景氣けいきも添そへられる。それから櫻さくらの植込うえこみの中には、所々しょしょに繪えに見みるやうな一種風變しゆふうへんりな燈籠とうろうが立つて居るが、あれはその名なをたそえと云いつて、其昔そのむかしやだ吉原きげんが今のやうな電氣でんきにならぬ時代じだいに、たそえと云ふ禿かぶが人間達にんげんたちで切きられた追善つゐぜんの紀念きねんとしてつくられたもので有る。所ところがあれ一つに三十圓さんじゅうげんもかゝると云ふので今は澤山たくさんには作つくられぬが、春雨はるまゆのそぼふる夜更よよぎなどに、朝顔燈籠あさがおとうろうは皆みなうちへ取り入れて了しまつたあとき、あなたそえだけが薄暗うすかみのうちにぼろと光ひかつて、霞かすみのうちに火影ひかげの靜しずかにけふる床しどしさ、とりやなか〜い、もんで御座ござんすよ、と服かみれて〜



二十何貫目もあると云ふ何とか屋の女中は、此廊でも名うての昔氣質屋と聞いた茶屋の名物で有る。それは兎に角に、今年の夜櫻は折角咲かうと云ふ四月の九日に、吉原から千住へかけての大火が有つたので、全くフイになつて了つた。思ふに茶屋一つさへ残さず全滅して了つたこと、新吉原の恢復さへ疑問の内にあることであるから、此處二三年は又しても名物の夜櫻が見られぬことになるで有らうか。

櫻餅と櫻鍋

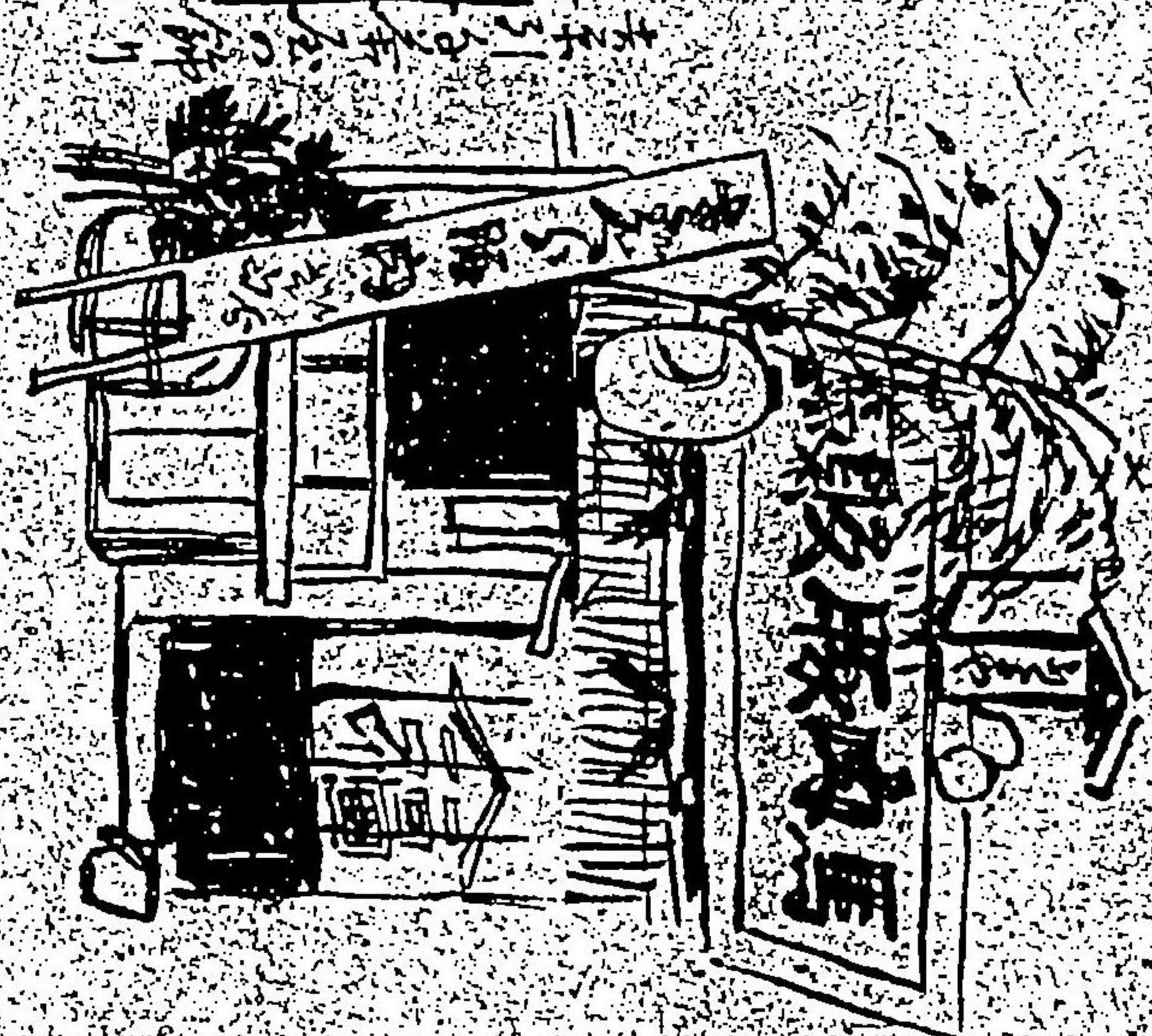
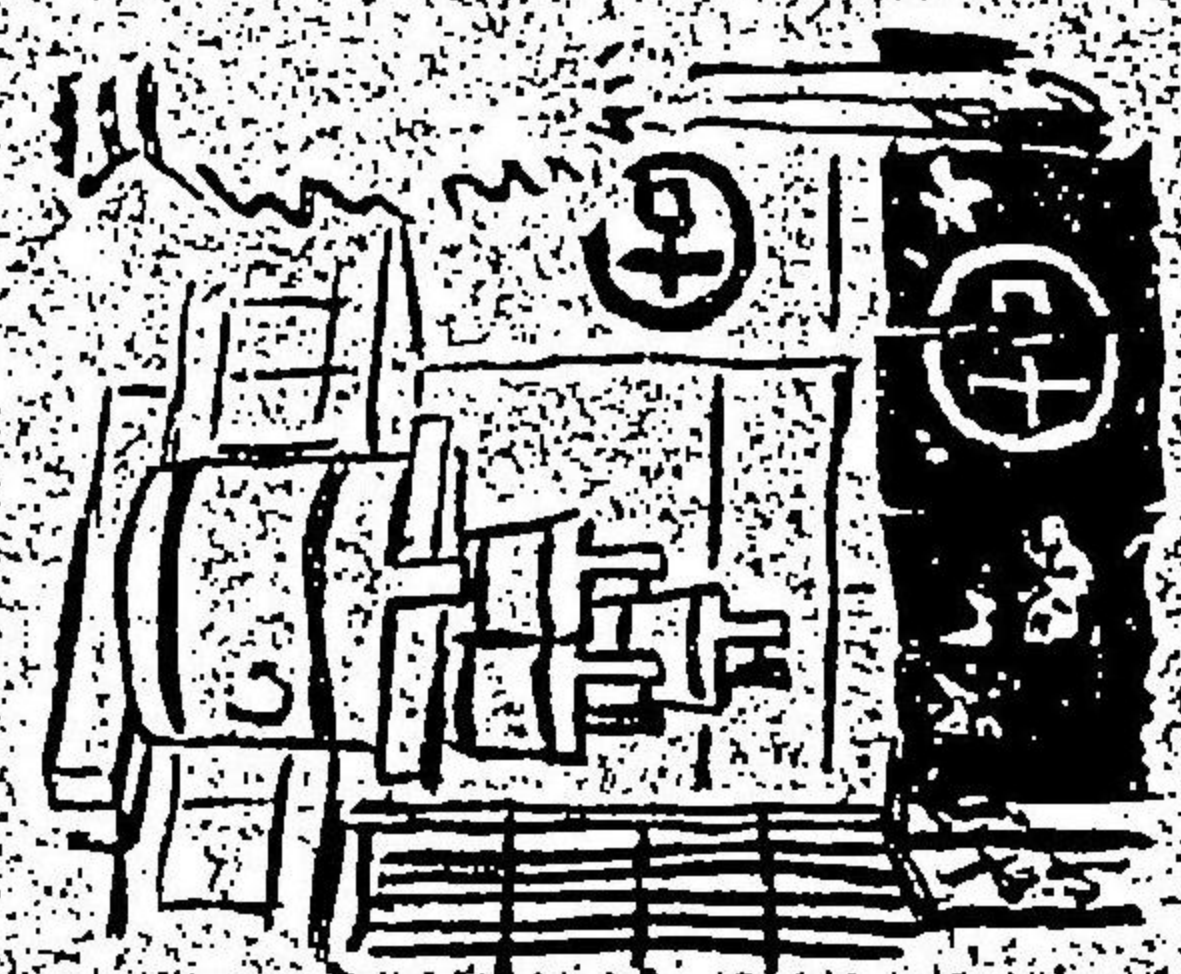
櫻の花の咲かうと云ふ頃になると、何處の餅菓子屋でも必ず櫻の葉につゝんだ所謂櫻餅を賣出す。中にも向島言問の長命寺の入口に在る櫻餅と云へば、食通ならずともせめて名位は知らぬものはない。これと同時に櫻の名に因んだ食物と云へば、季節ものではないが櫻鍋の名が思ひ出される。何のことはない馬肉鍋のこと、語源は何處に在るか知らぬが、『咲いた櫻に何故駒つなぐ』の俗語から出たものだとも謂ふ。成程馬肉鍋とか馬鍋とか云ふよりは、恐ろしく品がよく聞えて、名を聞いた丈では『何だらう、一つ喰つて見やうか』と云ふ氣にもならせる。此處ことは矢張東京でなければ聞かれぬことである。

三つ 食へば葉三片や櫻餅
 櫻餅葉をなつかしみ食ふなり
 櫻餅食うて抜け、り長命寺
 菌八の師匠が宿や櫻餅
 浮世繪の屏風も櫻餅屋かな
 屋根船をよせて使や櫻餅
 櫻餅白きは一重とやいはん

虚子
 同
 同
 同
 東洋城
 春葉

端艇競漕

早くは三月下旬から四月一ばいにかけて、隅田川で東京諸學校は勿論銀行會社などの端艇競漕が行はれる。そして色々のレースの中に在つて、帝國大學のそれは何を云つても一番の見もので有る。中にも赤の醫科と青の法科と白の工科の選手競漕は天下の呼物で有つて、選手連は三月の始から殆んど一ヶ月半を向島に下宿して練習に餘念がない。此レースは大抵向島の櫻が満開になる四月の十日前後に行はれ、市中の學生は勿論女學生の見物の多いのは、日本銀行のそれと共に一種の特色で有つて、



選手競漕の際などはそれが赤青とそれ／＼最負の組と同じ色合の小旗を振りかざして、青！赤！と狂気のやうになつて黄色い聲を絞る。

殊に面白いは、此競漕には大學の教授連までが火のやうになつて各自分の科の勝を争ふことで、醫科などでは、愈勝を占めると二日も三日も業を休んで、ドンチャン／＼樂隊で囃し立て、大學の構内を巡り歩いて祝ひ狂うると云ふ歴史的風習をもつて居る程で有る。

今年は十二年振にて優勝旗が白の手に歸し、工科の教授學生連の歡喜は言語に絶し、選手連は胴上げさること幾十回なるを知らず、其夜直ちに祝捷の大宴會が開かれたので有つた。

ポートレース堤は花の嵐哉 愚 佛

四月曆

一日 吳服店勸工場等賣出し凡そ一週間、

△月始めより運動會始まる、

△此日より一ヶ月間三越吳服店にて小供博覽會を開く、

三日 神武天皇祭、

東京年中行事

△此日頃及此月の中大汐の日汐干狩、

六日 此日より一ヶ月間泉岳寺義士大祭、

八日 灌佛會△釋尊降誕會、

△木下川薬師の開帳、

△此頃第二日曜より日比谷公園音楽堂演奏始まる、

九日 向島三國社祭禮、

△此頃増上寺にて御忌、

十一日 此日より廿三日まで向島長命寺辨天開帳、

十三日 品川神社にて卯の神事、

十五日 聖徳太子忌日にて太子祭、

△此日より十七日まで麻布材木町の出雲大社東京分祠にて三日間大祭、

十六日 日本橋新材木町杉森稻荷祭禮、

△十六日より十八日まで上野、芝兩公園東照宮大祭、

二十日 此日頃觀櫻御宴、

△此日頃より十軒店及兩國五月人形の市たつ。男の子ある家、吹流し、鯉を立て始む、

二十一日 松陰神社祭禮、

△此日より二十八日まで池上本門寺にて千部讀誦會、

二十四日 此日頃孔子祭、

二十五日 麴町平河町天神大祭△牛込天神町北野神社祭、

二十八日 此日頃相撲協會の夏場所御免祝、

▲此月中旬根岸菴春亭にて鶯啼合會、

▲此月の中碧雲臺の大師會、

▲玉川の紙鳶會、

▲此月初頃から初鯉、

▲三月半頃から草花賣出る、

▲四月末より苗賣種蒔賣、

▲此月始より柏餅を賣出し中頃より粽出る、

▲此日甲子の日各所の大黒天賑はふ、小石川傳通院の大黒天にては開運守札及福財布を出す、

▲庚申の日柴又帝釋天賑ふ、

▲此月末より春季種痘始まる、

▲此月二十日頃より各所の躑躅、藤、牡丹開き始め、諸方の庭園を開く、

賣出し

四月になると、一日から五日乃至は一週間を限りて、何れの呉服店でも賣出しと云ふものを始める。そして『夏物大賣出し』と書いた赤白青とりくの幟や旗を春風に靡かせつゝ、色んな新柄などを飾り立て、盛んに客を引く。

尤も賣出しと云ふのは春ばかりに限つた理ではなく、盆の前には中元の賣出し、十月に入ると冬物賣出し、歳暮になると歳暮の賣出しと云ふものを行ふので有るが、四月と十月とには呉服屋の賣出しが多くて、中元と歳暮とには呉服店ばかりでなく、勸工場やデパートメントストアを始めとして、色んな商店が提灯やら幟旗などを飾つて、樂隊で囃し立てながら、盛んに景氣をつけて所謂福引賣出しと云ふものを作る。そして品物よりも甘々と立派な籤を引き當てやうとする連中がどやどやと押かけて行く。歳暮の賣出しは中にも最も賑ふが例で有る。

運動會

素より澄み渡つた秋の菊日和にも行はれぬでもないが、櫻の花の咲き亂る、前後から、上野や飛鳥山の花の木蔭では勿論、彼方此方の運動場では盛んに運動會が催される中にも、わけがない小學兒童の、運動服とおさげの揃ひの姿での旗取り競走や球拾ひ競走や、其他色んな罪の無い競技は殊の外に床しい可愛らしいもの、一つで有る。運動會はまた學校ばかりではない、色々の會社や工場などに於ても、春の一日を費やして女工や職工店員などの爲に慰勞の運動會を開くことが近頃漸く廣く行はるるやうになつて來た。そして此等の連中や可愛い小學兒童等が、隊伍を組んで旗押し立てつゝ、樂しげに唱歌歌ひながら進み行く様はまた春の巷の一景物たるを失はぬので有る。

神武天皇祭 (三日)

孝明天皇祭と同じく、皇靈殿に於て午前八時より朝の御祭典、九時半よりは御親祭、午後四時よりは夕の御祭典を行はせられ、其間の次第も孝明天皇祭の御時と同じやうで有るが、只彼に御神樂を奏せらるゝ代りに、此には東遊を行はせられると云ふことで有る。

尙此日敕使を大和歌傍山東北陵に遣はされ、幣帛を奉り神饌を供へて、御陵祭を行はしめられることも略ぼ孝明天皇祭と同様で有る。

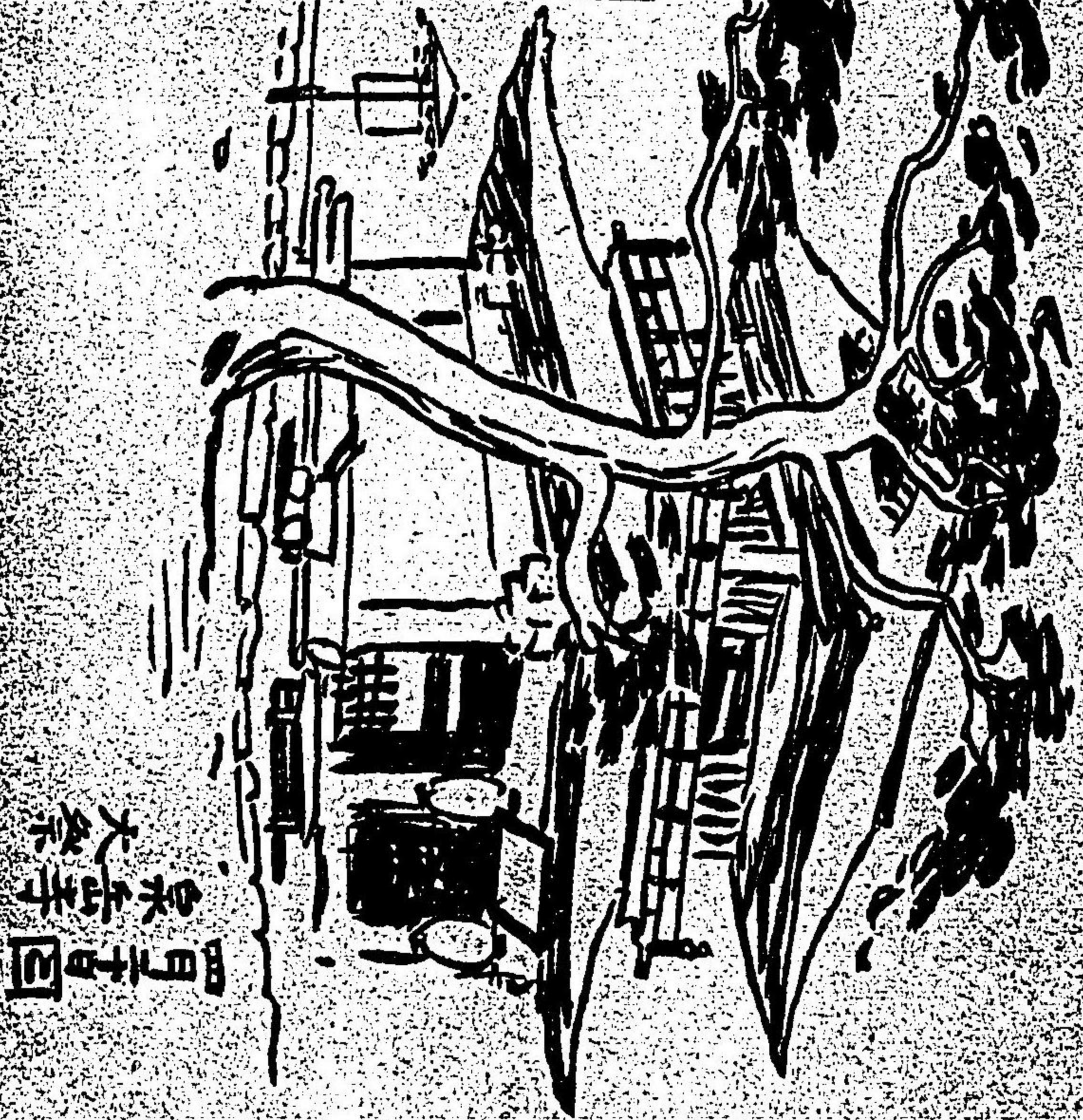
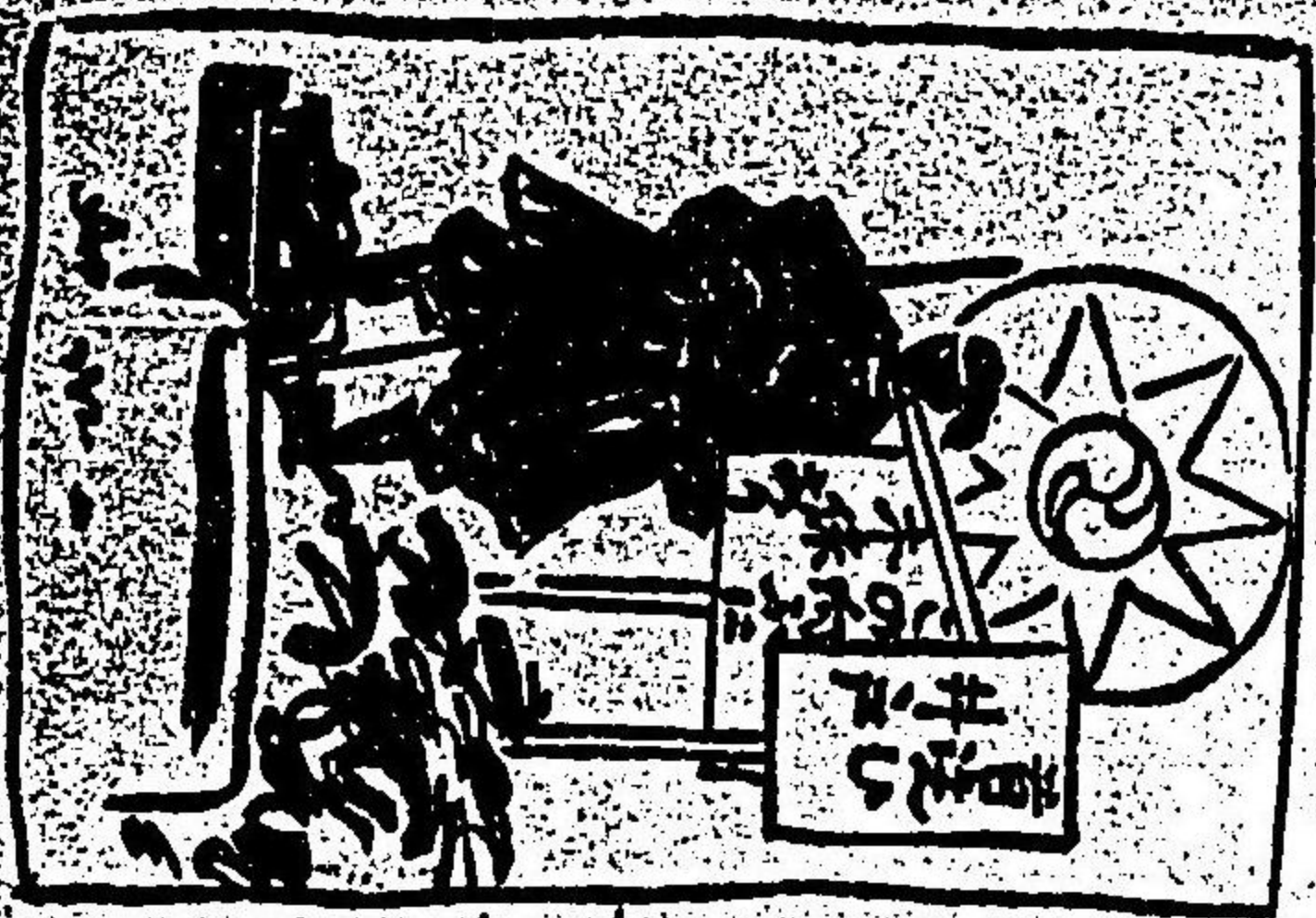
此お祭は近く孝明天皇の御時、萬延年中に始まつたもので、公けに國祭日と定めさせられたのは、明治四年三月七日のことと有つて、當時はまだ三月十一日が御例祭の日で有つたのを、太陽曆に換算の後に四月三日と定めさせられたので有る。

汐干狩

神武天皇祭の前後は毎年大方陰曆の三月三日頃で、丁度大潮の節に相當する。此時分には芝浦品川の沖合から羽田附近にかけて、正午には午砲底と云つて、海の底までカンカラに干上つて了ふ。そして一帶の砂地がカラリと顯はれると、そこにも此處にも紅い蹴出しや色とり／＼のリボンや、海水帽や、さては八字髷の頬かひりまでが跳ね廻つて、あざりや蛤掘りの爲に濱邊の小半日は賑はひ賑はふ。連れの多いのになると、大抵は芝浦洲崎佃島月島あたりから、干潟の邊りまで船を備うて出懸るのが普通で、そして其船と云つても色々飾り立て、なかには吹流しや國旗提灯の飾では最古いとあつて、花傘附の萬燈や、紅に縫模様の旗などを押し立て、俄か拵らへの樂隊で囃しながら來るも

あれば、屋形船にずらりと幔幕をしぼらせて、歌澤かずつと碎けて一中か何どの濫い喉に、床しい手なみの絲の音さへ響かせながら、四邊の人々に氣を揉ませるやうなものあり、それかと思ふとお揃の赤手拭の鉢巻か意氣な豆絞りの頬冠りかの打扮で、カンカラ太鼓を叩いて踊つたり跳ねたりの大陽氣の中を、わざ／＼こちから押懸けて行つて船を打つけるかどうかして、何かの手掛りに艶消しの喧嘩を吹きかけて、まんまと買はれて結局は酒の一杯にもありつかうと云ふ悪風はいつまで立つても變らぬが世の習はし。それかと思ふと若い學生などの中には、お先眞暗の矢鏢に沖へ／＼と漕ぎ出して、夕暮の烈しい風に吹捲られて行衛も知らぬ騒を引起すのが毎年一組や二組はあるので、萬一を慮つての水上署の警邏船や海員救濟會のボートが、あつちこつちへと遊び船の間を縫ひ歩いて見廻はつて居る。かうして汐干狩と云つても、本當に貝を拾はうよりも遊船の連中が多く、貝拾と云つてもあざりの十に蛤の一つ二つも拾へば上等の方で、大抵は人の歸る頃を目懸けて賣りに來る商人のを一升二升宛買つて歸つて、留守番をおつたまがさうと云ふ罪の淺い可愛らしい魂膽。そして船の借り賃と云ふのは荷足船で二圓五十錢位から三圓内外、傳馬船になると五圓内外が普通だと云ふ話。

親にらび比目魚をふんで汐干哉
其角
蛤は雀と遊ぶ汐干かな
乙由



泉岳寺
大祭

青天のつばづれなり沙干瀉
 よき人の蟹が家のぞく沙干哉
 親船に酒とりに来る沙干哉
 墨吐いて鳥賊の死に居る沙干哉
 沙干瀉隣の國へつゝさけり
 沙干人尻をまくつて寝みけり
 蛤の真珠吐くべき沙干哉
 晝飯の法螺を吹いてる沙干哉
 穴を出し蟹の目を干す沙干哉

泉岳寺義士大祭

(四月六日—五月五日)

一 旭 貴 子 同 伯 犀 麥 素
 茶 齋 白 規 洲 東 人 水

高輪泉岳寺に於て、例年四月六日から五月五日まで三十日間舉行される。十二月のは義士討入の日の記念祭、二月に行はれるのは切腹記念の正忌日祭で有つて、四月から五月へかけてのが本當のお祭で有る。遺物陳列場の受附の老爺さんに聞くと、つまり守本尊の摩利支天のお祭ですよと云ふ。それ

は兎に角に参拜者には良雄が信仰した摩利支天のお守を出して居る外に、本堂内陣の兩脇には岸駒の龍虎、狩野梅春の辨財天等寺寶の書畫を掲げ、日清日露戰役の戦利品及細川流の盆石を陳列して縦覧を許し、義士遺物陳列場、義士木像館なども例日の如く縦覧を許して居る。そしてお寺にては午前十一時頃より住職以下十數名の僧侶内外陣に着座、法類を集めて二時間に亙る讀經回向があり、三十日の間毎日同じやうなことが繰返されて居る。

電車通りから本堂前に至る二丁の間には、兩側に義士打入や忠臣藏などの光景を描いた繪行燈が、櫻模様の雨傘の柄に吊され、例の義士に因んだ色んな模様や繪づくめの、杯、徳利、人形、簪、指輪なんどの土産物を始めとして、繪葉書店、團子屋、鮎屋などからは心持の悪い聲を出して盛んに客を呼んで居る。何しろ三十日間と云へば随分長い祭ながら、あれでもお参りの連中はなかく多くて、不斷でも線香の煙の絶えたことない義士の墓地をのぞいて見ると、紫の煙が濃々と立ち上つて全く噎せ返るやう。爺さん婆さん達頻りに感心して『ゑらいもんぢやなわ本當に、お墓が煙りで眞黒になつてる』。

灌佛會 (八日)

四月八日に釋尊が生れたと云ふことは必ずしも俗佛功德經ばかりではない。數多の經文にも見えて居ることで、印度には古くから此聖日を卜して道俗男女相集つて佛の功德を讚美する爲に、その形像を淨臺に安置して、伎樂を奏し香華を焚き、香水を以て沐浴灌洗する所謂灌佛行像式なるものが盛に行はれて居た。

それから支那でも古來灌佛式は盛に行はれ、殊に歷朝の王室では、之を以て嚴格な儀式の一つとして居つたもので有る、處で公事根源によると、我國にては推古天皇の時より始まつたやうに書いて有るが、此時はまだ本當の灌佛式を行つたものではなくして、本當の灌佛會と云ふのは、仁明天皇の承和七年四月八日に始めて行つたと云ふのが矢張事實で有る。

今も此日はどの寺院でも灌佛會が催されて居るが、中にも茅場町の藥師、淺草觀音、芝増上寺、回向院、本所林町の彌勒寺、麴町十丁目の心法寺、牛込榎町の宗伯寺、淺草藏前の閻魔堂等は最も賑ふ方で有る。

試に淺草の觀音堂へ行つて見ると、堂の右手の方に小さいお堂が設けられて、中には高さ一尺ばかりの釋尊の銅像が安置して有る。此像は誕生佛と云つて天地を指した童形の佛像で有る。堂の屋根には櫻海棠椿などの、花の枝が僅かばかり投げやるやうに置いて有る。これが花御堂と云ふので有る。見

て居ると參詣の人々は御堂の中に置いてある小さい杓を取つて、ガバリ〜と花御堂の臺に流れて居る甘茶を掬んでは、それを佛像の頭からさふと二三度浴せかけて、最後に其汁を片手に受取つて、くり〜坊主の赤坊の頭になすり附けたり、自分の眼の縁にこすりつけたりする。來る人も〜同じやうなことをしては、更に其右手に設けてある甘茶の賣場へ行つて、大抵は一錢銅貨を投り出して、正宗の空瓶か青竹の手桶へ甘茶を入れて貰ふ。青竹の手桶と云ふのは、本堂の下の小店で賣つて居るもので、青竹の一節を切つて角の長い手桶の形にこしらへたもので、それには丁度その手桶の中へ入るやうな小さい杓が附いて居る。手桶を賣つて居る店は五六軒しかないが、それでも手桶の市とか、竹筒の市とか云ふ大袈裟な名がついて居る。

地方ではまだ陰曆の四月八日に灌佛會を行ふ方が多いやうで有るが、東京はもうずっと以前から陽曆の此日に行うに決まつて居て、而も何處のお寺でも殆んど同じやうなことが行はれ、回向院の境内でも、茅場町藥師の境内でも、竹筒店がずらりと并んで、茅場町では八十石、回向院では四十石の甘茶を配り盡したと云ふことで有る。

尙聞く所によると、淺草の觀音堂では朝早くから、住職を始めとして二十二ヶ寺の坊さんが花御堂のぐるりでお經をあげて、それがすむと佛像の頭から甘茶を浴せかける所謂灌佛式と云ふのが有つた

さうな。

此日にも淺草觀音堂の山門は開かれて、下足料を取つて人の昇降にまかせて有る。上つて見ると色んな佛像と佛畫が大分かつて居る。

永き日にかはく間もなし誕生佛

卯月四日死んで生るゝ子は佛

灌佛や此日生るゝ馬鹿もあり

頭から甘き佛の産湯かな

花御堂鈎鐘草もあらまほし

お釋迦様の尻まだ青き甘茶哉

卯月八日我も生れし日なりけり

灌佛や裸百貫男の子

一茶

蕪村

史登

完來

蓼太

子規

大羽

馬山

釋尊降誕會

灌佛會の儀式と同じやうで有つて而も別で有り、別で有つても離るべからざるものは此降誕會で有

らう。灌佛會の古くから行はれてるに反してこれは未だ甚だ新しいもので、最初に行はれたのは明治廿五年のことである。其以前から都下の學校には、何も佛敎青年會の組織が有つて、時々會合が催されて居つたが、二十五年に至つて此等の聯合會が組織されて、四月八日神田一つ橋の大學講義室で始めて釋尊降誕會と云ふものが催されたので有る、それから三三年の間降誕會は同じ處で催されて居つたが、二十八年に至つて此佛敎青年聯合會が大日本佛敎青年會と改名されてからは、錦輝館を會場とし、其後佛敎青年傳道會、新佛敎德同志會、上宮敎會など云ふ會合も出來て、年々必ずしも四月八日と限つた理ではないが、大抵四月に入つてから八日前後までには、此降誕會と云ふものを催して演說會を開き、佛德を讚美すると云ふことが行はれて居る。

降誕會の中でも風變りで有つたのは、明治三十四年四月八日當時伯林滯在中の姉崎正路、近角常觀、藤代禎輔、芳賀矢一、松本文三郎、巖谷小波など云ふ連中が發起して、其處で開いた日本の花祭で有らう。其翌年も伯林で同じ風の花祭が行はれ、佛德讚歎會が催されたと云ふことで有るが、其後は勿論絶えたことで有らう。

それから面白いことには始めて降誕會の開かれた當時は必ず振つた餘興と云ふものがついて居て、大抵は會員自身で舞臺へ上つて、銘々の隠藝をやると云ふ風で、なかには其席で踊り出すと云ふ連中

もあつたさうで有る。

木下川薬師の開帳 (八日)

此薬師は延暦年中傳教大師の彫刻したもので有つて、貞觀二年に慈覺大師が殿堂を營み、淨光寺と號して天台宗に屬し、薬師を以て本尊としたので有るが、其後堂宇は屢兵燹に懸つたれど、薬師佛だけは幸に免れて傳つたもので、今の本堂は天正十九年に僧良完が再興したものだ云ふ。

日比谷公園の音楽

ホカ／＼と暖くなつて散策の好時節になると、四月の第二日曜日から日比谷の音楽堂では、寒い間を中止されて居た西洋音楽の演奏が始まる。元來が音楽の一般普及を目的として行はれるので有つて、大抵は陸軍、時には海軍の軍樂隊が月二回の晴天の日曜又は土曜を義務的に演奏するので有から、入場券と云つても六百枚を限つて、其日の午前七時から、日比谷公園事務所に於て無料で配たるので有る。そして一體が日比谷の音楽會場は、奏樂堂の外はおつ開いた野天で有つて、只腰が掛けられる様になつて居るばかりで有るから、入場券はなくとも、場外から之を聴くに一向差支がない。従つ

て、演奏のある毎に、散歩がてらの聴衆は會場の外にも山の如く群れ集つて、床しい夢幻曲や面白い圓舞曲や、さては勇ましい行進曲に暫しの清興を貪るので有る。

試に奏樂堂の外に掲げて有る演奏の規定と云ふのを見ると、四、五、六、十、十一月は第二第四日曜午後三時より五時まで、七、八、九月は第二第四日曜午後七時より九時まで演奏、東京市役所と書して有る。

御 忌

淨土宗の開祖法然坊圓光大師の忌日有つて、之を單に御忌と云ふのは、もと後水尾天皇の勅令によりて法會を營んだが爲で有ると云ふ。本當は陰曆の一月廿五日が忌日有るが、智恩院及芝増上寺の御忌は今毎年四月に修し、地方の淨土宗寺院にては陰曆の正月に行はるゝが多い。

今年に智恩院の御忌について、増上寺に於ても圓光明照大師七百年の大法要が四月九日から十五日まで一週間行はれたが、例年の御忌は三日間有る。それから此期日も四月と云ふ外には嚴に一定したことはないと見えて、四十二年の次第を見ると二十三日から二十五日迄の三日間行はれて居る。御忌の次第は次に擧ぐる所の四十二年の「御忌會行儀次第」に譲るとして、一つ記して置かなけれ

ばならぬは『お練り』と云ふもので有る。それはつまり其日の導師が數多の衆僧を率ゐての上殿の行列で有つて、例年のそれは大抵六七十の僧侶によりて行はるゝので有るが、今年のそれは素晴しい行列で有つた。行列の先頭には齋の頭が立つて光明講と云ふ旗を押立て、徳川の昔徳々葵御紋の社符に帶刀姿の優婆塞三十名が之につゞき、百味講の旗を翻へした講員十五名又之につゞき、更に錦旗につゞいて香衣七條の大衆が二百名、赤地の金襴に杏葉紋附の揃の袈裟をつけた式衆が五十六名、素袍指貫に藁靴の打扮可愛らしい大中小の童子六名が練行く後を、紫衣に金襴大五條の袈裟をかけた唱導師は役僧二名宛を前後に、つゞいて香衣七條の脇導師八名、唱導師法類の外僧侶二百名及導師の信徒其他の善男善女數百名を従へて、静かに舊彌生館より人垣の間を練りながら三門を入つて上殿する。かうして五彩の雲の色美しく棚引き棚引く間を、六名の式衆が手ん手に携へた華籠より四色の蓮花を打ち降らす様は、宛然彌陀の淨土を面のあたりに見るがやうで有つた。

尙本年は七百年の大法要紀念として、日々午前と午後の二回宛京都の本山に倣つて『おかうぞり』の剃度式を行ひ、毎日午後は特に宮内省から廻された伶人九名乃至三十六名が出張して、本堂前に設けた朱塗の舞樂殿で古雅なる舞樂の催しが有つた。

氣にむかば念佛申せよ御忌の場

几董

御忌の鐘ひゞくや谷の氷まで
 京は梅の寒きをつくや御忌の鐘
 御忌詣都をぞろりゝかな
 念佛の一足づゝや御忌の鐘
 御忌詣母のゆかりの珠敷屋かな

蕪村
 月村
 六和
 孤島
 一堂

明治四十
 二年四月御忌會行儀次第

二香鐘 午後一時 參堂
 從集會所供奉行列正面上堂

●廿三日午前十時 一山總出勤
 香衣如法衣

次發願文
 次光明遍照
 次念佛一會

○讀誦正行

先洪鐘入下
 次大衆入堂
 次御導師昇殿
 次香偈
 次三寶禮
 次廣懺悔
 次略懺悔
 次御十念

次一枚起請文 御發唱
 次念佛一會
 次自佛教人信偈
 次御十念
 次十念御授與
 次御導師退堂
 次大衆退堂

先奏樂先進參堂
 次大衆昇堂 (是ヨリ先キ法主及檀林
 寄宿ハ後門ヨリ上堂)
 次導師昇堂 (内陣左ヨリ右ニ一匝法主ノ
 高座前ニ於テ三禮シ畢テ着
 座)
 次止樂

導師 安樂寺 大僧都海應
 四智讀 源流院 天實
 伽陀 源實院 亮貫
 式衆 稱讚偈 月院院 吞江
 唱禮 安養院 滿定

東京年中行事

次作相
 次四智度(同音ニ至テ導師内陣ニ進) 燒香三拜シ畢登壇洒水)
 次合鉢
 次伽陀(附 十種供養)
 次開經偈(導師開口)
 次觀無量壽經(割笏)
 次稱讚偈
 次嘆德疏 畢テ導師降壇
 次伽陀 大衆長跪 我本因地 以念佛心 入無生忍 今於此界 攝於念佛 歸於淨土
 次唱禮(南無宗祖圓光東漸慧成弘覺慈) 敬大師上酬慈恩大衆唱和
 次念佛一會
 次自信教人信偈
 次十念(畢テ導師左方著坐)
 次法主降壇大師前ニ進シ御三拜
 次十念御授與
 次奏樂
 次法主御退堂(式衆先進檀林寄宿隨從)
 次導師復座
 次止樂

次四弘誓願
 次三歸禮
 次十念授與
 次退散樂
 次導師復座默禮
 次前列衆僧先進退堂
 次導師退堂
 次衆僧退堂
 ▲同日午後五時 服紗衣七條
 ○日沒禮懺儀(式如常)
 御代理 四方寺 大僧都俊道
 ▲同午後八時 服紗衣七條
 ○初夜禮懺儀(式如常)
 御代理 最上寺 大僧都察道
 ●廿四日午前七時 服紗衣七條
 ○晨朝禮懺儀(式如常)
 御代理 正覺寺 大僧都博心
 ▲同日正午來集 道具衣大衣
 一番鐘 午後零時三十分 裝束

二番鐘 午後一時 參堂
 ○讀誦正行
 導師 齋願寺 權僧正吉殿
 讀 花岳院 壽國
 伽陀 常照院 照月
 式衆 三尊禮 源興院 亮迪
 唱禮 安養院 滿定
 初ヨリ讀經マテ前日ノ如シ
 次導師降壇直立衆僧同起立
 次賦花籠
 次三尊禮
 次撒花籠
 次聖懺悔 衆僧長跪
 次作梵
 次讚偈 導師登壇
 次嘆德疏 畢テ導師降壇
 次伽陀(十方恆沙文) 大衆長跪
 次唱禮(南無宗祖圓光東漸慧成弘覺慈) 敬大師上酬慈恩大衆唱和
 已下前日ノ如シ

▲同日午後五時 服紗衣七條
 ○日沒禮懺儀(式如常)
 御代理 淨心寺 大僧都大顯
 ▲同日午後七時 服紗衣七條
 ○初夜禮懺儀(式如常)
 御代理 廣德寺 大僧都隨賢
 ●廿五日午前七時 服紗衣七條
 ○晨朝禮懺儀(式如常)
 御代理 稱名院 少僧都順泰
 ▲同日正午來集 道具衣大衣
 一番鐘 午後零時三十分 裝束
 二番鐘 午後一時 參堂
 ○御經供養(庭儀)
 導師 重願寺 權僧正芝超
 讀 雲晴院 龍雄
 伽陀 源流院 天實
 式衆 稱讚偈 月窟院 吞江
 唱禮 源興院 亮迪
 先鳴鐘

次衆式及衆僧三門内左右列立
 次奏樂
 次導師從集會所參向從僧先進十弟子隨從
 次列行
 次導師於三門内倚曲錄
 次止樂 衆人入朝會
 次列讀 同音ニ至テ 鏡鉢ヲ賦ス
 次内座衆僧二列參迎 間迅畢テ下跪 ヲリ先進上堂
 次洒水鼻香
 次導師上堂式衆從僧先進十弟子隨從列行
 次導師入殿左ヨリ右ニ一匝法主ノ高座前
 二於テ三拜畢テ著坐 此時從僧數草座 持經者備說相函 發音之時導師起座 於内陣燒香三拜
 次伽陀 附樂
 次導師登壇
 次洒水
 次十種供養
 次衆僧起立
 次賦花籠
 次散華 散華莊嚴淨光明莊嚴寶花以爲幟 散衆寶花遍十方供養一切諸如來
 次撤樂籠

次開經偈
 次阿彌陀經 割笏
 次後唄 處世界
 次十念
 次嘆德疏 畢テ導師降壇
 次伽陀 衆僧長跪 (自信教人信偈)
 次唱禮 南無宗祖圓光東漸慧成弘覺慈 敬大師上酬慈恩大衆唱和
 次稱名一會
 次德同向 (願以此功德)
 次十念
 次導師降壇左方著坐
 次法主御拜香
 次十念御授與
 次奏樂
 次法主御退堂
 次檀林拜香退堂
 次香宿拜香退堂
 次導師復座
 次止樂

次四弘誓願
次三歸禮
次十念授與
次導師復座默禮

次導師退堂前列衆及從僧先進十弟子隨從
次衆僧退散
▲同日午後三時 道具衣大衣
○大施餼鬼會(式如常)

二六二
御親修
式衆(讀) 淨蓮院 貫明
維那 源興院 亮 迪
以上 大木山 増上寺

聖德太子祭 (十五日)

日本の美術の最初の保護者で有つたと云ふ所から、美術に關係ある重立つた人々が主となつて、聖德太子祭を昨年は四月十一日上野韻松亭に於て催した。今年には高村光雲作の太子像竣成をまつて、同じ太子祭が五月二十七日に行はれたが、來年からは愈聖德太子の忌日である四月十五日を以て、竣成の太子像をかざつて例祭を行ふ筈である。

長命寺辨天の開帳

向島音問の寶壽山通照院長命寺の中に在る庵崎辨天と云ふのは、向島七福神の一に數へられて居るので有るが、今年愈寶壽院と云ふものが出来て四月十一日から二十三日迄盛大な開帳が有り、十五十六二十三の三日間は殊にお稚見が出て賑ひ

て有つたが、今後は毎月巳の日に開帳を行い、不惑辨天同様開運守護の守札と、巳成金の守札を出すのだと云ふ。

上野東照宮大祭 (十六日―十八日)

八重のみがまだ僅かに残つて、大方の櫻は皆若葉となつて了つた四月の中旬に、上野東照宮の大祭は執行せられる。十六日から十八日まで三日間と云ふので有るが、前後の二日は神樂ばかりで、真中の十七日には本當のお祭が行はれる。お祭と云つても、御輿の渡御が有るでもなければ、見世物小屋が集ると云ふこともなく、唯午前十時拜殿に於て管絃を奏し、徳川様のお参りが有つて、七十五菜の供物を供へ、神殿の前に半月の馬印を飾り幟を立て、祭りの儀式が有り、神樂殿では七十五座の神樂と馬鹿囃しとが有るばかり。そして神社から出すものと云つては東照宮御眞筆御遺訓と云ふのと、昔風な石版刷の東照宮全圖と、参拜紀念繪葉書の三つがあるばかりで、お守もなければ、別に参つたからとて御利益が有ると云ふでもないのに、流石は徳川様のお宮丈あつて、参詣の人もなかくに少くない。今年には丁度中の日に可成の地震が有つて、雨が降つて、参詣の人は甚だ少かつたが、それでも敷石の上を渡る足駄の音は、時々寂しげに杉の木立に響いて居た。正面の石壇を下らうとする時丁度タカタンと勇ましい神樂大鼓の音が響き出した。

尙此日芝の東照宮に於てもお祭が行はれるので有る。

観櫻御宴

毎年四月二十日頃、濱離宮に於て観櫻の御宴を催され、兩陛下行幸啓せられ、各宮及妃殿下を始め奉り、各國大公使、同館員、横濱各國領事館員、當時滞在中の各國軍艦將校、日本帝國雇外國人勅任待遇者、同勳三等以上有勳者、同夫人令嬢及び首相以下各國務大臣、在京陸海軍大將、師團長、親任官、同待遇、貴衆兩院議長副議長、公爵従一位、勳一等、一等官、侯爵、正二位、二等官、府香間祇候、錦雞間祇候、勅任待遇、伯子男爵、非役従二位以下四位以上、勳二等勳三等、在京各高等官五等以上三分の一、同夫人令嬢等に宴を賜はることになつて居る。勿論文官はフロックコートにシルクハット、陸海軍武官は正服正帽、婦人は非ジチングドレスにて宴に列することを許されるので有るが、宴は大抵午後二時頃より始まり、兩陛下には午後二時半頃御着登が普通で有る。けれども雨天の節などは大抵行幸啓を御中止せらるゝことになつて居り、今年好天氣で有つたが、風塵烈しかつた爲に遂に行幸啓を御見合せせられたので有つた。そして式部長官代理の挨拶が有つて、式部樂師及近衛軍樂隊奏樂のうちに假立食所に於て賜宴が催された。此日松の茶屋及燕の御茶屋わたりには揚貴妃、普賢象、後普賢象などの櫻は猶今を盛りと妍を競ひ、燕のお茶屋より中の島に架せられたるお傳橋と呼ぶ八つ橋式の橋の上の藤棚、池の畔の躑躅などもほのかに笑を破つて居たと云ふとで有る。

尙此日御宴に招待の光榮に浴せし外人の數は、總計九百五十人以上の多數に上り、帝國ホテルには百五十四人の宿泊客あり、其他の東京ホテル、センツラルホテル等、何れも満員の盛況にて、帝國ホテルの如きは午餐を十一時に繰り上げ、食堂の混雑例ふるに物なく、馬車賃の如きも平常の二倍俵賃も一圓七十錢相場を二圓卅五錢に値上したと云ふ。

観櫻の御宴がすむと、一週間以内に市内の各新聞社通信社の社員二名宛を限りて、濱離宮の御庭拜觀が許される例になつて居る。自分も今年此榮に浴した一人で有つたが、此日櫻は既に大方散り盡して、八重櫻のみが僅に行く春の名残を語るに過ぎれど、池の周圍に咲き誇れる藤、躑躅は今が眞盛にて、燕のお茶屋、鷹のお茶屋透りよりの景色得も謂はれず、塵一つ止めぬ御苑の初夏の姿いと心地よく拜せられた。やがてお庭拜觀の後、一同は御宴の名残偲ばるゝ假造りの會場内でお茶を賜つたので有つた。

松陰神社祭 (二十一日)

二六六

青山の終點で玉川電車に乗換へて、三軒茶屋で下りて田圃道を大分行く、往原郡世田ヶ谷村字若林の松陰神社に達する。四月の二十一日は此宮のお祭で、午前十時から淨祓式について獻饌、祝詞が有つて、遺族を始め参拜者一同が玉串を捧げた後で、更に神社裏手の松林の中に墓前祭が行はれる。今年祭典がすんだ後遺墨陳列所で鳥居何某と云ふ女琵琶師の『吉田松陰』の曲の筑前琵琶彈奏が有つた。

今年も例によりて午前九時より午後三時まで松陰遺墨の參觀を許したので有つたが、防長二州の人々の外、女子高等師範學校附屬女學校生徒附近小學校生等の参拜したものが少くなかつた。けれども露店などは安物の玩具店か駄菓子店ばかりで不思議にも見世物らしいものは一つも見當らなかつた。

孔子祭

所謂釋奠と云ふのがそれで、昔は陰曆二月上丁の日に行つたもの。文武天皇大寶元年二月に行つたが最初にて、寛正の頃まで引つゝいて行はれ、應仁文明以後一時頽れて居つたのを、徳川時代に至り

て聖堂を建て、再び盛んに此祭を行つたもので有るが、維新以後亦行はれず。明治四十年學者哲學者等の有志相謀りて再興してから、爾來毎年四月四五日頃に此祭典を湯島聖廟大成殿に於て舉げることになつたので有る。

本年の祭典は丁度明治復興以後五回目で、委員等は早朝より祭官伶人等と共に、大成殿内外の設備を整へ開扉式を行ひて後、香案の前に整列禮拜し、神劍を孔子神殿の内に奉置すると八時の鐘が鳴る。即ち仰高門と入徳門を開けば、竹田宮殿下を始め、三百の學者博士等集り會す。八時半祭官が十四名の神官と八名の伶人を率ゐて、殿前石階上の定位に列して祝の詞を奏する、ついで委員長が挨拶をする、亂聲調奏樂のうちに祭典が始まり迎神式が行はれる。やがて奠幣奠饌と云つて、孔子像の前には幣として簞に帛を入れ、饌としては籩に果物、簋に米、爵に酒、盤に餅及び菜、豆に鳥魚肉などを盛つたもの各三個、俎に鯛を入れたもの亦三個を供へ、四子即ち顔子、子思、曾子、孟子の前には、籩簋爵豆など各一個宛を供へ、祭主が香案の前に立つて焼香禮拜して後、祝版と云つて、紫檀の板に祝文を貼つたものを傳供より受取つて奉讀する。之がすんで一同禮拜の上、五常樂調奏樂のうちに幣饌を撤し、長慶子調奏樂の間に送神式を行ひ、此にて全く式を終つたので有る。此日先哲遺墨の展覽の外に帝國教育會では講演會が催された。尙此日東京、仙臺、水戸、足利、岡山、長崎、多久、琉球

碧雲臺の大師會

品川御殿山上の益田孝氏邸にては、年々四月頃大師會と云つて弘法大師の祭を催し、天下の數奇者を招いて名畫珍什の一大陳列會を開いて居るが、今年は四月二十三日其第十五回を開いた。

邸内の不動堂には、氏が秘藏の三輪寺の本尊たる不動尊を安置し、其他に大師畫像鳥樞沙摩明王像などを掲げ、色々の供物を備へて、朱衣の坊樣達が讀經供養して居り、本館には主人が二ヶ月餘も苦心の結果に借り集めた天下の珍什名幅は勿論、藏幅家等が進んで陳列したる絶品百數十點を陳列し、京濱の實業家美術家骨董家七十餘名を招いて觀覽せしめ、猶此外に今年は特に邸内の禪居庵にて小野道風の畫像を掲げて道風忌を營み、色々な數奇を凝した茶席掛茶屋などもてなしの外に、菜飯おでん、天麩羅木の芽田樂などの模擬店の饗應が有つたとやら。

玉川の紙鳶會

近頃、毎年四月の末、玉川の遊園地で、九州紙鳶會の團紙鳶と云つて、お互に紙鳶の糸を切り合ひつこの盛んな競技が有る、會は伊東子爵を會長とせる長崎方と奥平伯を會長とせる中津方に分れ

て居り、いつも此双方の間に大競技が行はれるので有るが、今年はそれがなくて唯内輪同志の小競技があつたばかり。それでも玉川電燈では自ら主催になつて各種の餘興を見せると云ふので、散策がために此競技を見んとして四方より集まり來るもの頗る多く、行くも歸るも電車と云ふ電車は身動きもならぬ程で有つた。

初 鯉

目に青葉山ほととぎすの頃には間があれど、もう柳は綠花ちりかゝつて、南の風がそよよと暖かう襟脚を吹き初める頃から、日本橋の魚河岸ではチラホラと初鯉の走りが眼につき出す。昔は初鯉と云つても、綿入を裕に取りかへる所謂更衣への舊曆四月の上旬が、丁度鯉魚の捕れ始めであつて、それも目方にしたら四五百目を頭の若魚を賞美したものであるが、今は大抵一貫目もあらうと云ふ古背鯉が、初鯉の名の下にずんぐんとお臺所へ飛込む。

例へ一張羅の布子打殺して了つても、走りの初鯉に舌鼓うたぬと云つては江戸ツ子の肩身が狭めえやとあつて、時あつては一片の魚軒に千金も抛つて了ふと云ふは決して珍しからず。天明の頃に石町の富豪富林治左工門が渡邊某に御馳走した初鯉の走りは、一尾の價が二兩三分であつたと云へば、一

兩で二俵の米が買へたと云ふ時代のことから、今の相場にして一尾がざつと三十圓。それから次第に初鯉の價が下つて來たと云ふが、それでも天保時代に初鯉の握壽司一片が天保錢一枚で丁度百文。百文と云ふとたつた拾錢じやないかと云ふ人もあらうが、丁度其頃百文あると、晝飯食つて立派な芝居を見て一日ゆつくり遊べたと云ふから、初鯉の値段が大抵想像が出來ぬでもない。

其頃はまだ今のやうな交通機關の便利がない時代のことであるから、所々方々から花のお江戸をめぐけて陸と云はず海と云はず、初鯉が盛んに飛んでは來るものゝ、鎌倉から馬の背を泳いで來るのが一番早いので、本場と云へば必ず鎌倉と決まつて居つて、今でこそ大抵目方で相場が決まることになつて居るが、其頃は大きつばの眼分量で、八尾宛の一株で幾ら〜と云ふ間もあらばこそ、羽が生えて江戸中を飛歩いたもので有る。

と云ふのは抑何う云ふ理なんだらう。初鯉と江戸ッ子、何う云ふ處にどんな因縁と來歴が有るので有らう、と江戸ッ子ならぬものには先づ其疑問が起る。俳人に云はせたり、其道の通に説かせたら、さぞ勿體ない理屈もあらう、議論もあらうが、それはまゝ御勝手として置いて、さて江戸ッ子の語る所によると斯んなことも有るさうな。

今は昔天文六年の夏、北條氏綱が相州小田原の近海で小船を浮べて、酒酌み交はしつゝ、鯉釣を見給

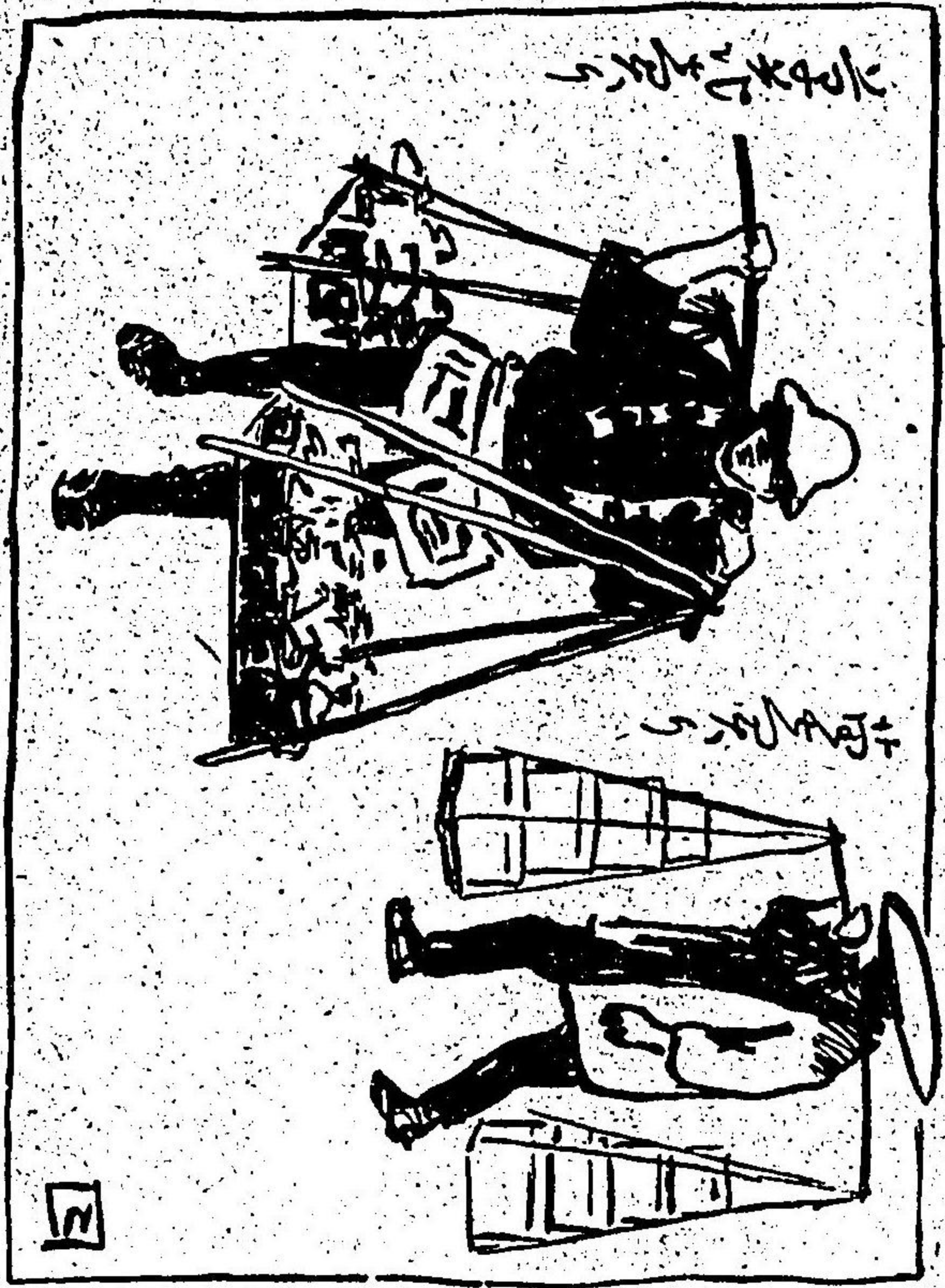
ふ折も折、ヒラリと船の中へ跳り込んだは小さからぬ鯉の一尾、勝負にかつをは疑もない目出度、早速料理して家運を祝さうとあつたにたがはず、程なく上杉朝定を討つて見事な勝利を得たが源で、其後は戦の首途のお肴には必ず鯉を用ゐたと云ふ歴史の意味もあれば、初鯉の捕れ初める時期になると、海月に似た烏帽子の様なものがかかり〜と濱邊へ浮いて來る。これが即ち鯉の烏帽子と云ふもので、初鯉に限つて之を頭の先に戴いて居る所から、元服の烏帽子をつくりだすと云ふので、何時しか鯉のことを烏帽子魚と云ふ様になり、鯉と勝男と音の似通ふ所から、武家時代このかた次第に珍重するやうになつたのだとは、眞偽をよそにしても、滿更關係のないことでも有るまじく、兎に角漸次に斯んな意味も加はつて愈もてはやされたもので、それが引つゞいて今となつても本當の江戸ッ子の間には難有がられて居るので有らう。

- 鎌倉を生て出でけむ初鯉
- 大勢の中へ一本松魚かな
- 目に青葉山ほとゝぎす初鯉
- 地を走る物とはさけじ鯉賣
- 初鯉觀世太夫が端居かな
- 芭蕉
- 嵐雪
- 素堂
- 曉臺
- 蕪村

東京年中行事

是でこそ鮪に死なれぬ初鯉
 我宿の遅れ松魚を月夜哉
 初鯉松も板も走るなり
 江戸も今日一筋道や初鯉
 鎌倉や日蓮去つて初松魚
 曉の第一聲や松魚賣り
 初松魚膳に對ふ男裸なり
 都かな朝湯朝酒朝松魚
 改鑄の銀貨は小さし初鯉
 初鯉頼朝旗をあげにけり
 初鯉價問ふ恐を笑ひけり
 初松魚斗酒ありと云ふ妻嬉し
 宵越しの錢もたぬなり初鯉
 初松魚是れ村正と銘うたん

千 鷄 ゆ 一 格 望 畊 冬 同 子 茶 宇 一 蓼
 狸 雨 く 蓑 堂 東 畝 月 規 風 橋 茶 太



کالو کالو کالو

کالو کالو کالو

۱۳